
勇者の剣と黒き槍

victor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の剣と黒き槍

【Nコード】

N6970U

【作者名】

victor

【あらすじ】

「私たちはこの国を救ってもらう勇者として、あなたたちを召喚しました」

人嫌いの牟田吉夫と親友の緋山明、彼らと知り合った二階堂恵美は、その日の帰り道に異世界アースに召喚されてしまった。彼らは、異世界で暴れる魔王を討伐するために旅に出ることになる。

正義感あふれる明は勇者となり、彼のことを放っておけない吉夫は彼について行き、恵美は仕方なく彼らに付いていく。

同じ頃、明の幼なじみであり、恵美の親友である九条鈴音も異世

界に召喚された。それも、勇者と対する存在
吉夫と甘美な殺し合いを望む。

魔王側に。彼女は、

日常

「ふあ……」

「吉夫があくびをするなんて珍しいな。夜遅くまでなにをしていた？」

田倉高校の制服である学ランを身にまとう二人の少年の内、あくびをしている少年 牟田吉夫は女性のように線の細い顔立ちと、髪と同じように黒く染まった双眸を彼に向ける。同性である少年は一瞬ドキツとしたが、あえて動揺しないようにポーカフェイスを演じる。

「明の小さい頃に書いた作文について、おれは全員に発表するかしないか悩んだ」

「悩むなよ！ いや、その前にどうして僕の作文についておまえが知っている！？」

「鈴音から教えてもらったのさ」

「り、鈴音め……覚えていろよ……！」

ここにはいない幼なじみに、こっそりと復讐プランを練る少年の名前は緋山明。あちこち跳ねている赤っぱい髪と紫色の瞳、整えられた顔つきはまさしくハンサム。女子たちから、普通のようにけっこうモテるモテモテ君。彼女たちからは毎日のように告白されているがすべて、本気で好きになれる人じゃないといけない、と返答しているおかげで余計に女子たちのハートに火をつけてしまう始末。女子たちにとって毎日が戦争で、猛烈アタックして来るほどの人気がぷっり。

「ふあ……エロゲーをしていたのさ」

「さつらとんでもないことをありがとう！？」

アニメ、マンガをこよなく愛する吉夫がとうとうエロゲーまで手を伸ばしてしまった。明はそのことに頭を抱えなくなるが吉夫だからいいか、という理由で追求しない。彼にだってさまざまに興味が

あることぐらい承知している。

2人は軽口を叩き合い、昨日のこと、学校のこと、授業のことについて話していると、

「離してください」

という少女の声と、

「ああん？ 人に謝っただけでは足りないんでよお、だからよお、体で払えつつうの」

という聞いただけで相手が下種で、野郎だとわかった明は目の前にいる三人の不良らしく人物と、田倉高校の制服を身にまとうセーラー服の少女がいた。迷うことなく彼は突入しようとするのを、肩をすくめる吉夫はまたフラグを立てるか、と予想しながら彼を止めることなくそのままにさせる。前までは明を止めていたが、彼の困っている人を助ける、という明病にかかったせいで吉夫は仕方なく彼を手伝うことに。

「そこまでにしたらいいだろ？」

「ああん？」

不機嫌な顔を明に向けた髪型がリーゼントという不良は彼を見ると、次に吉夫のほうを見てからああ、こいつは女だ、と見た直後に口にした彼は後悔することになる。

「……殺してあげようか？」

周囲の温度が氷点下並みまで下がったぐらい空気が寒く、これを何度も感じたことのある明は身震いをする。彼だけでなく、他の人たちも身震いをいてガタガタを歯を鳴らしているが吉夫には関係ない。自分のことを女と、呼ぶ連中には必ず制裁をしなければ気が済まない吉夫が一步だけ、前に出るとひいっとリーゼントは悲鳴を上げる。

「さあて、なにをしてあげようかなあ？」

「はっ！ 女になにができるんだよ！」

強がりを見せ付けたリーゼントに吉夫はにやつと不敵に笑い、逃げたくない いや、逃げられないリーゼントは彼に殴りかかろう

とするが、自ら距離を詰めた吉夫は彼の懐に入ると重い一撃を彼にくらわせた。喧嘩慣れしているリーゼントであっても、いまの吉夫は女呼ばわりされたおかげで普段よりも強くなれる、という男子のみに対する特性をもっている。

「てめえ、山さんになにを　ごがっ」

リーゼントの部下が彼に殴ると予想していた明は先に彼を蹴りにくらわせる。参戦しようとしたもう一人は吉夫と明の顔を見比べていると明が忠告した。

「いますぐに僕たちの前から消えないと　あいつ、おまえまで手を出すぞ？」

「お、俺は男に興味をねええ!!」

「あ、やべ。こいつ、死んだわ」

「なにを言っているんだよ!?　げぼっ」

明と会話していた不良は吉夫の気配に気付くことなく、後ろから尻を蹴られた不良は明に飛ばされる。はあ、とため息をついた明は飛ばされるそいつを殴っておいた。あっという間に終わった喧嘩。それも一方的な勝利で収めた吉夫と明はこのように慣れていた。たので、彼らの日常の一部である。

「あれ？」

「どうした、明?　……ああ、さっきの女の子のことなら、おれが不機嫌になった時に逃げていったぞ」

質問する前に吉夫から回答をもらった明は納得し、どうして質問することがわかるのさ、と問いかける。吉夫は何年おまえの相棒をしている?　と返すと今度は何も問いかけない。何年も一緒に不良にからまれている女の子を助けたことのある明は、これから起こるイベントに頭を悩ます。

そう、いつもの告白タイム。

だから、女の子にモテるのだ。

「あなたのことが好きです!!」

と、教室の前で朝助けた少女から告白される明はいつものようにごめん、と返すと、少女はそれでもあなたのことをあきらめません!! と告げた少女は自分の教室に戻っていく。

「おー、さすがは明、女の子にはよくモテるねえ」

教室に戻れば、明の幼なじみである九条鈴音と会話をしていた吉夫が冷やかすと、彼はやめてくれよ、と返して鈴音のほうに向く。

人懐っこい笑みをしている鈴音の髪は吉夫と同じように黒く、目も漆黒のように黒いため、鈴音と吉夫が並んで歩くと兄妹に見間違われるほど二人の顔つきは似ている。髪を後ろに束ねただけでシンブルな髪型だが、何故か鈴音にはよく似合っていた。

「なんや、あつきー。うちを襲う案について考えると大胆やな」

「誰がおまえなんか襲うか!! そもそも、おまえを襲う前に僕が殺されるだろう!？」

「もちろんや、うちには誰にも指一本触れさせんよ?」

人懐っこい笑みを消した鈴音は獰猛な笑みを浮かべると、明は絶対に彼女には逆らわないと、再確認をした彼は心のなかで大きくため息をついた。鈴音に逆らうこと＝死ぬ、という方式が明の頭の中に刻まれているのでこれ以上何も言わないでおく。

「それにしても……あつきーはまたフラグを立てるとは罪な男やなあ?」

「う、うるさい! 僕が好きでフラグを立てているわけではない!」

「だよな、こいつの夢は」

「うあああ、黙れ吉夫!! それだけはタブーだ、タブー!!」

吉夫が彼の幼い頃の夢について語りだそうとすると、必死に阻止する明に鈴音はくすくすと微笑み、吉夫はにやにやしている。

ちなみに、明が小さい頃に書いた作文には、僕の夢は正義の味方になることです、と小学一年生の時に堂々と全員の前で発表したことがあるため鈴音からあつきーの夢は　と口にされたら彼の人生はそこで終了。あまりの羞恥に人前を歩けなくなるほど、明は自分が書いた作文を思い出すだけで死ぬほど恥ずかしくなる。

だが、正義の味方と幼き明が願っていたことは、現に不良たちからまれている女の子たちを救う、ということだけで叶えられている、と彼は気付いていない。もしくは、気付いていても、あえて無視しているのか。どちらにしても、彼は正義の味方を続けるつもりなので、不良たちとの喧嘩は日常茶飯事である。

「あ、そうそう。よっしーには大切な話があるからちいと耳を貸してくれん？」

「ん、別にいいぜ」

吉夫の耳元まで顔を寄せる鈴音の姿は、まるでこれから頬か耳にチュウするようにしか見えず、目の前でこのようなことをされる明は彼らから視野を外す。正直、この二人がそろうだけで人目を集める美貌と街を歩けば、男女関係なく振り向かせてしまう顔立ちをしているから、あつという間にクラスメイトたちの視線を集めた。

「……ということや、どうやよっしー？　興味あるやろ？」

「余計なお世話だ。アホ」

「実は興味津々やったりするやないか？　よっしーにはそろそろ必要なお年頃だもんな」

「おまえはおれの姉さんかよ」

「んー、よっしーがうちを姉さんと認めてくれるなら、うちはよっしーの姉さんになつてもええけど？」

（う、なんという魅力的な誘いだ。でも、こいつとだけはそんな関係になりたくないから、死んでもごめんだ。姉さんという立場にいれば、きつと鈴音にからかわれるが……それもいいかもしれない）

鈴音が姉という立場になれば、きつといろいろとおもしろくなれそうと予測していると、小悪魔の笑みを浮かべる鈴音に、またからかわれていると気付かされた吉夫は心の中で言葉をしまっておく。

「……というか、さっきの件については本当か？」

「む、赤面してもいい場面やったのになあ」

「おい、さつらと本音を漏らすな」

「冗談冗談。でな、やっぱりよしーも男の子だから気になるんな？」

「まあ……な」

鈴音の視線から逃げるように顔をそらす吉夫にくすくすと笑う鈴音、わずかに頬が赤い吉夫に明はこれはおもしろいことが起きそうだと予想していた。

放課後の田倉高校のある教室で、吉夫と明はとある人物を待ち合わせをしていた。鈴音から、その人物は部活をしているからしばらく時間がかかるかもしれない、とあらかじめ伝えられているので、二人は会話をしながら、鈴音の親友を待っていた。

なぜ鈴音の親友かといえば、吉夫には彼女がいないから、せめて彼女になるためにまずは友達から始めようということで、鈴音の親友はあっさりと彼女の誘いに乗った。鈴音の親友は彼氏彼女の関係よりも、友達という関係を結びたいという意味で誘いに乗っているが、鈴音は、これでよしーは幸せになれる、と意味ありげな言葉

を呟いていた。

そして、明が吉夫と一緒にいるのは会話のサポート役。吉夫はどうも、異性に対して興味などまったく見せずに素っ気ない態度で対応しているから、彼と会話できる明がいないとまったく話は進まないというのだ。基本的に吉夫は誰にも興味さえ示さないから、唯一会話できる明と鈴音がいないと、話など出来ない状態である。あとは、鈴音に報告しないといけない役を買っているため、明にとってはせいぜい彼らを観察するか、会話を成立させるかしかないので、けっこう楽しめるかもしれない。

「遅れてごめんね、吉夫くん」

ガラッと教室のドアを開けた少女に息を呑んだのは明で、吉夫は目の前に立つ少女を見ているとかわいいな、と心の中で密かに評価した。前髪を目元まで短く切りそろえ、大きな瞳にかわいらしい顔立ち、まっすぐに伸ばされているストレートな髪はしっかりと手入れが行き届いており、髪には花のかんざしをつけていた。彼女に着物でも着せたら、大和撫子という言葉がとても似合いそうだ。

だが、彼女の背中に背負われているのは、細長いなかのおかげでせつかくのかわいい、という雰囲気万台無しにするが、ギャップ萌え、というのを起こしてしまうかもしれない。

「鈴音の親友は、剣道部部長の二階堂恵美か」

吉夫が隣にいる明にポツリと呟くと、はっとした彼は彼女が鈴音の親友であることに我が目を疑ったが、すぐに恵美から、

「私のことは知っているよね？」

と、確認された二人に対して吉夫は、

「鈴音の親友だろう」

と、返せば、花が咲くのような笑顔で微笑みを向けられた吉夫はつい目をそらす。なにせ、恵美という存在はともかわいく、あの笑顔を向けられたら同性であつても、ズキーンと心臓を撃たれるだろう。

「なあ、恵美」

「メグって呼んで、みんな私のことをそう呼ぶから」

「恵美は鈴音からなにかしろ、ということ言われていないよな？」

「ううん、なにも言われていないからね。ただ、私は吉夫さんと友達になればいいと思うているし、恋人関係になるつもりとかまったくないから。あと、メグだからね」

かわいらしい顔立ちとは裏腹に意思の強そうに瞳を直視した吉夫は、ただかわいいだけの人じゃないよな、と認識した。彼女は田倉高校の部長であり、全国大会まで個人で進出したことのある実力者だから、と安堵の息をついた吉夫は隣で固まっている明に呆れた。

「へえ、吉夫くんって見た目よりもおもしろい人だね」

「うるせえ」

「あ、これとか似合うかもしれないから……どう？」

「あ、いいかもしれないな　って、おれはなにをしているんだああああ！！」

心の奥から叫んだ吉夫のことなど気にすることなく、恵美は彼が身にまとっている服　田倉高校の女子の制服を眺めながら首をかしげる。そう、吉夫は田倉高校の女子の制服を着ているのだ。それも、恵美の制服である。逆に恵美は彼の制服を着ている。

「なにつて……コスプレだけど？」

「なにがどうやってコスプレになるんだよ！！　おい、明、なんとか言えよ！！」

この場で唯一まともな明に話を振ると、彼は吉夫の女子バースيونすごく似合うから何もいわないぜ、と口にした彼はもはや恵美の

毒牙にかかった様子。

なぜ、こうなったかと言えば、恵美が吉夫くんって女の子っぽい顔をしているから、もし女装をしたらどうなるだろう、と何気ない一言で始まったのがことの発端であった。女装だけは嫌だ！と、まっさきに主張した吉夫に明はおもしろがつて、これは僕たちだけの秘密だからいいじゃないか、女装やつてもいいだろ？と、ぬかす明を殴り、恵美がなにか言い出す前に話題を変えようとすると、狙っていたかのように、吉夫の携帯にメールが届いた。

メールをするのは、明か鈴音ぐらいの二人しかおらず、後者しかない吉夫は恐る恐るメールを開いてみれば、メグみんを泣かせたらよっしーを泣かすと短い文しか書いておらず、恵美を見てみれば、目元に涙をためていた。だから、吉夫は仕方なく恵美の女装に付き合うことになるがこれは自分のためであって、けっして恵美のためではない。

それから、恵美は最寄りのランジェリーショップに入ると男性である二人は視線をたつぷりと浴びるが吉夫は気にせず、明は泣きたくなった。恵美は彼らを関係者以外立ち入り禁止区域のプレートが書いてあるドアをくぐり、そこに広がる世界に男性二人は言葉を失う。

そこにいるのは、さまざまな年代の少女たちが多種多様の服コスプレという名の服を身にまとっていたから、吉夫と明はここが男子禁制ではないか、と即座に恵美に確認すると彼女は、もちろん、だってここは女の子のパラダイスだよ？と笑顔で教えてくれた時に引き返そうとしたがすでに手遅れであった。

恵美はいつの間にチャイナ服を手にして、うふふ、これを着てくれないと鈴音に私を泣かせた、と伝えるからと脅迫された吉夫は彼女から服を受け取り、脱衣室で着替えた。その間に恵美はカツラ、カラーコンタクト、香水などを用意していたことに明は吉夫に同情してしまう。

数分後、脱衣室から姿を現した吉夫　　のはずなのに、そこには

牟田吉夫という人物ではなく、美人がいた。男とは思えないほどすらつとした細い脚は艶やかで、雪のように白い肌と赤いチャイナ服はどちらの色もしつかりと強調させており、腰まで伸ばされた髪カツラをかぶっているのにも関わらず、そこには一同の注目を集める胸だけが残念な美人がいた。

彼の姿に恵美は鼻から血を流して興奮状態に、明は前かがみになるほどのインパクトがあつたのは余談である。それと、明が鈴音に彼の女装姿の写真を送ると、これはええ！！これは最高や！！という返信をもらったのも余談である。

これで終わると吉夫が思っていたが、恵美は彼にじゃあ、次はこれ！あ、次はこの衣装かな？これよりもあれかな？といったの間に、吉夫は恵美の着せ替え人形になっていた。

極めつけには、吉夫と恵美の制服と取り替えるということまでになつてしまう。

しかも、お互いの制服がぴつたりとサイズが合うため、着ていてもまったく違和感などなく、普通に田倉高校の制服　恵美の制服はいい匂いがするため、これが女子独特の香りか、と納得した吉夫は甘い匂いに頬を赤く染めてしまう。

それは吉夫だけではなく、恵美も彼の制服を着ているため、汗くさい、と彼女は予想していたがそれほど汗くさくなく、落ち着く匂いがしているおかげで、これが彼の匂いだとわかると彼女もまた、頬を赤く染めてしまう。

この二人の反応が初々しく、明はもし、うまくいけばカップル成立だな、と確信した彼は鈴音にメールすると、よっしーが幸せになれば、うちはそれだけで幸せや、と一分もしない内に返信された。明は鈴音が彼に対してどのような感情を抱いているのか知っており、自分の恋をわざと他人に譲る鈴音の行動が理解できない彼は大きくため息をついた。彼女がその気になればうまくいくのに、あえて鈴音はそうすることなく、いつも彼に彼女を推薦していたのを明は知っており、その度に吉夫は必ず拒否するのに、今回のみ　恵美だ

けは受け入れた」彼女のことが気になるという意味。

「鈴音の気持ちに気付いてやれよ……」

ポツリと呟いた明はここにいる少女たちのコスプレ姿をしっかりと目に焼き付けた。

「あー、楽しかった」

「おれはもう嫌だ……」

「僕も吉夫と同じさ……」

ランジェリーショップから出た吉夫、明と恵美はくだらないことをしゃべりあっているが、いまだに吉夫は女装姿であるため、たつぷりと注目を浴びている。いまの彼は最後に着た恵美の制服を身にまとっており、カツラもそのままのため、どこからどう見ても女性にしか思えない。恵美は彼の制服を着ているせいで違和感があると思うが、背中に背負う竹刀のおかげで凛々しい男子にしか見えない。

「ところで……吉夫くん、その人だれ？」

「おおい！？ いまごろかよ！？」

「冗談だからね。ええーと……ひやまあきらん 緋山秋欄」

「秋欄って誰！？」

「さあ……？」

「よ、吉夫、メグさんになにか言えよ」

話を振られた吉夫は彼のことなど気にすることなく、じつと目の前の空間を穴を開けるように見つめる彼に疑問を抱いた明は、彼が見ている先を見てみた。恵美も二人が黙って見守る先を見てみるがそこにはなにもなく、気のせいかと吉夫が観察を終えたように歩きだそうとすれば、三人の足元には見たこともない模様　魔法陣
といえは正しいのか、それが彼らの逃げ道を防ぐようにぐるりと周

罫を囲い、魔法陣は輝きだすとすぐに吉夫と明は、恵美を外に出そうと行動を起こすが体が思うように動かない。

「よっしー、あっきー、メグみん……」

魔法陣の外には何故か鈴音がいて、泣きそうな顔でこちらに救いの手を差し伸べてきて、明は彼女の手を取ろうとするがやめた。鈴音が手を伸ばしている相手は吉夫で、彼も彼女に手を必死に伸ばそうとしているが届くことなく、それでもお互いを求めるように伸ばされた手は、ほんのすこしだけ触れた。後もう少しで届く、あともう少しで鈴音に、吉夫に届くはずだったのに 彼の姿は唐突に消えた。

さっきまでそこにいた明の姿はどこにもなく、恵美の姿もどこにもいなく、ほんの少しで届きそうにいた吉夫の姿がどこにもいない。「よっしー……！！」

愛しき彼の名前を叫ぶ鈴音は、彼を連れて行ったなにかが許せず、すぐに行動を起こした彼女は信じたくないことを心の中で否定しながら必死に彼の姿を探し求める。

奪われた日常

「なあ、メグみん。彼氏とか欲しいならうちがええ人を紹介してはるよ?」

「い、いらない!! 私には剣道で精一杯だからそんなのに時間がな
いよ」

「嘘つきい。ほんまは誰かと付き合いたいやる?」

「り、鈴音りんねには関係ないよ!!」

田倉高校までうちと一緒に歩く少女は、顔を赤くしながら否定するのは親友 二階堂恵美、通称メグみんはうちを睨みつけてくるけれど、メグみんのかわいい顔ではまったく効果があらへん。前髪を目元まで短く切りそろえ、大きな瞳にかわいらしい顔立ち、まっすぐに伸ばされているストレートな髪はしつかりと手入れが行き届いて、髪には花のかんざしをつけているのがメグみん。うちはメグみんが誰かと付き合いたいとずっと前から気付いていたから、メグみんに彼氏作れば? と気軽に問いかけるのに、絶対に嫌!! と拒絶するからなあ。ま、うちとしてはメグみんが彼氏さえ作れば、からかえる要素とかたつぷり増えるから……ほんま、彼氏いらんのか?

「鈴音、私には部活があるからね」

「知っているよ、だからこそメグみんにはメグみんを支える人が必要なんや」

「私にはいない!!」

メグみんが背負う袋には竹刀が入っているので、それを見せ付けるようにうちの前に差し出した。メグみんは田倉高校の剣道部の部長で、個人で全国大会まで進出した実力者。彼女の強さの秘密は毎日努力を積み重ねて、必死に続けた結果がいつの間に誰よりも強く、気高い存在になっているのは……うちだけの秘密や。

「でもなあ」

「いい加減にしないと私、怒るよ？」

「よっしーは他の男子よりもなかなかかつこええで？」

「よっしー……？ あっ、あなたの好きな」

「うちが好きなのはあっきーや」

メグみんの言葉を遮ったうちはあえて、自分なあっきーのことが好きだと思い込んでおく。消沈するメグみんには悪いけどな、うちはいつもあっきーに守られてきたからなあ。だから、あっきーのことが好き、そうしておくほうが胸を締めつける痛みからそらす。

よっしー、メグみんにはいつの日からか彼のことが好きとばかり話していたから、彼女はうちがよっしーのことが好きと思われる。そうであつてもええ。

でもな、うちにはできん。うちはあっきーに守られていたから、いままで守られていた分だけあっきーを守りたい。そのためにうちは護身術を覚え、うちと相性がぴつたりの槍術についていろいろと学んだおかげで、よっしーとあっきーが二人がかりでもいまのうちは勝てへん。

「そう……」

落ち込むメグみんを無視することにしたうちはあることをひらめき、それを彼女に提案すると予想通りに赤面する。よっしーと付き合えば？ ということやけど。

「絶対に、絶対に嫌よ！」

「でもな、よっしーは他の男子よりもましやし、他の女子たちのことなんか見向きすらしないで？」

「……本当？」

おっ、これはいけるかもしれへん。

「よっしーはうちと一緒にいる時、美少女が隣を歩いても振り向きもしなかったからな」

「ある意味すごいね」

「なっ？ もしも、よっしーがメグみんと付き合うことになったら、メグみんしか見ないかもしれないから……浮気するよりもいいやな

いか」

「うつ……」

「メグみんも、もし付き合うなら自分しか見てくれない男性がええやろ？」

沈黙するメグみんはゆっくりと首を縦に振ると、うちは人目も気にすることなく彼女に抱きついた。これで…… よっしーとメグみんがうまくいけば、うちのこの胸の痛みも消えるはずなんや。

こうして、うちはよっしーとメグみんを付き合わせよう作戦を開始した。

放課後、うちはよっしーとあつきーにある教室に待機するよう指示しておいて、メグみんがそこに入るのを見届けた。

すると、すぐにあの三人が仲良く談笑しながら教室から出てくる。よっしーとメグみんが普通に会話をしている光景なんて、予想すらしていなかった。

「……嘘やろ？」

よっしーがあっさり打ち解けるなんて、夢でも視ているような気分や。うちでも打ち解けるまで二週間もかったよっしーがメグみんと楽しそうに話をしているのは……信じられんな。嫉妬してしまふなあ。……嫉妬？　うちがメグみんに嫉妬しておる？　それとも、人嫌いのよっしーが出会ったばかりのメグみんと仲良く一緒にいることが？

わからん。わかりたくない。

うちはあつきーによっしーとメグみんのサポートを任せたのに、

あつきーがいなくても会話が成立しているから、これでは意味がないやないか！！でも、二人つきりにするよりもマシやから……あつきー、そこら辺はよろしくな。

うちは心の中でもややもやる気持ちを振り払うために、よっしーと始めて出会った5年前のことでも思い出す。5年前ということは、うちとあつきーが南丘中学に入学した頃やな。あつきーとはほんま、腐れ縁という言葉が似合うぐらいずっと同じ教室だから、まだカッブル扱いされていたなあ。

おっと、話がずれるところやった。

よっしーが南丘中学に転校してきたのは、一ヶ月を過ぎた辺りぐらいやったな。うん、あの頃は美男子が来る！とか、ハンサムだつてよ！とか、よっしーが来る前までそんな感じの噂が流れておったな。で、実際にこちらに來た少年　牟田吉夫はほんまに、美男子やった。漆黒に染まる髪と目、女性と見間違うほどの線の細い顔立ちをしていた彼に、うちはついつい見惚れてしまった。

彼はうちの心境など知ることなく、うちの隣に空いている席に座ることになったせいで、女子から睨まれるはめに。それでも、うちは気にすることなく、彼に話かけたけど無視された。一度だけやない。何度も何度も、よっしーに話しかけても無視されたことは今でも思い出せる。

休み時間にはよっしーの周りに人だかりができてしまい、うちも彼のことにについて興味あったからそこに参加していたら、よっしーは最初に質問してきた人に、近づくな、と拒絶していた。呆然とするクラスメイトたちのことなど気にすることなく、彼は教室から出て行った。

それからというものの、クラスメイトたちが彼に話しかけても無視されるか、睨まれるかの行動をいていたおかげで、よっしーはうちらとの間に見えない壁を築き上げていた。でも、うちだけはお構いなしに、よっしーに話しかけたり、質問したり、からかったりしていたため、彼はうちだけにしか聞こえない小声でバカ鈴音と、うち

のことを呼んでいた。不思議と腹が立つことはなかったから……うちはバカ鈴音と呼ばせるかわりに、よっしーと呼ばせてなんて言っていたなあ。それまでは吉夫と呼んでいたから……ある意味、あの時にうちとよっしーの関係はクラスメイトから友達にステツプアップしていたことは確かなことやな。

せっかく、友達になれたからうちは幼なじみのあつきーこと緋山明を紹介すると、二人そろって同じことを口にした。鈴音はバカだ。と。苦笑し合う二人はそれだけで打ち解けたのか、うちのことについて議論しだすことになった時は彼らにアホ！　とつい叫んでもうた。でも、あれだけ他人を受け入れるのに時間がかかるはずのよっしーがあつきーとあつきーと打ち解けたのは……うちのせいかな。「え、あ？　メグみん？　どうして二人をそんなところに連れていくの！？」

気が付いたら、メグみんはよっしーとあつきーを連れてランジェリーショップに入るのを目撃したうちはすぐに追いかける。中に入ると、うちはいつもメグみんと一緒に来る店だと気付くと、安堵の息をついたうちは店員さんにメグみんはどこですか？　と聞いてみれば、いつもの場所ですよ、ニコニコしながら答えてくれた。

いつもの場所。そこはうちとメグみんが店員さんから、会員になれば二割から三割も安くなりますよ、と誘われて会員になってみれば　あれ、やったからなあ。おそらく、メグみんはよっしーをあそこで辱めるに違いない。はずかし

関係者以外立ち入り禁止区域のプレートが書いてあるドアをくぐったうちは、もう二度入らないと決めていたここに足を踏み入れてしまう。　コスプレ広場に。

コスプレ広場というのは、ここにいる少女たちといい歳した大人の女性などがバニーガール、看護師、アニメのキャラクター、などなどの姿をしているからコスプレ広場。なにせ、この店長は、ちよっとした趣味の人だから……会員登録した人たちは全員彼女に写真を撮られてしまう運命にある。あー、よっしーはここで女装され

ること間違いなしやな。

おっ、噂していれば……いた。ぶっ、あ、あれはよっしーなんか……？ 雪のように白い肌に身にまとう赤いチャイナ服を着た人が脱衣室から出て来て、ここにいる人たちの注目を集めてしまうほどの美しさがあった。胸だけ残念やけど……あの女性のように線の細い顔、うちとそっくりの顔立ちやから……うん、あれはよっしーや。カツラをかぶっけていてもあれはよっしーや。

「嫌や……忘れよう」

中学校生活を3カ月も過ごしていれば、うちとあっきー、それからよっしーの3人でいることは当たり前のことになったから……出掛ける時もいつも一緒だったのは忘れられない。だっていまでも、うちらは一緒に出掛けているから。

でな、よっしーはうちとあっきーとしか話をしないことに気付いてしまい、うちはある日、彼にどうしてうちら以外の人たちと話をしないの？ と聞いてみたら、じゃあ、おれと出掛けたら教えてあげる、とうちを誘った。あっきーは、たまには二人でデートでも楽しんできたなら？ なんて言うていたから赤面してしまった。デート、うっ、いまでも思い出すだけで恥ずかしいなあ。幼なじみのあっきーとはよく出掛けていたから、デートとは認識していなかったうちはこれまで、あっきーとデートしていたと考えると……あれ？ 恥ずかしくない？ よっしーの時だけ恥ずかしかった……？

ええい、考えても仕方ない。もう過ぎたことをうじうじ悩んでも意味がない！！

でな、うちとよっしーは休日に遊園地に行った。そこは何度か3人で行ったことのある場所だったのに、よっしーと2人きりで遊ぶ遊園地は格別やった。うちらは日が暮れるまでたっぷりと遊んで、すっかり本来の目的を忘れていたうちは、よっしーがうちと観覧車に乗った時に彼は語りだした。

「（前まではおれは鈴音や明のような友達がいて、あいつらと軽口を叩きながらいつもと変わらない日常を楽しんでいた。もちろん、

いまのように他人を拒絶すらしないで、当たり前のように他人を受け入れていたおれはバカだったかもしれない。まっ、いまでもバカだけど。

おっと、話がずれたな。

それで、おれはいつものように親友と呼べる友達から、放課後に校舎裏に来いよ、なんていつもとかわからない調子で誘われたから、放課後にそこに行ってみたよ。あの頃の親友とおれは、どちらか誘うとすぐに出掛けるというタイプだったからな。

放課後の校舎裏は誰も近寄らなくて、人気なんてまったくなく、薄暗くてよく見えない場所だと知りながらも、おれは待ち合わせていた親友と知らない奴らがいた。親友はおれが来るのを待っていたように、知らない奴らにやれ、なんて命令するといきなり殴りかかってきた。訳もわからないまま、殴られていると、そいつらはめえを殺す！ とか、なに女子にモテているんだよ！ とか、男らしくしてやる！ とか、実に身勝手な理由で殴られていたよ。ああ、それと親友はおれになんて言ったと思う？

おまえは俺の友達でもなんでもない。ただのクズで、奴隷なんだよってね。

気が付いた時には、おれを殴っていた男子全員がそこにいなくて、親友だった奴は顔が腫れていたよ。

その日から、おれは誰も信じることもできなくなった。

なのに……ここに転校してきたら、とある人物はしつこく話しかけてくるし、ちよっかい出してくるし、いたずらしてくるし……抵抗するのも面倒だったおれはおまえを、九条鈴音を受け入れるしかなかった。まったく、転校する前に誰も受け入れない、誰も信用しないと決意していたのに……どこかのだれかさんのおかげで台無しだよ。

九条鈴音はただのクラスメイトとしていて欲しかったのに、友達になってしまったおかげで明まで仲良くなってしまうたじゃないか全部、おまえのせいだ、バカ鈴音」

「うちのせいでええやないか。うちはよっしーのことを見捨てることができなかったから」

頬をほころばせるうちは、どうして他人を避けるのか、どうして見えない壁を築くのか、どうしてうちとあっきーを受け入れたのかやつとわかった。うちがしつこく彼に救いの手を何度も差し伸べて、何度も彼に拒絶されてもあきらめきれなかつたうちに負けてしまい、うちのことを信じてもいい、と思ったのだろう。

「ふふ、この頃からよっしーの姉さんになってもええ、なんていい出していたなあ」

おつ、あっきーからのメールや。なになに、吉夫とメグさんの2人をくつつけて鈴音は平気か？ 当たり前や。うちはよっしーの姉さんで、よっしーが幸せになればそれだけでうちも幸せになれる。弟扱いしていることはよっしーには秘密や。

「なあ、よっしー。うちはな、よっしーとメグみんな付き合うことになっても、うちはずっと、ずっとよっしーだけを追いかけるからな」

彼に対する気持ちは友達として好きではなく、異性として好きだと、うちはわかっていているけれどよっしーはうちの大切な弟であつて、弟子でもある。弟というのはうちの勘だけど、実はよっしーと双子で、幼い頃に別れてしまったという関係があるかもしれない。だから、弟に恋愛感情を抱くのはタブーやろ？

それによっしーはうちの弟子でもある。槍術を習得したうちは毎日を退屈に過ごすよっしーに無理矢理槍術を学ばせ、一時的によっしーはうちのことは師匠と呼んでおつたから……な。

でもな、幼なじみのあっきーがいて、人嫌いのよっしーがいて、親友のメグみんながいて、うちと一緒に笑いあえる人たちが近くにいるだけでうちにとって、最高の幸せと日常や。

「……ん？」

ランジェリーショップから出た彼らの姿はなかなかおもしろい。よっしーとメグみんはお互いの制服を交換していて、メグみんは背中に竹刀を背負っているから凜々しい男子にしか見えず、よっしーはカツラをしているせいか、胸だけ残念な美人にしか見えない。あれ、あつきーにとって目の毒や。

ふと、よっしーが立ち止まると目の前の空間を穴が開くほどじつと見つめている彼がおかしいと感じ、うちは彼を観察していた。彼の様子にあつきーとメグみんは気づくことなく、会話していて、あつきーが彼に話しかけるとよっしーはなんでもない、という感じで返す。うちは

うちも気にしないで、メグみんによっしーにキスしたら？ といふメールでも送ろうかとした時、あつきーを中心に広がる不思議な円が突然現れると、一瞬にしてよっしーとメグみんまで巻き込んでいく。何か嫌なことが起きると予測したうちは必死に3人の名前を叫ぶ。

「よっしー、あつきー、メグみん……！」

反応したあつきーはうちが伸ばす手に気付いて、うちに手を伸ばそうとしたがやめてしまい、彼は手を引っ込める。悪いね、あつきー。うちはよっしーに手を伸ばしておるからな。よっしーもうちに手を伸ばそうと必死になっていて、うちも必死になって彼の手をつかみたくて、お互いを求めるように伸ばされた手はほんの少しだけ触れた。

あともう少しで届く！ と確信したうちは彼の手を握ろうとしたその時に、よっしーの姿がいなくなってしまう、あつきーも、メグみんの姿も突然いなくなった。

「よっしー……！！！」

愛しき彼の名前を呼んだところで彼は戻ることはない、と感じていたうちはよっしーの姿を追い求めるようにあそこに向かった。

よっしーが人嫌いの理由を話してくれた場所に行ってみると、5年前とは変わることなく存在し続ける遊園地は、平日なのに人で満ちている。ふう、懐かしいな。初めてうちをデートに誘ってくれたよっしーはうちを満足させるためにお化け屋敷だったり、ジェットコースターだったり、ミラーハウスだったり、あっきーと一緒にいた時とは違う楽しみがあった。それは、うちがその頃からよっしーのことが好きだったからかもしれない。

「観覧車でも行ってみよう」

よっしーがうちに過去を打ち明けてくれた場所に行くと、観覧車にはあまり人がいなかったからすぐに乗ることが出来た。ゆっくりと動いていくゴンドラに揺れながら、うちはどうやって彼のことが好きになったのか、と考えているとよっしーに会いたくなってきた。身を焦がすように熱く燃え上がる感情は、すなおになったうちの全身を熱くさせてしまい、もう二度と会えない彼の名前を心の奥から叫び求めていると頭に声が響いた。

愛しき者に会いたいのか？

聞いたことのない声、なのに不思議と懐かしくて安心してしまふ声の持ち主はもう一度問いかける。

愛しき者に会いたいのか？

「会いたい！　うちはよっしーにもう一度出会って、ちゃんとうちの気持ちを伝えたい！」

たとえ、愛しき者と殺し合うことになってモカ？

「……」

よっしーと殺し合いをするなんて想像もしたことない。でも……
うちの気持ちを伝えるためには正面から彼とぶつからないといけない。彼は一時的にうちの弟子やったし、弟かもしれないから 師
として、姉としてぶつからないとうちの気持ちはまったく伝わらないから…… 答えは決まっている。

「もちろんや。うちのよっしーは誰にも渡したくない。あつ、でも
メグみんだけは別な」

……正気だな？

「正気だからこそうちはよっしーと殺し合いを楽しみたい」

ならば、俺のために働け。

「嫌や。うちはうちのために働くから、あなたのために働くつもり
はないからなあ」

ここだけは譲りたくないうちが拒否すると、声の主は楽しそうに
笑い出してしまふ。なんや？ うち、悪いことでもしたんか？ 不
安になっているうちは笑い声が止まるまで沈黙していると、声の主
を確認するように再度問いかける。

愛しき者との殺し合いはおまえが望むことなのか？

「うちがよっしーに気持ちを伝えるためにはこの方法しかないから、
うちは何度でもよっしーと殺し合いを求める。だって、うちはよっ
しーの姉さんやからな！」

よっしーには悪いけど、ここで彼の姉であると名乗らせてもらわ
ないともやもや感がすつきりしない。

来い、俺たちの城へ。

目の前に開かれていく穴はよっしーたちをあちら側に連れて行っ
たことだと肌で感じ、ここを通らなければうちは二度とよっしーに
会えなくなる。

……行こう。

うちにとつての日常はよっしーとあつきー、メグみんが笑ってい
られる場所がうちのいるべき世界。彼らがいない世界なんて、うち
には耐えることなんてできない。覚悟したうちは前に進んだ。

奪われた日常をもう1度取り戻すために。

召喚

「本当にうまくいくのかしら……？」

「きつとうまくいくはずですよ、姫様」

姫と呼ばれる少女は栗色に染まるロングヘアを伸ばし、常に無表情である彼女の表情は不安なのか、わずかに眉を寄せている。髪と同じ色の栗色の瞳を隣にいる女性　騎士のほうに向けると彼女は姫の不安を打ち消すように肯定した。

姫の隣に立つ女性は金細工のように輝く髪をポニーテールでまとめ、モデルのように背が高く、凛々しい顔立ちに鋭い目つきをして鎧を身にまとう彼女の姿はまさに騎士という言葉が似合っていた。エメラルドグリーンの瞳には自身が満ちており、女性の言葉を信じることにした姫は前を向いた。

彼女たちが見つめる先には複雑な文字が刻まれる陣　魔法陣があった。周りには選りすぐれの魔術師たちが魔法陣を囲い、彼らは召喚の呪文を唱えていた。

いま、彼らが行っていることは異世界から勇者を呼び出す魔法であり、この世界を救うための唯一おちいの手段であった。過去に異世界から勇者を呼び出し、危機に陥おちいっている世界を救った伝説が残されているため、彼らはこの世界を救うために異世界から勇者を呼ぶ方法しかのこされていなかった。

いま、彼らが暮らしているこの国　ユグドラシルは魔王の脅威にさらされている。ユグドラシルという国は森が豊かで、木々に囲まれ、比較的に平穏な国であるが最近、魔物が出現しているせいで安心できない。騎士たちがフィオナの森から出てくる魔物たちを騎士たちが追い払っているものの、質ではなく、量で攻めてくるのでなかなか数を減らすことが出来ず、魔王討伐に向かわせるほど戦力の余裕が無い。故に、魔王を討ち、自分たちの国ユグドラシルに平和をもたらすためには、勇者の力が絶対に必要となる。だからこそ、

彼らが行っている勇者召喚は正しいと言えるだろう。

「……そろそろね」

姫がそう呟いた時には魔術師たちが召喚の呪文を唱え終えていた。期待と不安が募る姫と女性は魔法陣をじっと見つめていると、何の前触れもなく光り輝き、一瞬にして視界を奪う閃光が室内にあふれた。

「……ここは、どこだ？」

聞いたこともない声を耳にした一同は勇者召喚は成功した、と確信すると、魔法陣がある場所を見てみると　2人の少女と1人の少年がいた。少年の髪はあちこち跳ねている赤っぽい髪で、目は紫色に染まっていただけではなく、顔もそれなりに整えられていた。

もう2人の少女の内1人は髪を目元まで短く切りそろえて、大きな瞳にかわいらしい瞳、まっすぐに伸ばされている髪に花のかんざしをつけている。肩には細長い何かを背負い、彼女の服装は男装しているのしか見えないが立派な少女である。

あともう1人の少女は線の細い顔つきで、漆黒の髪と瞳を持ち、女性としてはなくてはならない場所が残念であったが、それでもなかなかの美少女であった。同性である姫と女性はいい彼女に見惚れてしまい、彼女はこちらを見つめている姫と目を合わせた。

「ここはどこだ？」

はつきりと聞こえた声に姫は違和感を感じるが、それがなにであるのかわからない彼女は少女の質問に答える。

「ここはわたしたちの国、ユグドラシルです。そして、私たちはこの国を救ってもらった勇者として、あなたたちを召喚しました」

「……勇者として、か？」

「はい、話が早くて助かります」

「……おい、明。おまえの夢が叶う場所におれたちは来てしまったぞ？」

少女が明と呼ばれる少年に声をかけると、明は少女と姫、それから女性と魔術師たちを見てから、ここは夢だよね？　と少女に疑問

をぶつけると、彼女は彼の頬をつねる。夢であれば痛みなどないが、生憎、ここは現実であるため痛みをしっかりと感じてしまう。

「痛いじゃないか!？」

「これが現実であると理解してくれたか？」

「ああ。でもさ、どうしておまえは冷静にしていられるのさ!？」

「ん？ 普通だろう？ なっ、恵美？」

話を振られたもう一人の少女 恵美はう、うん、と肯定しただけ。彼女もいきなりこちらに召喚されて戸惑っているはずなのに、明のように取り乱す素振りも見せないのはおそらく、この少女が冷静にしているせいかもしれない。

「落ち着け、明。ほら、鈴音が今日はいっていたパンツの色は何色だ?」

「……黒？」

「よし、明、てめえは外れたから殴らせてもらっぞ。ああ、それと正解は赤だからな」

「待て待て待て!! どうしておまえが鈴音のパンツの色を知っている!？」

「ふっ……それは秘密なのさ」

「なにかっこいいことを言っているんだよ!? 絶対覗いただろう!？」

「いや、突風が吹いた時に見えてしまったのさ……あれは最高だよな」

あー、あの時か、と納得している二人組みに恵美は呆れてしまい、姫はまさか人前でこのようなことを語り合う彼らに疲れてしまい、女性はこれから先が不安であった。

場所は少し変わり、客間で勇者として召喚された理由を姫から説明された明、恵美、それから　少女であったはずの人物は男性であつたことに驚きを隠せない姫と女性。違和感の正体がまさか女装している男性だとは気が付くことはなかったが、こうして本人を見てみると違和感などまったくくない。

「吉夫くん、パッドを入れたらもっと女性らしくなるから、そんなに落ち込まなくていいよ」

「……黙れ、元凶が」

「いはいよ（痛いよ）、よひおくん（吉夫くん）」

恵美の頬をつねる吉夫の姿に姫と女性はあまり彼を怒らせてはならない、と察知した彼女たちは彼らの戯れが終わるまでそのままにしておこうかとしたが、明は続きを、と促してきたので姫は続ける。「お願いします。わたしたちの国を、ユグドラシルを救ってください」

「……」

正直、明としては困っている人たちを放ってはおけないが、それが国を救うことになると話はまだ別となる。自分1人に国を救うという重い責任を負え、と言われたら誰だって背負いたくはない。明だって背負いたくはないが国を救う術は、もはや勇者である彼らにしか頼る方法しか残されていない。失敗すれば、彼らの期待を裏切ってしまう、絶望という地獄が彼らに降り注ぐ。

「おいおい、なにを悩んでいる明？　いつものように首を突っ込めよ」

「簡単に言っなよ……」

「言ってやるよ。だって、勇者はおまえ1人であると決まっていな
いだろう？」

「そついえば……そうだよな」

まだ姫から勇者は誰であるのか、ということなど言われていない

ことに気付いた明は、姫に誰が勇者なのか？ と確認するように尋ねてみた。彼女はええーと、と悩む。

一度に三人の勇者が召喚される事など、これまで一度も起きた事もなかった為、姫は一体誰が勇者であるのか分らず頭を悩ませていたが、

「勇者は明でいいな」

という吉夫の一言で、あっさりと決まってしまった。

「勇者……か。これで僕の夢であった正義の味方はここで一気にクラスアップするのか」

「どちらも人を助ける本質は変わらないからいいだろう？」

「そうだね。……なあ、いつまで女装しているわけ？」

吉夫の姿はいまだに女装しているため、その可憐な容姿は明にとつていろいろと目の毒なのでそろそろ、いつもの彼の姿に戻ってもらわないと困る。姫と女性吉夫が男であるとかわかっていてるものの、女装を解いた姿など想像できないから彼女たちは、着替えてもらうようにお願いする。

お願いされる前から吉夫は一刻も早くいつもの服装になりたつたため、恵美に返せ、と命令すれば嫌よと一蹴されてしまう。

「……脱がすぞ？」

スカートの下がすーすーする彼にとって、この屈辱など耐えることができずにいきなり最終手段 脅迫をしておく。明は前に吉夫が不良から本当は女じゃないのか？ と言われた時に、彼が迷うことなく不良を血祭りに上げたことを思い出した明は、まさか、と思いつきながら成り行きを見守る。

相手は同年代の少女。異性となれば、たとえ吉夫であっても手を出すことはないだろう、と勝手に結論を導く出した明は、もしも、彼が本気で脱がすなら などと妄想したかったが、後が怖いのでやめておく。

「吉夫くんはできるというの？ それも人前で私を脱がせるの？」
「からかうように彼を弄もてあそぼうとした恵美は後悔することになった。

吉夫は目の前にいる姫に、

「おい、仏頂面。空いている部屋があれば案内してくれるか？」

仏頂面　姫に問いかける吉夫の目が本気であると見抜き、慌てて恵美に考え直さないの！？　という視線を送られると、恵美も彼の雰囲気の本気であるとわかると、さっきの自分の言葉を取り消そうとする前に吉夫は明に声をかける。

「これから男子禁制となるからこの部屋から出て行け」

「おまえも男だろうが！？　というか、なにをするつもりだ！？」

「ん？　恵美を強制的に脱がすだけだから」

「貴様！　堂々といやらしいことを口にするではない！！」

成り行きを見守っていた女性は恵美がおかしなことをされないか、心配であつたためついに口を挟み、怒りを爆発される女性はまずは、と前置きをする。

「貴様は、姫様を仏頂面と呼んだことについて謝れ！！」

姫を侮辱されたことが女性にとって腹が立ち、腰に収めている剣を抜こうとした時に、明が吉夫をフォローするようにあえて彼が口にしなかったことを口にする。

「すみません！　まだ名乗ってもらってなかったので、吉夫のヤツ、どうやって呼ばいいかわからなかっただけなんです！　ホントにすみません！」

「うっ……」

「僕は緋山明。で、あっちが女装しているのが牟田吉夫に、男装しているのは二階堂恵美さん」

「アキラに変態にメグミか。私は姫様の専属騎士であるジュリアスだ」

明の隣にいる吉夫がジュリアスを睨むが、彼女は気にすることなどなく姫を紹介する。

「こちらはユグドラシル国の姫であるサティエリナ様だ」

「始めまして、アキラさんに変態さん、メグミさん」

吉夫が変態呼ばわりされることが確定したことに、本人は気にす

ることなどなく、恵美に隣の部屋で脱ぐから後で来てくれ、と言い残すと部屋から去り、脱がされる心配がなくなった恵美はほっと一安心。数分後に、恵美がそちらに行くと、パンツのみの吉夫が背を向けていたせいか、彼女は悲鳴を上げてしまったのはまた別の話。

「……そっか。ここは僕たちがいた世界じゃないのか」

朝、目覚めてみると昨日の出来事がすべて夢であればいい、と明は願っていたが、実際は夢ではなく現実であり、本当のことなので明は異世界に召喚されたことを改めて認めた。正義の味方にあこがれていたけれど、勇者になってみたい、など願っていた結果がいまの現状。

いきなり異世界に呼び出されしまい、いきなりユグドラシルという国を救って欲しいと頼まれてしまい、いきなり勇者となってしまう。怒涛の勢いで彼は勇者という役を手に入れてしまったが、そう簡単に僕は勇者ですよ、なんて名乗れない。

正直、勇者とはなにをすればいいのかわからないが、人々のために戦い、世界を支配しようとしている魔王を倒せばいい、と自分がなにをすればいいのか理解している明は、ベットから体を起こして、なにをしようか、と考えていると腹の虫が鳴いた。

そういえば、昨日は話ばかりでなにも食べてはいないな、と苦笑する明は体を伸ばしていると部屋のドアが開かれる。

「おっ、さすがは勇者だ。もう起きたのか？」

「冗談はよせよ、吉夫」

入ってきた吉夫は朝食の準備ができている、と伝えると視線を彼

の頭に向ける。彼の髪は元々がはねているが、寝起きということもあって、そのはね具合はまるで爆発しているようになっている。吉夫の視線に気が付いた明はこれはどうしようもないことさ、と髪をなでていくがすぐにぴよんとはねる。

「……手入れとか大変だよな」

「おう」

「いつそのこと、手入れとかしないでそのままにしたらどうだ？」

「……悪くはない。でも、これだとかかなり目立つからな」

「明、おまえは勇者としてもう充分に目立っているからそのままでも大丈夫だろう」

髪の手入れに10分も毎日かけている明は彼に言われてみるとそれもいいな、と考え直してからハネハネヘヤーにしておくことに。

食堂に行けば、先に朝食を食べていたサティエリナがまあ、大変、いますぐにあなたの髪を直しましょう、などとメイドたちに彼の髪を整えさせてしまい、明の髪はいつも通りとなっている。それでも髪がいまだにはねている状態であるが、これがいつもの明ヘアーである。

その間に吉夫は恵美とジュリアスの姿を探してみると、彼女たちはメグミは強いとか、ジュリアスさんこそ、なかなかの腕前ですね、とか、今度は引き分けにしないとか、語りながらこちらに向かってきた。

「おはよう、吉夫くん」

「……おはよう」

花が咲くような笑顔を向けられた吉夫は目をそらしてしまう。

「吉夫くん？」

「……悪い、まだだめだ」

「そっか」

鈴音から人嫌いの理由を聞いている恵美はそれ以上彼と会話せず、席について朝食を食べていく。吉夫も彼女たちに倣って朝食を食べていき、明とサティエリナが楽しそうに会話している姿にうらやま

しくなる。けれど、信用した人以外では、話を弾ませることができない。召喚される前に、吉夫が恵美と普通に会話できたのは、鈴音の親友だからという理由であって、けっして二階堂恵美という存在を受け入れた訳ではない。加えて、昨日、パンツ一丁の姿を見られているから余計に目を合わせたくない。

「恵美のスケベ」

「どうして私がスケベなの!？」

「女装する時には君がおれの服を脱がして、着せ替え人形のように遊んでいたくせに。……ごめん、スケベじゃなくてエロいな。うん、恵美はエロい」

「言い直さなくてもいいから!！」

だが、からかう程度ならできる。いや、からかわないと昨日の屈辱を忘れることなどまったくできないため、もう少しだけいじらせよう。

「明、昨日はおれの女装姿に興奮していたよな」

「だ、誰が興奮するか!！」

「おや? 前かがみとなっていたのはどこの誰かさんでしたかねえ?」

「うるさいな!! おまえこそ、メグさんに着せ替え人形状態であったのに、よく堂々とあれを」

恵美はどこから取り出した木刀で明の首に突きつけて、にっこりと笑顔を浮かべる彼女の目を笑っていない。命の危険があると判断した明は何事もなかったように朝食を食べていき、サティエリナとジュリアスは恵美がかわいい女の子ではなく、かわいくて怖い女の子に評価を改めた。

国王と謁見

朝食を食べ終えた明たちは、ユグドラシルの王に会うために馬車でフィオナの森に向かっている最中であつた。なぜ、ユグドラシルの王に会うためにわざわざ、魔物が巢食^{すく}うフィオナの森に行かなければならないのか、それは国王であるギースが常に最前線に立ち、魔物を撃退しているのだ。そのため、彼は城にいることはなく、いつもこのフィオナの森で魔物を退治している。

けれど、本当は違う。彼の娘であるサティエリナいわく、いつも書類の山を減らすことに頭を抱えており、ストレスばかりためていく彼はついに我慢できず、魔物が巢食^{すく}うフィオナの森に単独で出撃してしまう。二ヶ月前から、平穩で豊かな森が魔物が住み着くことになってしまい、騎士たちが住民を守るために活躍していたがなかなか成果が出ず、逆に返り討ちされてしまうことがあつた。

そのため、ストレス発散のためと魔物討伐のためにフィオナの森に攻め込み、一振りの剣で次々と魔物を切り裂いていき、いつの日か、王が前線で活躍することになってしまった。

しかし、フィオナの森に潜む親玉を倒さない限り魔物たちは森に住み、騎士たちは住民と国を守るために防衛線を維持し続けなければならない。このままではらちが明かないと判断したギースは異世界から勇者を召喚することに決断し、彼らに親玉を倒して欲しいと願っている。

「父上が前線に出るおかげでわたしに書類の山が送られるの……はあ」

疲れたようにため息をつくサティエリナは城に戻れば、書類の山と格闘しなければならないことを思い出すと、もう1度ため息をついてしまう。

明は自分がどれだけ責任のあることを背負っているのかあらためて理解し、腰に差してある剣の柄を思わず握ってしまい、手が震え

ていることに彼は気が付いた。

それに気付いたジュリアスは、彼が恐怖に怯えていることを察した。たった一人に国の未来を背負わせることは、騎士であるジュリアスにとって許されないこと。自分たちの力不足で他人にこの国の未来すべてを背負わせるのは酷で、責任とプレッシャーで押し潰されないために彼女は震える明の手を取る。

「心配するな、アキラよ。親玉を倒すときは私も一緒に戦うからな」
優しく包み込むジュリアスの手は暖かく、明の恐怖と不安をゆっくりと和らげていく。彼は自分1人だけではなく、馬車にいる相棒の吉夫、剣道部部長の恵美、騎士のジュリアス、姫のサティエリナという仲間がいるから怖がらなくてもいい。自分だけが責任を背負うことなどない。彼らが一緒に戦ってくれるならば、プレッシャーに押し潰されることなく前向きに進むことができる。国だって救うことができるから 救わなければならぬから明はジュリアスのエメラルドグリーンの瞳を見つめ返し、
「これからよろしく、ジュリアスさん」
「こちらこそよろしくな、勇者アキラよ」
友情の証として彼らは握手を交わした。

馬車で揺られ続けてから二時間後にようやく馬車が止まり、目的地のフィオナの森にやっと着いたと安堵の息をついた明は、へっ？と間拔けた声を出した。なぜなら明たちが着いた場所はフィオナの森ではなく、あちこちにテントが張られている場所であった。

「ここはユグドラシルの騎士たちが魔物を国に近づかせないように、駐屯場ちゆうちやうにしているのだ」

ジュリアスが明にそう説明すると彼は、ああ、そうだ、これは防衛線なのか、と理解した。騎士たちの他にも傭兵のような人たちもいて、テントを眺めていた明はあることに気が付いた。旗である。ユグドラシルの旗は一本の樹があり、それに会わせて騎士たちの鎧にも同じシンボルが刻まれていた。

もうひとつの旗にはひとつの剣を中心にして、その上に2つの剣がクロスしている状態は3本の剣を象徴し、明は隣を歩くジュリアスにあれば？ と質問してみた。

「あの3本の剣はこの国の旗とどう違うのか、ジュリアスさんはわかるか？」

「ほう、アキラよ。なかなか目がいいではないか。あの3本の剣はトライアルブレイドと呼ばれる冒険者ギルドの組織だ」

「トライアルブレイド？ ギルド？」

「すまない。アキラはこちらの世界に来たばかりでなにもわからないだろう。」

ギルドとは1つの組織にさまざまな人種が加盟し、日々頼まれる依頼クエストをこなすことによってランクを上げていき、金を手に入れることができる場所だ。無論、ランクが上がれば上がるほど得られる富は大きくなると同時に、死と隣り合わせの状況を何度も遭遇することになる。

今回、トライアルブレイドというギルドの組織は、国王ギースクエストからの依頼により多くの者が参加し、見事にフィオナの森に潜む親玉を倒すことが出来れば地位と名誉を与えられるのだ」

ここに参加している者は皆、一刻も早くユグドラシルを平穏な国に戻したいと願っている、と最後にジュリアスが付け足した一言に明は安心してしまふ。全員がユグドラシルのために必死でフィオナの森に潜む魔物と親玉を倒すために力を合わせ、平和を取り戻すために全員がそれぞれの責任を背負いながら戦っていることを。

「私がユグドラシル現国王のギース・ゴラエツト・バルである。異世界から召喚された者たちよ、勇者としていきなりこちらの都合で召喚してすまない。お詫^わびとして　我が筋肉を見るがいい!!」

駐屯場にいる騎士たちと冒険者たちの視線が集まる中、明、吉夫、恵美は地に膝を付き、頭を垂れていた。彼らは簡単な自己紹介を済ますと、目の前にいる男性　ギースは自己紹介を終えたすぐに、ふんっ！　と力を込めると彼の着ていた服が内側から破れた。

飛び出してきたのは筋肉隆々とした偉丈夫。肥大した上半身の筋肉を惜しげもなく明たちに晒す

(さら)　ギースはポーズを取りながらさまざまに角度で筋肉を見せつける。短く切り込んだ金髪に、彫りの深い精悍な顔つき、M型の髭^{ひげ}をしているのに、さらに筋肉を見せつけるそのインパクトは尋常ではない。

「め、恵美!」

吉夫の隣にいた恵美が気を失ってしまうほどの威力で、吉夫は彼女を支えながら周囲の反応をうかがってみれば、騎士たちと冒険者たちはドン引きであった。冒険者の女性とかは恵美のように気を失うことはないかわりに、直視しないように目をそらしている。

明といえはどう反応すればいいのかわからない、という表情をしていた彼に吉夫は肩をすくめると、明はこれを現実として受け止めるしかなかった。

「どうだ……我がすばらしき肉体は!？」

「父上、母上にあなたがいつものように肉体を自慢していると報告しておきます」

「サ、サティエリナよ。それだけは、それだけは勘弁してくれ……!!」

「いいえ、父上にはしかるべき罰を与えてもらいますので」

様子を見守っていたサティエリナが母上という人物の名前を名乗ると、ギースは肉体を見せつけるのをやめてしまい、彼女に許しを請うがサティエリナは断じて首を縦に振らない。母上　ギースの妻であり、ユグドラシルの王妃である彼女には「お仕置き」を幼い頃からさせているため、けっして彼女に逆らうことはできない。鍛え上げた肉体を騎士たちの前で見せびらかしたギースは、たまたまそこに居合わせた王妃に目撃されてしまい、「お仕置き」をされてしまったこともある。

肉体を鍛えること自体問題ではないが、公務をほったらかしにしておいて騎士たちに自慢の筋肉を見せつける彼がいけなかったことぐらい、ギースは理解しているが

「見よ、我が肉体を！！」

やはり、見せつけないと気が済まないのだ。

これではちが明かないと判断した吉夫は、恵美を抱えてその場からこっそりと離脱し、明も彼と同じように逃げたかったがサティエリナから、

「父上、城に帰ったら母上から「お仕置き」を受けてもらいます」

「「お仕置き」よりも筋肉だああああ！！」

と叫ぶギースが着ているズボンを破る捨てると、女性たちは悲鳴を上げながら去って行き、男性たちは背を向けて警備に戻っていく。

これがユグドラシル現国王であるギース・ゴラエット・バルの真の姿である。

ギース国王の筋肉露出事件が収まり、だいぶ落ち着いたところでテントで過ごす明たちにジュリアスが明に、フィオナの森で実戦を

しないか？ と提案された。彼はフィオナの森は素人の僕でも大丈夫なのか？ と訊いてみれば、素人でも倒せる魔物とか聞いたからな、なにせ、冒険者たちの新人たちで勝てるというのだ、と自身満々に答えるジュリアスに明は吉夫に助けを求める。

「いいじゃないか。ド素人の明が実戦でなにかを学ぶには丁度いい機会だろう？」

「うっ……」

なにも言い返せない明は言葉に詰まり、あの世界で武術について学べばよかったと後悔してしまう。吉夫は鈴音から槍術について学び、恵美は剣道部の部長であるからジュリアスと互角に戦えるという。朝、明と吉夫が食堂に行く前に彼女たちはお互いが強者だと昨日の内に見抜き、朝から手合わせをしていたと明は聞かされているので、ため息をつく。

「ド素人とは変態も同じだろう？」

明をバカにされたことに腹が立ったジュリアスが吉夫に食いつくと、彼はテントの中を見渡してみた。

テントだというのに、ここはベットやテーブル、洗面器、キッチンに風呂まで整えられているという特別な空間で、サティエリナいわく、このテントは魔導具というのだ。

魔導具というのは、魔法の力がこもった特別な道具という意味で呼ばれている。それを何かに改良できないか、と研究した人たちがある日、武器に魔法の力を込めることを可能としたため、戦闘にも魔導具が利用されている。

その魔導具がこのテントでもあることに感心しながら、吉夫は部屋にある槍に目を留めた。ジュリアスがこちらに視線を送っていることを感じながら彼は槍をつかみ、鈴音から教わったことを思い出す。ただ槍を振るうことは誰だって出来るけれど、槍術は違う。正式に教わる技であり、我流でない。

彼は深呼吸すると、鋭い突きを何度か行くと次に槍を横に払うと、ブーン、と空気を裂く音と吉夫の慣れた動作にジュリアスはほう、

と興味を示す。

「ド素人でないとわかった貴様の名前を、変態から馬鹿者に変えようではないか」

「それはいいことだ。まあ、サティエリナは変態と呼ぶかもしれないが……」

「では馬鹿者よ、さっそく私とその槍で戦え」

ジュリアスと手合わせをしている恵美は彼女が戦闘狂だと知つてしまい、明日も彼女を楽しませるために相手をしなくてはならない、と悩んでいた恵美は吉夫にオススメさせる。

「吉夫くん、ジュリアスさんと手合わせしないと私の体が持たない」

「メ、メグミよ、それではまるで私があなたにおかしなことをしていると勘違いされるではないか！……ば、馬鹿者、私をそのような目で見るな。ア、アキラもだ」

「明……おれ、貞操を奪われたくない」

「ああ、それ、僕も考えたよ。しかし……ジュリアスさんが攻めとは……メグさん、今日の夜もがんばって」

ジュリアスをからかおうとして吉夫に続き、明もからかおうとしたが途中で関係ない恵美を巻き込ませたことによつて、彼の首元に木刀ではなく、刀が突きつけられる。謝罪よりもどこでこの刀を手に入れたのか気になる明は、ゆっくりと視線をそちらに向けると目が笑っていない恵美がいた。

「ねえ、秋欄くん、私は断じてレズじゃないし、ジュリアスさんもレズじゃないからね」

「は、はいいいい！！」

「ジュリアスさんの場合は戦闘狂だから……ね」

「はつきりと断言しなくてもいいではないか、メグミ！」

「一応自覚していたのね……」

ほのぼのと会話しているメンバーたちにいられることがうれしいサティエリナは、恵美に怯える明がおもしろくて苦笑してしまい、それに気付いた明は笑っている場合じゃないよね！？と彼女に助

けを求めるがサティエリナは一生このままで、と残酷な解答で明を困らせる。

明はそれはないだろう！ と叫び損ねたがサティエリナが笑顔になつてくれただけで幸せになつてしまい、いまの状況など気にすることなどなく、サティエリナの笑顔に彼は見惚れていた。

フィオナの森

せっかくフィオナの森に来たのに、魔物と戦わないことなど私が許さない！ と午後から強く主張しているジュリアスのバトルマニア魂に呆れてしまった明たちは、仕方なくフィオナの森に行くことにした。その際に姫であるサティエリナが同行することに疑問を覚えた恵美が大丈夫なの？ と心配したが、何故かジュリアスが自信満々にサティエリナの凄さを語りだす。

サティエリナは姫として、ただ守られるだけの立場が気に入らなかったため、母である王妃から時間がある時のみに魔法について教えてもらい、退屈であれば魔法について勉強していたら いつの間にもユグドラシルの魔法姫と呼ばれるようになった。

しかし、サティエリナは魔法だけでは満足しなかったのか、今度は剣術について学びたい、と専属騎士のジュリアスに頼むと 姫様にそんなことを教えられません！！ と抗議した。姫と騎士の間には身分の差があるため、ジュリアスは彼女にもしものことがあれば と想像しただけで彼女はそこで泣いてしまったという。

父であるギースと母に相談したサティエリナは、母からあなたが望むのなら好きなようにしなさい、とギースに‘お仕置き’をした後で彼女が告げた。彼らの間になにが起こったのか、すでに予想済みのサティエリナは、ギースが娘には私のようになってもらおうぞ！ とか言っていたかもしれない。

以来、サティエリナはジュリアスから剣術について学び、加えて魔法まで習得していた彼女の实力はジュリアス並という。

「ジュリアスさんが泣いたって……想像できないな」

「ア、アキラよ、私が幼い頃の話であってけっして三年前のことではないからな！！」

「……そうか、三年前だったのか」

「ば、馬鹿者のせいだ！！」

墓穴を掘ってしまったジュリアスは無言を貫く吉夫のせいにしておき、これ以上過去の話をサティエリナから暴露される前に話題を恵美に振るう。

「ところで、メグミの腰にあるのは……剣なのか？」

恵美の腰に差しているのは刀と呼ばれるあちら側の武器であるが、そんなことも知らないジュリアスとサティエリナに彼女は鞘から抜いた。始めてみる刀に目を奪われたジュリアスは恵美からどうぞ、と差し出されたが、彼女の愛用の武器に触れることをためらう。

「どうしたの？」

「うむ……それはメグミの愛用の武器であろう？」

「そうだけど……」

「……メグミの武器は細いから……壊れてしまいそうで怖いのだ」
「そんなことを気にしていたの？ ジュリアスさん、いいから握ってみてよ」

鞘に収められた刀を無理矢理渡されたジュリアスは仕方なく柄を握り、ゆっくりと取り出していくと剣にはない軽さに驚いた。これが刀なのか、と納得したジュリアスは刀を鞘に収めて持ち主の恵美に返し、サティエリナに刀を作りませんか？ と提案します。

サティエリナはジュリアスが刀のことを気に入ったとわかり、恵美にどうやったら作れるのか？ と疑問をぶつけてみると、彼女はそこまで知らないと答え、それから刀と剣の良さと悪さについて語りだす。ジュリアスも彼女の話に便乗し、サティエリナは微笑みながら彼女たちの話を聞いて意見を述べる。

目の前で3人の女の子が楽しそうに会話を弾ませていることに、周囲を警戒している吉夫はフィオナの森にいないのに緊張感がないと嘆息する。隣を歩く明がサティエリナに釘付けであることに、これは惚れたかもしれないな、などと思った。

なぜなら、明の場合は本当に好きな人しか付き合わないという理由を前提にしているが、彼だつて気になる女の子が1人や2人ぐらいいいることを吉夫は気付いている。よく彼からどうやって彼女と話し

かければいいのかと相談されたこともある。

気になる女の子が目の前を通る時には、必ず明はその娘に目が釘付けになってしまふ癖があるので、吉夫は彼がサティエリナに惚れているかもしれない程度に留めておく。そのほうが明をからかいやすく、彼の相談相手になれるから、いまは温かい目で優しく見守るしかない。

「ど、どうした、よひお」

視線に気付いた明は動揺しているのか舌をかんでしまい、苦笑する吉夫はなんでもないと返すと、彼は安堵の息をついた。サティエリナに惚れているかもしれないと思っていたが、彼が安堵の息をつくからこれは惚れたな、と確信した吉夫。これからの2人をどうやってくつつけようか悩んでいれば、頭上からギギツという生き物の声を聞いた。

上を見上げてみれば全身が緑に染まり、一メートル前後の大きさである生物たちの顔は醜く、手にしたナイフ、または棍棒で一斉に襲い掛かってきた。ジュリアスから、これがゴブリンと呼ばれる魔物のことをだとあらかじめ説明されていた明たちは驚いた。彼らが着地する前に、と我に返った吉夫は背負っていた槍で宙に浮かぶ一匹のゴブリンを貫き、地面に着地する前に彼は周りのゴブリンを槍で払いのける。

「うん、槍だつたら誰にも負けないな」

静かに呟いた吉夫は明に自分の身は自分で守れと伝えたと、ゴブリンの群れに突撃していき、槍でまた一匹貫いた。

彼のためらいのなさにわかっていたが、まさかこれほどまでためらいもなくゴブリンの群れに攻めるとは予想していなかった明は吉夫らしいと心の中で苦笑する。隙だらけの明の目の前に棍棒を振り下ろすゴブリンに気付いた彼は慌ててよけると、腕に棍棒がかすただけで済んだ。続けてナイフを手にしたもう一匹が斬りかかるがそれもかわし、一度距離を取った明はいつものように 不良と喧嘩ケンカしていた時のように体を動かす。

「……いくぞ」

自分に言い聞かせるように小さく呟いた明は鞘から剣を抜き、まともな訓練すらしたこともない彼はただ振りますことしか知らないけれども、そんなことを承知している明は近づいてくるナイフを持ったゴブリンに対して、剣を大きくフルスイング。まるで野球のようにバットを振った明の攻撃に反応できなかったゴブリンは、成す^{すべ}術もなく首を深く切り裂かれた。

首から大量の血を流すゴブリンが苦痛を感じることもなく絶命し、明はこれで一匹と数えて、もう一匹のゴブリンを見据える。

仲間を殺されたことによって目が血走り、棍棒を力任せに振るうゴブリンの攻撃をよけるのはたやすくい。何度か同じパターンを見せつけられた明は剣をフルスイングではなく、上から勢いよく剣を振り下ろす。

素人の明であっても剣を勢いよく振るえばかりわされることだつてあるが、いまのゴブリンは頭に血が上っている。そのため、明の一撃はうまくゴブリンに決まった。

「はあ……はあ……はあ」

荒い息を整える明は吉夫たちのほうを見れば、ちょうど吉夫が最後のゴブリンの頭を槍で貫いていた姿にすごいなと心の中で感心する。ゴブリンの群れに突撃したくせにかすり傷すら負っておらず、地面に横たわる死体には頭か心臓しか穴が開いていない。意味するのは、吉夫が槍でゴブリンたちの急所しか狙わずに勝ったということ。他にも、剣で斬られたり刀で斬られたりした死体も転がっていた。

「おっ、明。そっちはどうだった？」

「ギリギリだったよ……一歩間違えていたら死んでいたかもしれない」

「言ってるな。おれさ、おまえの戦いを観察していたけどけっこう危なかったし、ゴブリンがもう一匹いたら確実にリンチされていたな」

「……おまえ、余裕だったみたいだな」

「まあね。恵美たちが手伝ってくれたからな」

剣を鞘に収めた明はジュリアスにこれから剣術について教えて欲しいと頼み、ジュリアスは快く引き受けた。その時にサティエリナがむつと不満顔をしていたことに吉夫と恵美は苦笑し、彼らにどうしたの？ と問いかける彼女に二人そろってなんでもないと返す。

フィオナの森に現れる魔物がある程度倒し、素人であった明は剣を振るうたびに少しずつ動きがよくなってきた。数時間の間に明はかすり傷や打撲などの軽傷を負い、吉夫といえ腕を狼にかまれただけで、他の3人はサティエリナのサポートによって傷らしい傷などない。

剣と比べて槍はリーチが長く、接近戦を挑むゴブリンや巨大な蜂ハチキラービー、森に生息する森狼ワイルドウルフのほとんどは槍に貫かれてしまい、吉夫に近寄ることさえ許されなかった。だが、それでも彼にたった一撃を与えることが出来た魔物 全身が銀の体毛に覆われ、目は海のように青く染まった狼はどの魔物よりも気高く、圧倒的な強さを吉夫に見せつけてくれた。

鈴音から教えられた槍術で白銀の狼を倒そうとしてもすべてかわされてしまい、狼は吉夫に一撃を喰らわせただけで攻撃してこなかった。あとは吉夫がひたすら攻め、狼はひたすらよけていた。

何度か同じことを繰り返していると狼が自ら身を引いて、吉夫たちの目の前から去っていった。あの時の気持ちは、とても悔しく、同時に自分よりも強い相手がいることに喜びを感じた。もっと強くなりたい、と純粹に彼は強く思った。

彼と同じように明も強くなりたいと思った。吉夫が怯えることなく白銀の狼に立ち向かった彼の勇気。明はメンバーの中で一番弱いと実感したから。サティエリナは魔法で身体能力の向上と遠距離の敵に魔法を放ち、ジュリアスは剣で彼女に近づく魔物を切り伏せ、恵美は居合いによって一瞬で斬り捨てる。

だからこそ、明は彼らの足手まといにならないために、これからずっとフィオナの森で鍛錬でもしようかと本気で悩んでいると吉夫が自分の肩を叩き、明るく話しかけてきた。

「気にするなよ。おまえはド素人、おれたちは熟練者、という違いだから焦ってもしょうがないぜ」

「さすがは僕の相棒だよ。何でもお見通しみたいだな」

「これぐらい当たり前だろう。それに、おれたちが簡単にゴブリンとかキラビーを倒せたのは、あいつらが弱かったただけであって、けっしておれたちが強いわけではないぞ？」

「うむ。馬鹿者の言う通りに魔物は弱く、それも冒険者たちの初心者でさえ倒せる相手であつたからな」

吉夫の言葉を肯定するジュリアスの言葉は間違っていない。今日、彼らが戦った魔物のほとんどは冒険者の初心者でさえ倒せる最弱の弱さであつたため、勇気があれば誰だつて倒すことができる。

「しかし……馬鹿者よ、よく白狼と互角に戦えたな。あれは私でさえ勝てないランクAの危険な魔物だぞ？」

「白狼とはあの白い狼だよな。なあ、ジュリアス。ワイルドウルフ森狼と白狼の違いについて詳しく教えてくれないか？」

「もちろんだ。」

貴様が先程戦つたのはフィオナの森に生息する狼であり、昔からこの地を守ってきた主だ。白狼は他の狼とは違い、争いを好まずに過ごす大人しい性格であるが奴のテリトリーに侵入すれば、遠慮なく牙を向けてくる。

ランクAということまで説明してもいいか？」

「頼む。ジュリアスだけが頼りになる」

「ば、馬鹿者め、お、おかしなことを口走るではない。

おほん、話がそれたな。ランクAとは階級という意味であり、それによってどれくらい危険なのかということを示すのだ。これまで、私たちが倒してきたゴ布林、キラービー、森狼は初心者でも倒せるということで最低のF。

それから危険度が上がることによってE、D、C、B、Aと続き、さらにAの上にSというランクがあるのだ。これまで、Sランクになれた人たちなど世界に3人ほどしかいないため、彼らの名前を知らない人などいない。

さて、ここまで説明すればもう馬鹿な馬鹿者にも理解できるだろう？」

「うわぁ……おれ、よく生き残ることができたよな。とても運がよかったよな。……あれ？　どうしてフィオナの森の主がランクAなんだ？　おかしくないか？」

吉夫の疑問をぶつけられたジュリアスは彼の言葉を肯定し、思考してみても彼女には答えが見つかることができずに助けをサティエリナに求めた。

「おそらく……白狼に挑んだ愚かな冒険者たちが振り返ちにあったせいでしよう」

「そうか、それならランクが自然にAと上がる訳か。フィオナの森の主に喧嘩を売るとは……命知らずの馬鹿もいるんだな。ありがとう、ジュリアス、サティエリナ」

すなおに礼を言う吉夫に拍子抜けしたジュリアスとサティエリナは、数時間の間に彼が打ち解けてくれたことだということに気付いてしまい、これからもよろしく願いますと返した。最初に会った頃と比べて、吉夫はこちらのことを警戒していたが、いまでは普通に話しかけることができる。

フィオナの森に現れる魔物と戦っていく内に、お互いの弱点をカバーしてきた吉夫とジュリアスには目に見えない信頼関係が結ばれているせいか、ずいぶんと話が弾んでいる。サティエリナはたまに口

出しをするとジュリアスは赤面してしまい、それに吉夫はあえてからかわずに聞いていない振りで過ごす。

「……あつ」

と呟いた明に吉夫は反応し、彼に顔を向けると気が付いたことを口にする。

「この森にいる主白狼はけっこう強いのに、どうして魔物の親玉を倒さないのだろうか？」

「倒さないじゃなくて、倒せないとおれは思うけどな。なつ、サテイエリナ」

「……はい。」

白狼はフィオナの森の主としてもつとも強く、そこら辺の魔物には負けることなどありませんが……いま、ここに住み着いている魔物の親玉は白狼以上の強さを誇ります」

隠していても意味はないと悟ったサテイエリナは彼らに真実を伝えておいた。二ヶ月前に、国王であり、父であるギースが魔物の親玉と互角に戦ったが傷を与えることができず、撃退しかできなかったと報告されている。

いまではあの親玉はフィオナの森の最深部に姿を隠し、そこまでたどり着いた強者のみしか相手をしないという変わり者であるため、彼らはフィオナの森の外から出ることなく、魔物に指示をしてユグドラシルを落とそうとしている。

「……これから大変だね」

「これから大変ではなく、これから大変なんだよ。アホ明」

「あはは、本当だよな。よし、これからはずっとフィオナの森で訓練するか」

「ずつつて……おい、明。まさかここに泊まっていくなかなんて言わないだろう？」

「もちろんだよ。何か不満か？」

「……少しはサテイエリナのことを考えろよ。まったく、あいつはおまえとの時間を大切にしたい……はずだから……大人しく城に戻

るぞ」

サティエリナという言葉聞いた明の顔はみるみる内に赤く染ま
っていき、ヒットしたことに喜ぶ吉夫は秘密にしてやるからな、へ
たれ勇者と約束しておいた。

罰ゲーム

「……」

朝、いつも通りに目覚めた吉夫は、現在どのようなアクションをすればいいのかわからなかった。

彼はベットから体を起こすと、この部屋にある鏡の前までまっすぐ向かうとこれが夢ではないか、と疑いたくなかったが、彼の身に起きていることは現実であった。

ぺたぺたと自分の体を触った吉夫は目にかかる銀色の髪をどうしようかと悩み、腰まで伸びるそれに彼はため息をついた。

たしかに、一度はこうなってみたいやあれしてみたい、と豊かな想像力を働かせたことのある吉夫は、夢ではないかと思いつながら頬をつねる。痛い。やはりこれは現実である。信じたくはないことだが、これは彼の身に起きている出来事であった。

絹糸のように細い白銀は腰まで届き、目は白狼と同じ海のように青く染まり、視線を少し下げれば山のように大きく膨らんだ胸がある。おまけに頭の上には耳がびくびく動き、尻尾まで生えている。顔つきは元のままなので、顔以外すべて女性化してしまった吉夫は一度は体験してみたい性転換に成功したことに喜ぶよりも、どうしてこうなったか思考しだす。

昨日はフィオナの森にいる魔物を倒すことで実戦とはどういうことか学び、同時に素人の明は剣に慣れるまでということをしていた。城に戻ってからは夕食を食べ、ヘタレの明をサティエリナと会話させるために恵美とジュリアスの話し相手となり、その間に2人の仲を進展させようとしたがうまくできなかった。出会って間もない男女だから、という訳ではなく、ヘタレ明が口を開かないせいでもあり、サティエリナも話す側ではなく聞く側であったので失敗した。それからはベットで一夜を過ごしたら、いつの間に女性化してしまったというのだ。

「……これ、重いな」

山のように膨らむ胸に視線を落とした吉夫は、下着とかも着ないといけないのかと口にすると自殺したい衝動にかられた。男が女性の下着を身にまとう。彼としては恵美に女装されるよりも屈辱的で生きている中で一番恥をかいてしまふ行為であった。

人であれば男女関係なく下着を身にまとうことが当たり前だが、吉夫の場合、精神は男性で肉体は女性なので女性の下着に手を出すことをためらってしまう。女性の下着に興味ないと言えは嘘になるが心まで女性になってしまう、ということが起きそうで怖い吉夫はいつまでも悩んでいても仕方ない、と結論を出し、最終的には心まで女性になってもおれはおれらしくすればいい、と決めると気持ちが楽になる。

気持ちの整理が出来たところで鏡に映る自分を見ると、この姿を見た鈴音はどう反応するのかなどと思い浮かべただけで口元に笑みが浮かぶ。高確率で腹を抱えて、あははっ、よ、よっしーがついに女の子になっちゃたなあ。これでうちとよっしーは姉弟やなくて姉妹や！　と言いきうた。

「……うっ」

ふと思考にノイズが走り、顔をしかめる彼はあふれてくる情報を、記憶を、過去を感じてしまった。

目の前には鏡があったはずなのにいつの間にも木となってしまう、周りを見渡してみると部屋という空間から森という世界に塗り替えられていく。森に囲まれた吉夫は頭に響くノイズに耐えながらも、木々に囲まれた場所で遊ぶ幼い2人の子供を発見した。

彼らの顔にはもやがかかって性別すら見分けることができないはずなのに、なぜか吉夫にはどちらが男の子で、もう1人が女の子なのかわかってしまう。2人は楽しそうに木々に囲まれた場所で遊び、飛んだり、泣いたり、怒ったりとコロコロと表情が変化していく彼らがなぜか懐かしく、なぜか悲しい。

どうして懐かしく、悲しいのか理解できない吉夫は彼らが向かい

合い、小指をからめている姿に一層頭痛が増した。

『ねえ、リーン。これって何のおまじない？』

リーンと呼ばれた女の子は男の子の名前を愛しげに呼び、彼の頬に触れる。

『これはね、わたしたちが離ればなれにならないためのおまじないだよ、ヨシユア』

『そうなの？　いつまでもぼくたちが同じ時間を歩める……ってことだよ？』

『うん。でもね、これはただのおまじないじゃなくて魔法と呼ばれる特別なおまじないなの。悲しい時もつらい時も、不安な時もうれしい時も、生きる時も死ぬ時も、全部ぜんぶヨシユアと一緒に過ごすよ。　我、この者と契りを交わす者なり』

凜とした声を響かせるリーンに反応するように魔法陣が浮かび上がり、魔法と呼ばれる力のことを知っているかのようにヨシユアは驚かない。

『我はこの者と永遠の契りによって、未来永劫一時も離れることなく傍に居続けます。死が2人を隔てたとしても、魂は常にあなたと共にいることを、リーン・トルカットは誓います』

『ヨシユア・トルカットも誓います』

結婚式で夫婦が永遠の愛を誓うようにこの姉弟は同じように誓いを交わし、弟であるヨシユアと唇を重ねるリーン。幼い姉弟が唇を離すと、リーンは彼から目をそらし、ヨシユアは彼女にバカと返す。ここまで眺めていた吉夫はリーン、ヨシユアという名前が懐かしいと感じたが、なぜそのような思いを抱くのか彼自身さえわからない。ふうと大きく息をついてみると、いつの間に森と幼い子供たちはいなくなっていたことに驚きはしない。白昼夢とは呼べないが幻と呼ぶにはふさわしい現象に、ファンタジーだよなあと呟いて鏡に映る自分と睨めっこする。

数十分後。

彼を起こそうと部屋に訪れた恵美は目の前に見知らない女性がい

たのに、吉夫だと見抜き、彼女は着せ替え人形のように彼をもてあそぶ。

朝食の時に全員がそろうのを利用して吉夫は、ユグドラシル城の食堂に集まった明たちに朝、起きたらこうなったと一言で説明しておいた。女性陣は驚き、明は吉夫が女になったのかチェックするか言い出すので吉夫は彼を殴っておいた。女性であれば、誰だって他人に胸を触らせたり揉まれたくはないので、吉夫がしたことは正しいことである。

「アキラよ……女性の胸に軽々しく触れようとするではない」

吉夫が女性であることを肯定しているジュリアスは、彼に注意しておくと言論しだす。

「中身は男で、外見は女の吉夫に触れてはいけないのか!？」

「無論だ。馬鹿者の実った果実というのは、男であれば一度はさわってみたい場所だろう? アキラは彼の胸が気になってしょうがないだろう?」

「普通に気になるに決まっているさ! ジュリアスさんみたいに大きく熟れた果実を、吉夫が体で再現しているから……触れないと損するだろう!？」

欲望を丸出しにした明にジュリアスは羞恥に耐え、ふとサティエリナのほうに目を向けてみると、彼女は自分の胸に触れていた。大きく過ぎず、小さ過ぎずの形のよい胸であることを知っているジュリアスはサティエリナをなぐさめたいが、かえって逆効果になることを承知している。なぜなら、ジュリアスの胸はサティエリナよりも大きく、質量もたっぷりあるから。

ジュリアスが自分のことをなぐさめようとしていたことを悟っていたサティエリナは、どうして胸のことで落ち込むのか、と疑問を抱いた。普段なら、このような些細なことなど気にすることなどないはずなのに、明たちがこちら側に来てから気にするようになってしまった。

「……対等な立場だから、かな」

これまで、自分と気軽に話ができる相手はジュリアスぐらいしかなくて、寂しかったことぐらい自覚している。姫だから、という理由で誰にも近づくことができず、また、サティエリナも自分から他人に話しかける勇気がなかった。

だから、勇者として召喚された明たちとは同じ立場で気軽に話ができるから、彼女はいまの生活を気に入ってしまった。フィオナの森に巢食う親玉を倒したあとは、そこから先、想像したくないサティエリナはその時が来るまで、いまの時間を大切にしたい。

「サティエリナさんって実は秋欄くんのこと気になるの？」

自分しか聞こえないように話かけてきた恵美に彼女は驚いてしまい、赤面させるサティエリナはつい彼女を睨んでしまう。

「どうしてそうなるの？」

「秋欄くんは熱い視線を注いでいるから……普通はそうなるよ？」

「……わ、わたしがアキラさんに……？」

「そっか。サティエリナさんはその方面には疎いということなのね」
納得した恵美はそれ以上なにも言わず、サティエリナはなにが疎いのかわからずに、明のほうを見てみるとなぜか胸が高鳴る。いままでも感じたことのない感情に彼女は困惑するものの、不思議と安心してしまうのはどうしてだろうか。いまはこの正体がわからないサティエリナは胸の中に閉まっており、もう一度明のほうに向くと、吉夫が羞恥に頬を染めて彼を殴っていた。

「……メグミさん、なにが起きたの？」

「えーと……秋欄くんが吉夫くんの胸を触れてしまったせいで、彼は殴られたってこと」

「……どうやって、そんなことできるの？」

「さあ……？」

2人が呑気に話していると吉夫はこっちを向き、サティエリナと明を見比べてからとある提案を試みた。それは明がもつとも望むことでもあり、恥ずかしいことでもある。

「明！！ おれの胸を触った罰として、サティエリナの頬にキスしろ！！」

「ば、馬鹿者よ。それはさすがに……」

止めようとしたジュリアスに吉夫は彼女に耳元に囁くと、納得してくれた。彼女は主であるサティエリナにどうか、アキラにキスをされてはいかがでしょうか？ と提案していると、彼女は首を縦に振った。

ちなみに、吉夫がジュリアスに囁いたことは、明とサティエリナの2人を付き合わせるためには、と理由を述べたせい。普段の彼女ならば、吉夫の提案など受け入れないが、サティエリナと明は気が合うと見抜いていた。だから、今回は受け入れるしかなかった。

「さあ、明。ここでキスしなかったら男の恥だぞ？」

向かい合って座る明とサティエリナを眺める吉夫は、ニヤニヤしながらどうなるのか見守っていた。ジュリアスと恵美も、じっと2人を凝視することによって見られていることを意識させる。

いままで、一度も女の子とキスなどしたことない明は戸惑う。けれども、せっかく吉夫が用意してくれたこの舞台を台無しにするのはもったいないから、ゆっくりと彼女の顔に近づく。

「……長いな、ジュリアス」

「本当だな。まったく、アキラはヘタレであるな。馬鹿者よ」

「ああ。ゆっくり近づくのはいいが、時間をかけ過ぎている。ジュリアス、せっかくだから国王ギースの強さについて教えてくれ。あとは親玉についてな」

「うむ。」

陛下はユグドラシルの王になるまで、王族でありながらも毎日肉体を鍛えていた。理由は、退屈でやることがないから、というのだ。まあ、王位継承者をすでに受け継がれることを確定されていたから、陛下はあのようなことをしていたのだ。そこで、彼は当時の王に、騎士を目指しても大丈夫か？ と訊いてみるとあっさりと許可してくれたが……周囲は反対であった。時期後継者が死ぬことがあれば、ということことで周囲の人たちは不安であったが、それも杞憂に終わる。

騎士を目指すことになった国王の肉体はよりたくましく、より頑丈になっていくだけではなく、最前線で活躍する貴族として名が知られていく。退屈であった陛下の毎日は目が回るほどの忙しさで、あわただ忙しい日々を送っていたが、ある日、当時の王が急死してしまう。

時期後継者であった陛下は王の後を継ぎ、ユグドラシルという国をよくしようとした矢先に魔物が攻め込んできた。普段ならば魔物など近寄らないはずなのに、王が亡くなるのを狙っていたかのようにユグドラシルへ雪崩れ込み、国中がパニック状態であった。

あの時の陛下は王として民を守るか、騎士として戦うべきかと頭を悩ませていた時、幼い頃からの婚約者　姫様の母上が、彼に自分の好きなことをしなさい！ と叱咤しったしたのだ。

彼女によって目が覚めた王はユグドラシルを守るために立ち上がり、一振りの剣で住民を襲う魔物を次々と切り裂いていく。たとえ、剣が折れたとしても王は自慢の肉体で押し返し、最後には最前線まで拳のみで進出した彼のおかげでユグドラシルは守られたのだ。

この時に名付けられた彼の2つ名は鋼のギース。由来はどれだけ押されてもけつして引くことなく、ひたすら前に進む彼の姿が印象的であったという」

ふうと息をついたジュリアスに吉夫はお疲れと労いの言葉をかけておき、いまだにサティエリナの頬にキスできない明に呆れた。ジュリアスも彼と同じように呆れていたが、吉夫に説明できたことに満足していたので幸せであった。

「次もいいか？」

「うむ。しかし、これは私が実際に見たことではないからな。

親玉については……確か、1人は頭に一本の長い角は生やし、国王と互角に渡り合える人物。もう1人は、頭に二本の長い角を生やした人物である」

「人物……？ 魔物じゃなくて？」

「すまない……そこまでは知らない」

「いいや、いい参考になったよ。……さて、邪魔者のおれたちはさつさと去りますか」

明がサティエリナにキスするまで眺めていたら、きっと日が暮れてしまうかもしれないから吉夫は食堂から出て行く。彼と同じ気持ちである恵美とジュリアスも同行し、二人きりになってしまった明とサティエリナは苦笑してしまう。

いままで長い時間をかけていた明は、人がいなくなると迷うことなく彼女の頬にキスをする。

「アキラさんのえっち……！」

うれしそうに、または恥ずかしそうに彼に告げたサティエリナは頬を片手で隠し、明から逃げるように食堂から出て行く。

残された明は、

「吉夫、ありがとう」

と、ここにはいない相棒に感謝していた。

もみじはスケベの証

ユグドラシル城にある訓練場で明と吉夫はそれぞれの武器を構え、審判であるジュリアスの合図が出るまで2人は向かい合っていた。ついこの前まではただの高校生であつたはずの明の顔つきは、何度も魔物との命がけの勝負をしてきたおかげで、たくましくなっている。加えて、3日間もジュリアスと共にフィオナの森で過ごし、彼女から剣術を教わつたので人並みに強くなれた。

対する吉夫は、3日前から肉体が女性化してしまったおかげで、そのまま生活するしかなかった。博学であるジュリアスでさえ彼の身に起きたことなど知らないため、彼女は助言すらできなかった。解決法もないので、仕方なくメイド服を身にまとっている。理由は、恵美がせっかく女の子になれた吉夫くんには、いっぱい奉仕してもらわないといけないから、ということで彼はメイド服を着る羽目になったのだ。

ちなみに奉仕とは、恵美とサティエリナを起こすことと、彼女たちの髪を梳くことだったりする。他にもいろいろあるが、ここから先は吉夫にとつて口が裂けても言えないことなので自重しておく。

「……行くぞ」

「おう、いつでも来い。って、早いな！」

ジュリアスが開始と告げると、明は一瞬にして吉夫まで間合いを詰めてしまい、あとは剣で彼の槍を斬つてしまえば勝ちである。だが、吉夫はニヤリと不敵に笑うと振り下ろされる剣を槍で防ぎ、明を弾き飛ばした。

「ははっ、強くなったじゃないか、明！」

明の成長を喜んでいることを示すように吉夫の尻尾がふりふりと動き、彼は槍を構えるとまっすぐに突撃してくる。弾丸のように向かってくる銀の疾風に明は舌打ちしてしまい、受け止めるために最近覚えた風の魔法を唱えようとしたら

吉夫の姿が視界から消え

た。

「なっ!？」

驚きを隠せない明は周囲をすばやく見渡してみると、どこにも彼の姿などなく、上か! と思って顔を上げてみるがそこにもいない。どこにもいない吉夫にどうやって対処しようか、と警戒しながら考えていると、ブウン、という空気を切り裂く音を後ろから聞こえた。すぐさまにその場から飛び退くと、ドンッ! という音が響いた。

さっきまで明がいた場所に吉夫が立っていたが、彼の姿はさっきとは異なっていた。全身から雷をバチバチと放出させており、槍を何度か振るうと武器まで雷を帯びていく。

もしも、あれを喰らったら 打撲ではなく、骨折してしまうかもしれないと、想像しただけでゾッとする。いまは戦闘中であると頭を切り替えた明は吉夫に斬りかかるものの、彼の姿は一瞬にして消えてしまう。

周囲を見渡したところで彼が見つかるとは思っていない明は目を閉じ、訓練場にある音すべてを耳で拾っていく。これなら、目で追えなくても耳で聞こえる。

タンツ、タタツ、タンツと軽快なステップを刻む音が吉夫であるとわかる明は、ひたすらその音に耳を傾ける。タンツ、タツ、タンツと刻んでいたステップが早くなり、不意に音が消えた。かわりに聞こえたのは、ブウンと空気を切り裂く音。左斜め上であると音だけで判断できた彼は風を剣をまとわせ、そのまま斬り上げる。

金属が激しくぶつかり合う音が響き渡り、明が左斜め上に剣を斬り上げた場所に、目を大きく見開かせた吉夫がいた。彼は明が自分の攻撃を受け止めると、予想していなかっただろう。

いったん距離を取った吉夫は、すぐに明が距離を詰めようとすることにうつとうしくなる。近づけば反撃され、離れたら追いかけてくる。何度もこのようなことを繰り返していると、彼は明の攻撃パターンを見抜いたので、そろそろ終わらせようかと静かに呟いた。

斬りかかる明の攻撃をひたすらかわしていた吉夫は槍で彼の剣を

防ぎ、槍がピシリと嫌な音を立てたが気にしている場合ではない。このまま押し倒そうとしてくる明は力任せに槍を斬ろうとしたら、吉夫が雷を一気に放出させた。

視界は一瞬にして白く染まり、なにも見えない状態であったが、明は耳を利用することによっていつでも次の行動に入ろうと準備していた。ジャララという音が聞こえただけで、それ以外、なにも起きない。

「……？」

なのに、予想していた攻撃はいつこうにやってくる気配はなく、回復した目で恐る恐る開いてみた。目の前には、頭から耳と尻尾を生やした銀髪蒼眼の美女がメイド服を身にまとっていた。これはこれで、彼が口が開かなければ誰だって美人と口にするが、生憎、中身は男なのでほめられてもうれしくないだろう。

「いやらしい目を向けるな、ヘタレ勇者」

「いや、ついおまえに見惚れて　いえ、なんでもありません」

吉夫の手に収束していく雷が怖くなった明がすなおに謝罪すると彼はそれを消してくれた。安心した明はもう一戦するために体を動かそうとすると、全身に黄色の鎖がからまっていることに気がついた。風の魔法を発動させて、鎖を切り刻もうと試すがなかなか斬れない。

「ああ、1つだけ言い忘れていたぞ。おれが作った束縛用の鎖はそう簡単に切れないからな」

「これも……魔法だよな？」

「そつ、サティエリナが相手を捕まえる時に、と言って教えてもらったのさ。その結果がいまの明の状態なんだよ」

「……この鎖が切れないってことは、僕の負けだよな」

「そうなるよな。……じゃあ、あと4回もおれと手合わせしろよ？　一回だけでは物足りないし、久々にジュリアスと手合わせしたいから……な」

メイドをしていると体がなまってしまっからな、と最後に付け足

した吉夫は明の鎖を解き、彼に遠慮なく襲い掛かる。

それから、明と4回もの手合わせを終えた直後にジュリアスは乱入し、彼女は貴様と戦いたいぞ、馬鹿者！と宣言してから吉夫に迷うことなく剣を向ける。

「フィオナの森に行きましょう。ヨシユアのことについて、父上が誰よりも詳しいはずよ」

昼食を食べ終え、吉夫に髪を梳かれるサティエリナが提案してみると、全員は2つ返事で承諾してくらた。ちなみに、サティエリナが吉夫のことをヨシユアと呼ぶのは、いつまでも変態さんと呼ぶわけにはいけないから、という理由。その時に吉夫はどうやって呼んでももらおうか、と悩んでいたらヨシユアという名前が頭の中に浮かび、迷うことなく彼女にそう呼んでくれと頼んだ。以来、サティエリナは彼のことをヨシユアと呼んでいる。

「……嫉妬してしまうよな」

馬車の中で向かい側に座る明とサティエリナが会話を弾ませており、3日という時間を埋めるつもりなのかいつもよりも距離が近いお互いの指が触れるか触れないかという差がもどかしく、どちらかが触れなければ2人の距離は縮まらない、ということに吉夫は怒っている。けれども、見ているこちらが微笑ましいからそのままの状態をキープしてもいいので、許しておく。

自分の両側に座る恵美とジュリアスの様子をうかがってみると、フィオナの森にいる魔物は強いとか、吉夫くんのメイド服は萌えるとか、熱く語り合っていた。前者のジュリアスは戦闘狂だからよしとしておき、後者の恵美が語る内容は自分にとって恥ずかしいので

聞こえない振りをしておく。

「ヨシユア……か」

いまさらながら、サティエリナに名前の変更を求めれていたのに、なぜ吉夫と口にしなかったのかと疑問を抱く。あの時、吉夫という名前が出る前にヨシユアという言葉が自然に紡がれた。理由などない。だが、ヨシユアという名前は何故かなつかしいのは、どうしてもだろうか。自分でもわからないが、こっちのほうが存在している、という感覚に襲われるため安心できてしまう。

「馬鹿者よ、貴様の耳と尻尾はどうしたのだ？」

隣に座るジュリアスが手を怪しく動かしながら、問いかけてきておかげでなにがしたいのか予想できた。耳と尻尾を隠すことができるようになった吉夫は、全身の力は抜くと、頭から耳、尻から尻尾が生えてくる。

「さ、触つてもいいか？」

「……好きにしろ」

「で、では。……おお、このもふもふ感はたまらないぞ！」

耳を丁寧に触れるジュリアスの手つきは優しく、温かい。このままずつと彼女に触れられてもいいが、だんだんとくすぐつたくなるのが難点である。どうして女の子はこの耳と尻尾を触りたがるのか、吉夫には理解できない。恵美とサティエリナもジュリアス同様にも耳をもふもふしながら気持ちいいとコメントしていたので、余程耳と尻尾に魅力があるだろう、と彼は結論を出している。

「しかし……馬鹿者よ、貴様のメイド服はよく似合っているぞ」

反応したのは、彼をこのようにさせた張本人である恵美である。

「そうだよ。吉夫さんのメイド服はなかなかいいよね？」

「うむ。私も姫様に仕える身だから、誰かに仕えることの喜びを誰よりも知っているからな」

「吉夫くんが私に……。ぶっ、これはこれでいいかもしれひゃい！？」

いけない妄想を展開してしまった恵美が鼻血を出し、さらにその

先のことを言わせないために吉夫は彼女の頬をつねる。いはいいい、と痛みを訴える恵美のことを無視し、彼女のいけない妄想トリガーを引いてしまったジュリアスの頬をつねると、なにをするのだ！？と驚いていた。

「恵美に鼻血を出した罰だ」

「私のせいではないだろう！　だいたい、彼女の想像力が豊か過ぎるのがいけないのではないか？」

「たしかに、おまえの言っていることは正しい。恵美は救いようのないスケベで……。おほん、失礼。スケベではなく、エロだったな」

「わざわざ言い直さなくてもいいよね！？　吉夫くん」

「ん？　本当のことを述べただけだぞ、恵美。……おつ、ジュリアスの肌はいいな」

ジュリアスの頬をつねた辺りに手を触れ、輪郭をなぞるようになでていくと彼女の顔が赤く染まっていく。拒否しようとすれば拒否できる。なのに、拒む気にもなれないジュリアスは彼に触れられていることに、うれしくなってしまう。

「ば、馬鹿者。もうよいだろう」

恵美がこちらを睨んでいることに気付いたジュリアスがやめさせようとすると、吉夫は気にすることなく、彼女の頬をなで続ける。彼の行動が気になった恵美は確認するように問いかけた。

「人嫌いの吉夫くんは……ジュリアスさんのことを気に入ったの？」

「そうだ。悪いかな？」

「うつん、悪くないよ。……ねえ、吉夫くんがジュリアスさんのことを気に入っているなら、私もあなたのお気に入りでよね？」

「う、うるさいな、エロ恵美！」

「すなおになれない吉夫くんって実はツンデ　ふにゅあ！？」

前触れもなく馬車が大きく揺れると、恵美の向かい側に座っていた明が飛んできた。突然の出来事に彼は対処できず、そのまま恵美に突っ込むと　彼女の胸に顔からダイブしてしまう。明の視界は真っ暗でなにも見えない状況であったのに、顔に当たる感触は気

持ちがよく、鼻腔をくすぐる甘い匂いを味わってしまう。

「おお……これこそ、ラッキースケベというのか。ゲームとマンガでしか起きない現象だと思っていたが……実際に目撃すると、うらやましいの一言だよな、明」

「一体なにがラッキースケベなんだよ、吉夫！？　んなつ！？」

感心している吉夫にツツコミを入れた明がガバツと顔を上げると、彼の視界に映ったのは形のよい胸。大き過ぎず小さ過ぎず、ほどよい大きさであるそれが眼前にあった時点で、明は向かい側に誰が座っていたのか思い出す。数秒で恵美という解答が導きかれ、ゆっくりと顔を上に上げていくと　耳まで真っ赤に染まった二階堂恵美がいた。

「あはは……やあ、メグさん」

「白々しいぞ、明。せめてここは、事故なんだ！　許してくれ！　けっして僕が好きであなたの胸に飛びついたわけではないのさ！！　と笑顔で述べるべきだろう」

唯一、この状況を楽しんでいる吉夫は、サティエリナとジュリアスの明に向ける絶対零度の視線をさらに下げていく。口をばくばくと動かすことしかできない恵美は、これが現実であると理解した瞬間に彼を引っぱたく。

パンツという乾いた音が静寂に満ちた馬車の中でよく響き、明の頬には立派なもみじが完成した。

彼と彼女の理由

フィオナの森にある駐屯場に着いた明たちは、さっそくギースに会うために彼がいるテントまで女性の騎士に案内されていた。途中で男性たちからハーレムだよとか、修羅場かよとか、勇者も男だよとか、あのもみじスゲーとかいろいろ言われたが、明はすべて無視しておいた。

また、途中で女性たちからあの2人つてもしかしてとか、レズかもしれないとか、あの人とならいいかもとか、同性に思えないとかいろいろ言われたが、吉夫は楽しみながら聞いていた。レズかもしれない、というのは恵美が彼の腕に抱きついている状態なので、そう思われてもおかしくない。

彼女が吉夫に抱きついているのは、明に胸を触れられたことを忘れるようにしているため。けっして、恵美が自分をアピールしようとしているわけではなく、単純に嫌なことを頭の中から追い出そうとしてるだけ。

「……恵美、離れてくれ」

「嫌だよ」

「はあ……好きにしてくれ」

「うん、好きにしたらうよ」

第三者から見れば2人は同性で付き合っているようにしか見えない。吉夫は彼女にレズ疑惑をかけてたくなかったが、あらためてレズであると頭の中で訂正した彼は大きく息をつく。

「こちらです、サティエリナ様」

騎士が1つのテントの前に立ち止まり、彼らに気絶しないでください、と最後に女性陣のみ告げると去っていく。意味がわからない。明は失礼します、と声をかけてテントの中に顔を出した彼は我が目を疑った。目を何度もこすり、それを見ている彼は夢か現実か確かめるために頬をつねる。痛い。現実であるとわかった明はそれを受

け入れるしかなかった。

体育館の広さを持つテントの中で、上半身の男たちは腕立て伏せ、腹筋、スクワットなどしていた。そこには、当たり前のように男たちが同僚に筋肉を見せびらかしていた。

「アキラさん、失礼します」

テントの前で立ち止まる明を不審に思ったサティエリナが、足を踏み入れると、いままでトレーニングしていた男たちの動きが止まった。石像のように動きを止めた男たちのことを見向きもせず、この場で唯一動く人物まで近づく。

腕立て伏せをしている男性　短く切り込んだ金髪、彫りの深い

^{せい}精悍な顔つき、M型の

^{ひげ}髭が立派なのは、ユグドラシル現国王であるギース・ゴラエツト・バルであった。

「……父上」

「おお、我が最愛の娘サティエリナよ！　なぜここにいるのだ？」
腕立て伏せをやめた彼が立ち上がると、彼女は白狼について一言告げただけで彼の顔つきは変化した。タオルで汗まみれの全身を拭きながら、石像のように固まる男たちに解散！　と命じた。

「さて……こうしてゆっくりと話すのは初めてとなるな、勇者アキラよ」

衣服を身にまとったギースと向かい合って座るのは、明と恵美の2人だけであった。吉夫はメイドになりきっているのか、明たちと座ることなく、彼らの後ろで控えていた。同じように、ギースの隣に座るサティエリナの専属騎士であるジュリアスも彼のように、彼

らの後ろで控えていた。

一度、ギースはヨシオがいないではないか、と心のなかで呟くと、明たちの後ろに控えるメイドに睨まれた。彼女が、吉夫であると思ひ抜いたギースは女装好きとは、異世界人も変わったものであると、これも心のなかで呟くとメイドから冷気が漂いだす。

吉夫の沸点が限界であると察知した明は彼が暴れる前に、話をそらすことにした。すると、彼から漂っていた冷気が収まっていく。

「は、はい。ゆっくりと話し合う時間さえありませんでしたね」

「緊張するではない。もっと砕けた口調ではないと、話ができないだろう？ それに、いまの私はユグドラシルの王ではなく、1人の人間としてここにいますから」

「……わかりました、ギース陛下」

始めて出会った時とはことなる雰囲気、明は、これが本当の彼である、と心の中で再評価してしまう。明は大きく息を吸い、白狼について語り出そうとしたときに、ギースが先に口を開いた。

「アキラよ、こちらの世界　アースに来てからすでに5日も経つが……変わったことはなにもないのか？」

「あります。3日間もフィオナの森で魔物狩りをしていたら、突然、風の魔法を使えるようになりました」

「風か……。言い伝えにある通りに、召喚される勇者は必ず風と光の魔法を習得するというが……アキラ、光の魔法はどうだ？」

「いえ、僕はいまのところ風しか感じることしかできません……。しかし、なぜ、必ず風と光なんですか？」

「知らん。ただ、1つだけ断言できることは魔を払う力、ということだ」

彼らの会話を聞いているサティエリナは黙っているのも面倒になり、明の後ろに控える吉夫に目でアイコンタクトを送る。3日もずっと彼女の世話をしてきた彼は、サティエリナがなにかをして欲しいを察する。なにをすればいいか、と思考していると、彼女の機嫌をよくすることを思いついた。

サティエリナの背後に立ち、懷に隠していた櫛^{くし}で彼女の髪をすいでいく。メイドとして働くようになったせいか、櫛ぐらいは当たり前のように持ち歩くようになってしまったのは、彼女のせいである。上機嫌なサティエリナは吉夫にどのような下着がいいか、どのような色がいいのか、と彼にとつて屈辱的な質問をぶつけていく。それなのに吉夫は気にすることなく、平然と彼女の質問に答えていく。これは恵美が、吉夫くんに似合う下着はどれがいいのか、私が選んであげる、と下着をたっぷりと見せつけられたせいで耐性ができてしまったのだ。

「サティエリナよ……アキラが顔を赤らめているだろう？ もう少しだけ音量を下げてはくれぬか？」

「いやいやいや、真剣な話をしている最中に女性の下着について語られると、そっちのほうを聞きたくなるだけですから」

「男だな……アキラよ」

「うわ……つい、いつもの癖でツツコミを入れたよ。……すいません、ギース陛下」

「はっはっはっ、気にすることはない。男とは、常に女を求めてしまふ生物であるからな。そのような話には誰だって興味があるだろう？ 私も若かった頃、よく同僚たちと女性の下着について語り合ってたぞ」

堂々と過去を暴露するギースにサティエリナは、心の中で母上に報告しようと思ひ、明はどう反応すればいいのかわからない。恵美はギースに呆れてしまい、ジュリアスは彼が後で「お仕置き」されることに苦笑いを浮かべた。

「話がずれたな、アキラよ」

「ええ、脱線しましたね」

「話に戻るとするか……。本題である白狼について知りたいのだろう？ サティエリナよ？」

確認するようにギースが問いかけると、彼女は首を縦に振り、彼は自分が知っていること 白狼について語り出した。

白狼とは、昔からフィオナの森に暮らす精霊であり、ユグドラシルという国を太古から守り続けてきた存在。争いを好まず、普段は森の奥でひっそりを暮らしているがユグドラシルの危機のみ姿を現し、人々のために戦う。人々は白狼に感謝しながら、彼を神として崇^たりながら日々を過ごしていく。

「父上、白狼が精霊というのはどういうことですか？」

「慌てるではない、話は始まったばかりだぞ？」

月日が流れ、いつしか人々は白狼のことを忘れてしまい、彼らは自分たちの好きなように毎日を過ごしていた。栄枯盛衰を繰り返していく人々を白狼は遠くから見守り、彼らになにもすることはないと判断した彼は森の奥でゆっくりと生きる。

だが、ある日、当時の王がユグドラシルをより大きくするために、森を焼かなければならない、と国民に命じた。彼らは王に疑問を抱くことなく、命じられるままに森を燃やしていく。

白狼は人々のために命を懸けて戦ってきたのに、彼らは恩を忘れ、自分たちの欲望のためだけに森を燃やすことに腹を立てた。森を燃やしていく人々の前に現れた白狼は迷うことなく、その場にいたすべての者の命を奪った。

以来、精霊であった白狼は魔物と呼ばれ、ランクAという危険度を付けられた。

「以上。質問は？」

「……なぜ、父上は本にさえ書かれていない話を知っているのですか？」

「すべて口で語り継がれてきたからこそ、本に書かれていないのだ」「たしかにそうですね……あれ？ なにか大切なことを忘れているような気が……」

なにかを忘れているような気がするサティエリナは思い出そうとしていると、ギースが明に、娘とは良好な関係なのか？ と疑問をぶつけていたので、彼女は考えることをやめた。

途中でジュリアスが明をからかうために、アキラは胸が大きい女

性が好きだろう？　といえば、彼は巨乳こそ女性の特徴であると即答した。すぐさまにサティエリナは彼に、外見よりも中身重視と説教しだす。

この時、誰も吉夫と恵美がいなくなっていたことに気付いてはいなかった。

ギースたちの話を聞いていて退屈であると感じていた吉夫は、誰にも気が付かれることもなく、ひっそりとテントから抜け出した。彼らの話はたしかにおもしろいが、あそこには自分がいなくても大丈夫であると判断したからだ。

「……やることねえ」

槍を背負っている彼は自分が注目されていることすら気にも留めずに、駐屯場を歩き回る。その間に、彼はメイドになってからの３日間を振り返るうとして　やめた。正直、あれは恥ずかしい。初日にサティエリナから、わたしの手伝いをする？　と言われ、やることのなかった吉夫は仕方なく彼女の手伝いをした。その最中に、恵美がひょこりと顔を出し、せっかく吉夫くんがサティエリナさんの手伝いをしているから、メイドさんになろう、と宣言された。

恵美によつてメイド服に着せ替えられた吉夫は、サティエリナの補助をしていたら、他のメイドたちから人手が足りない、とSOSされた。これも仕方なく、彼女たちの仕事を手伝っていたら、いつの間に日が暮れるまで働いていた。

メイド長が、今日はお疲れ様でした、とメイドたちに告げたときに見慣れないメイドがいて、彼女は誰なのか、と問いかける前に気が付いた。吉夫であると。すぐに彼女は、申し訳ございませんと謝

罪し、本人といえば、魔の手から逃れただけでよかったよ、と返した。

以来、吉夫はメイドたちと一緒に働いており、魔の手である恵美から逃れるために彼は一生懸命メイドとしてがんばった。おかげでサティエリナから専属従者にならない？ と提案されたこともある。「……本当に、あの娘たちに許してもらえてよかった」

頭の中に浮かび上がるのは、一番忘れたかったあの出来事のみ。この3日間、恵美が女の子同士の付き合いはやっぱりお風呂だね、と有無を言わせることもなく、吉夫は彼女に風呂場まで拉致された。気がついたら、身にまとっていたメイド服を脱がされてしまい、代わりにあったのはバストオル一枚のみ。振り返れば、恵美もバストオル一枚のみの姿で、彼女は困惑する彼など気にすることもなく、風呂場まで背中を押された。

風呂場というのは、思っていたよりも大きく、50人ぐらいの人が入ってもまだ余裕がありそうな場所だった。問題はここではなく、そこにいた少女と女性たち。

一系纏わぬ姿で体を洗い、風呂に浸かる少女と女性たちは気持ちよさように目を細めていた。あそこにいた全員は、住み込みで働くメイドたちであった。

あの時、吉夫はぶはつと盛大に鼻血を吹き、虹のアーチならぬ血のアーチを作ってしまったのだ。おかげで注目を浴びてしまい、吉夫は殺されるか、気が済むまで殴られるか、と想像していたが、彼女たちは許してくれた。すべての根源であるのは、恵美であると彼女たちは理解していたため、その日以来、入浴する場合はバストオルま巻くべき、というルールが生まれた。

「……うわ、今日はジュリアスも一緒じゃないか。これは……バレたら殺されるところで済まないぞ」

考えただけでゾツとする。

元は男であった吉夫が女性専用の風呂場を利用し、彼女たちの肢体を思う存分眺めることができる、とジュリアスに思われる。実際

に、吉夫は彼女たちの肢体すら見ていられるほど余裕などなく、顔をうつむかせながら着替えるだけで精一杯なのだ。まあ、その際に赤や白、緑に黒というさまざまな色が目に映ることは仕方ないこと。「でも……ポニーテールではないジュリアスもいいかもしれないな」「へえ、吉夫くんってジュリアスさんのことが好きなんだ」「め、恵美!？」

心臓が止まるぐらいまで驚いた吉夫は、彼女がすぐ近くまで接近したことすら気付くことはなかった。吉夫は何度も深呼吸を繰り返して、目の前に立ち止まる恵美がいたから、落ち着いたところで彼女の頬をつねる。

「いきなり声をかけるな、エロ恵美」

「だって、私が何度もあなたに声をかけたのに見向きもしないで、ぶつぶつとあの娘の肢体は……とか呟いて、ニヤニヤしていたくせに」

「……マジで?」

「うん、本当だよ。　　じよ、冗談だから落ち込まないでよ、吉夫くん!」

その場でしゃがみ込んで、おれって最悪な奴だ最悪な奴だ、と嘆いていた吉夫に恵美が訂正すると、彼は再び頬をつねる。もう慣れてしまった痛みなのに、今回ばかりはいつもより痛くて泣きそうになるぐらい。

「よ、吉夫くん。は、離してえ」

「あ、悪い」

うるうると潤んだ瞳を上目使いで見上げる恵美に、罪悪感を覚えた吉夫が手を離すと、彼女はつねられた頬をさする。さすがに、今回ばかりはいつもよりもやり過ぎた吉夫が謝罪でもしようかと、考えていたら恵美が、

「ジュリアスさんのこと好き?」

と口にしたので謝らないことにした。

「好きってわけじゃないさ。ただ、あいつが普通の髪型だったら、

と想像していただけさ」

「私は一度だけジュリアスさんの普通の髪型見たことあるよ？」

「それは……一緒にお風呂に入るから、嫌でも見てしまっただろう」

「そうだよ。でね、こっちに召喚されたときに、サティエリナさんとジュリアスさんと一緒にお風呂に入った時……私の理性がぶっ飛んじやった」

「……は？」

「あ、あのね、吉夫くん。本当に理性がぶっ飛んじやったの。ジュリアスさんの鍛えられた肉体に、たわわに実った果実がたまらなくて……しかも、巨乳じゃなくて爆乳だよ。痛いよ、吉夫くん！」

これ以上、彼女たちの間になにがあつたのか知りたくもない吉夫は彼女の無事な頬をつねる。少なくとも、恵美の理性が飛んでしまふほど、彼女たちの肢体が美しかった、と話の流れだけでわかつた。吉夫にとつて、何故サティエリナが恵美と一緒に風呂に入らたがらないのか、納得できた。

「……」

「……」

会話が途切れると、2人の間に沈黙が訪れる。なにか話題はないのか、と思考していると吉夫はあることを思い出し、そのことについて彼女に問いかけることにした。

「なあ……どうして、恵美は鈴音りんねの提案を……彼氏彼女の案について受け入れた？」

それは恵美と出会ってから、一番知りたかつたこと。

彼女、二階堂恵美は田倉高校では男子が付き合いたい女子ベスト3に入るほどの人気であつた。男子から告白されることがあつても、彼女はけつして受け入れることはなかつた。

当時の彼女は、田倉高校の剣道部の部長として部活に励み、誰もが彼女の実力を認めていた。放課後になると、彼女は迷うことなく部室に向かい、日が暮れるまで竹刀を振るっていたというのだ。部活だけで精一杯の彼女が、他人のためにわざわざ部活をサボること

はありえない。

「それはね……鈴音が吉夫くんのことについていろいろ教えてくれたおかげだよ。吉夫くんは人嫌いで、他人には興味を抱くこともなく、気に入った人としか話をしないということを聞いたから。」

だから、私はあなたの友達になってもいいかも、と結論を出して、あの日、あなたと出会ったの」

「そのためだけに……部活をサボったのか？」

「私がいなくても、部員たちにはしっかりと練習するように鍛えたから平気だよ」

「……鬼だ」

「鬼でけっこうだよ。」

これで……私が鈴音の提案を受け入れたことについて話したから……次は吉夫くんの番だよ」

「……単純に、恵美という鈴音の親友はどういう人なのか知りたかったただけだ」

ぷいっと顔を背ける吉夫の頬はほんのりと赤く、からかいたくなつた恵美は彼に反撃しだす。これまで、散々（さんざん）頬をつねた罰として。

「他人に興味ない吉夫くんが私について知りたかったというけれど……本当は、気になっていたじゃないの？」

「気にならない！」

「嘘だね。だって、鈴音がよっしーは女の子には興味ない、とか言っていたよ？ それも、毎回鈴音が紹介しようとする女の子を拒絶するぐらいだから……私のこと、気にしていたの？」

「ああ、そうだよ！ 悪いかよ！？ おまえみたいなスゲーかわいい女の子だったら、おれでも興味津々になってしまうからな！」

思わず本音を告げてしまった吉夫が慌てて口に手を当てるが、時すでに遅し。

花のような笑みを浮かべた恵美は、吉夫くんも男の子だよね、と呟いていたのを彼は聞いてなかった。聞く余裕すらない吉夫は焦っ

ており、恵美は二度と来ないかもしれないこの機会を利用しておくことに。

「吉夫くん……私のこと好き？」

「ああ、好きだよ！ いや、恵美のことを気に入っているだけであつて、けつして好きではない！」

「どっちなの？ あ、友達としてか、異性としてか答えてね」

「友達として好きだ！ 大好きだ！ 　　つて、おまえはおれに恥ずかしいことを言わせていよな！？ 　　なつ、恵美！？」

「いひゃい、いひゃい、いひゃい 　　！！ 私の頬が千切れちゃうよお 　　、吉夫くん！！」

顔を真っ赤に染めた吉夫は恵美の頬を遠慮なくつねてあげると、彼女はこれまで感じたことのない痛みに抗議していた。

でも、吉夫は恵美とこうして打ち解けることができたから、‘鈴音の親友’から‘本当の友達’として彼は受け入れることができた。こうして誰かと一緒にいるのも悪くはない。

2つの月の下で

夜空に浮かぶのは、バラのような鮮やかな赤に染まる満月と、雪のように真つ白な三日月の2つの月。フィオナの森には木々ばかり並ぶが、とある場所だけぽっかりと穴が開いているような不自然な場所に少女はいた。ストレートに伸ばされた髪は三つ編みにまとめられて、人懐っこい笑みをしている彼女は夜空に浮かぶ2つの月を見上げている。

「ねえ、ヨシユア。また私と殺し合いをしましょう？」

誰にも聞かせるつもりもない少女は視線を下に向けると、そこには忠誠を誓う騎士のように膝を地につける2人の姿が映る。1人はヘラクレスオオカブトのように立派な一本角を頭から生やし、がっしりとした体を見せつけるように上半身裸の男性。野生的でワイルドな顔つきが特徴的である。

もう1人は、クワガタのように鋭い牙を頭から生やし、腰には2本の剣をぶら下げている男性。こちらは、ワイルドな男性と比べて線が細い顔つきをした人物であった。

それぞれ、頭に角さえなければ人間であるが、生憎ながら彼らはそのような存在ではない。

彼らは魔族と呼ばれる種族であり、見た目は人と変わらないがそれぞれ特徴がある。例えば、彼らのような角や鋭い牙を生やしたり、強靱な爪きつめがあったり、岩のような硬い鱗うろこをしていたりする。

「あなたたちは誰？」

「はっ。私はグルトス、こちらは弟のガルバと申します。リーン様」
一本角のワイルドな顔をした男性　グルトスが彼女の問いに答え、鋭い牙を生やすもう1人　ガルバは無言で首を縦に振る。どちらも肯定であると受け取った少女　リーンと呼ばれる九条鈴音くじょうりんねは人懐っこい笑みを消すと、獰猛な微笑みを浮かべた。

グルトスとガルバは彼女の笑みによって本能的に危険を察知し、

つい身構えてしまう。いつでも戦闘できるように構えている彼らにリーンは気にしないで、と伝えるが2人はそのようなことができない。彼女から漂う雰囲気は、自分たちが何度も潜り抜けてきたにいい。死。1歩間違えれば、彼女に牙を向けられてしまい、ここで死ぬことになるかもしれない。

「人間と魔族って、意外とバカなことをしているのね」

人ではない、たったそれだけの理由で人間と魔族は昔から争い続けている。魔を統べる魔王は、魔族がしていることに対してこればかりも気にしていないので、干渉することなく、静観している。ただ、彼は争いたい奴は好きにしろ、と魔族たちに伝えているので、彼らは自分たちの好きなように過ごしている。

これが、人々が苦しんでいる理由であると知っているリーンは目を閉じた。

「懐かしいわ……」

幼い頃からずっと一緒に遊んでいた最愛の弟の記憶を振り返るリーン。いつかは離ればなれになる、と子供の頃に悟った彼女は彼とそうならなかったために、契約を結んだ。幼くして聡明であった彼女が行った契約は死が2人を別れても、どちらかの魂は生きている者に吸い込まれる。それは、死してもなおずっとその者の傍に居続けるという魔法である。

「いつユグドラシルを攻めるつもりなの？」

確認するように問いかけると、グルトスは彼女のことを警戒しながら答える。

「私たちの気の向くままに」

「……つまり、終わらせるつもりは微塵もないのね。まったく、強者を叩きのめすことが好きなくせに、弱者とか、国には興味ないんだから」

「……御意」

「なら、さっさとユグドラシルを終わらせなさい。あなたたちの主である魔王が　私のお父さんが早く俺のところに戻って来いだっ

て」

「御意」
ひやうい

跪ひざまずいていた魔族たちはそれを聞くと、彼女に背を向け、音もなく姿を消した。グルトスとガルバは他の魔族たちとは違い、魔王に忠誠を誓っているため、彼のために動くことが多い。

1人残されたリーンはもう一度だけ、夜空に浮かぶ2つの月を眺めてからゆっくりと歩きだす。闇夜に染まる世界に紛れるように、彼女は闇に溶けていく。

白狼戦

「……ん？」

気持ちよく寝ていた吉夫は頭の上でぴくぴく動く耳のせいで目覚めてしまい、今日も仕事するか、と呟いたときにいつもと違う部屋であることに気付く。ここがどこなのか、と目覚めたばかりでぼんやりとする脳をフル回転させていくと、ここがフィオナの森の駐屯場ということを出す。

昨日、ギースと明が女性にモテるためには、とくだらないことで熱く語り合っていたせいですっかり日が暮れてしまった。城に帰りがたかったサティエリナが文句を漏らしていたが、片道二時間もかかるということに戻ることをあきらめ、ここに泊まることにした。

そして、明たちはギースから余っていた魔導具のテントを借りると、そこで一夜を過ごすことに。就寝前まで熱く語り合った明とギースに女性陣は呆れてしまっていることを、彼らは知らない。もちろん、ここで恵美を筆頭に始まったガールズトークもあり、彼女たちは交流を深めた。だが、吉夫だけはそのどちらにも参加せず、さっさと寝たのだ。

「白狼が精霊……か。もしも、本当にそうであつたらおれはあいつから、加護、でも受けたかもな」

白狼が魔物ではなく精霊であると、ギースから教えられた吉夫は自分なりに考えてみた。

精霊ということであれば、なにかしらの加護を受ける。定番であるファンタジーゲームのイベント風にしてみると、いまの吉夫はまさにそうである。

もつとも、それが本当であるかどうか彼にさえわからない。あくまで、吉夫が考えたことは仮定でしか過ぎず、結論まで至っていない。もしも、本当に加護を受けたのであれば、何かしらのサイン例えば、体のどこかに痣が浮かび上がるとか、傷跡が残るとか。

そこで吉夫ははつとあることを思い出し、白狼に噛まれた腕を見
てみる。あの日、始めてフィオナの森で魔物狩りをしていたときに
偶然出会った白狼のことを。白狼は、自分を見るときなり声を上げ、
何の前触れもなく襲い掛かってきたのだ。その時に腕を噛まれたが、
まったく痛みという痛みなど感じなかった。

とつさに、自分は仲間を守るために白狼に槍で貫こうとしたのに、
遊ばれているようにすべてかわされた。いまでも思い出せる。あの
時の白狼は自分を試すような目で戦闘を行い、こちらに手を出すこ
ともなく、ひたすらよけ続けていた。

手を出した、と言えるのは、最初に腕を噛まれたときぐらいのこ
とだけ。

だが、腕には傷跡らしき傷などまったくないので、吉夫はここで
思考を中断しておく。朝から頭をフルに回転したおかげで、ぐうと
腹の虫が鳴いてしまったからだ。単純にお腹が空いているだけであ
って、本能が栄養が必要であると訴えているだけの話。

「この耳……どうにかならないのか？」

起きてからずっと、ぴくぴくと釣り上げられた魚のように動く耳
にイラついてきた。普段から吉夫は女性、という姿を維持するため
にいつもその形を頭の中でイメージしておかないといけない。そう
することで、頭の上にある耳、尻から生える尻尾は隠すことができ
るのだ。

しかし、寝るときだけは女性という形を維持しなくてもいいので、
頭と尻から耳と尻尾が生えてしまうのだ。

どうにかならないのか、と考えようとしたが、脳がまともに動か
ない。どうやら、このような小さなことでも、思考することさえ億
劫らしいので、一番楽なことをすることにした。動く耳を取り押さ
えるように、片手でそつと優しく手を添えてみると、頭の中に直
接、男性の怒鳴り声が響いた。驚いた吉夫は、ベットと落ちてしま
い、背中から床にダイブしてしまう。地味に背中が痛い。

『我の声を聞いているのならば、ふんとかはいとか言うがよい!!』

痛みに顔をしかめるよりも、耳元で叫ばれているような感覚で耳がキーンとする。

「はいはい、ちゃんと聞こえていますよ」

「ならば、さつさと答えぬか！！」

「うるせえよ。もう少しだけ音量を下げてくださいないと、鼓膜が破れそうだ」

『ぬつ。すまぬ。少しばかり焦っていたからな』

慌てていた声の主が落ち着く雰囲気を感じながら、いつもと同じように給仕服　メイド服に着替えていく。女性化して以来、やることなどまったくなかった吉夫にサティエリナが仕事を与えたのだ。それが、メイドという仕事であった。それと、サティエリナが時間があるときに魔法について教えてくれた。

何度も同じ服を着ている吉夫は、いつものようにすーすーするスカートを履き、黒をベースとするメイド服を身にまとっていく。一度、鏡の前に映る自分を見てみる吉夫は、にこつと微笑んでみた。

鏡に映る自分はメイド服を身にまとい、流れるような銀髪は腰まで届いている。海のように青く染める双眸、整えられた顔つきは充分に美人と呼べるレベル。豊満な胸は、服の上からでもわかるほど自己主張しており、吉夫はそこが大きくても本人は苦労する、と学んだ。

「重いよな……」

文句を漏らす吉夫。

女性であれば、誰だってあこがれる胸のサイズ　巨乳と吉夫は予想しているが、実際に体験してみればその幻想は打ち碎かれる。

まずは重く、次に歩くときは胸がゆっさゆっさと揺れるが、ブラジャーで動きが制限されているので気にしなくてもいい。最後に男たちからいやらしい視線を向けられ、虫唾が走る。プラス肩が凝るのだ。以上の4つが吉夫が体験してことである。

「馬鹿者、朝食前に私と手合わせして……」

ノックもせず吉夫の部屋に足を踏み入れた侵入者は、鏡の前で

につこりと微笑む彼に言葉を失う。すぐに微笑みを消した吉夫は、顔が熱くなるのを感じながら振り返ってみると、部屋の入り口にジュリアスがいた。彼女は鎧を身にまとい、腰に剣を差し、いつものように金細工のように輝く金髪をポニーテールでまとめ、自信にあふれたエメラルドグリーンの瞳。

モデルのように背が高く、凛々しい顔つきをしているので、たまに吉夫は彼女に見惚れそうになるが頭を振って忘れるようにする。

鎧の下に隠された凶器　爆乳と彼女の美貌を。

「どうした、ジュリアス？」

なるべく平然とした態度で問いかける吉夫。

「朝食前に体を動かしたくなったが、馬鹿者以外は寝ているから貴様と手合わせしたい。……ん？　なぜ頭から生えている耳を押さえているのだ？」

「あー……このことについて説明するのは後でいいか？」

「うむ。貴様がそれでいいのであれば、私は構わないぞ」

「そうか、じゃあ外に行くか」

槍を背負った吉夫はいまだに片手で頭から生える耳を押さえており、ジュリアスから向けられるいぶかしげな視線は無視しておいた。

フィオナの森の近くにある駐屯場から、人気のない場所を探し求める吉夫とジュリアス。それまで2人は口を開くことなく、黙々と歩き続けていた。会話をすることもなく、ひたすら歩き続けていると、ようやく人気のない場所を見つけることができた。

それも、駐屯場からだいぶ離れたところにあるが、彼らにとって都合がいい。剣戟が朝から鳴り響く、ということで他の者たちを起こしたくないからだ。

ここで、いままで押さえていた耳から手を離した吉夫は、疲れたようにため息をつく。

「ここなら、おれたちが全力でぶつかっても誰も気にしないよな」

「うむ。魔物の襲撃と勘違いされるかもしれないが……まあ、平気かもしれぬ」

「それを聞いて安心した。じゃあ、そろそろおれが耳を押さえていた理由を話すぞ　白狼からテレパシーが送られてきた。以上」

「……はっ？」

斜め上過ぎる彼の解答にジュリアスは、こいつはなにを言っている？　と疑問を抱いたが、ふむと思考しだす。だが、彼女の考えを遮るように吉夫は足りない言葉を付け足していく。

あの日、つまり明たちがフィオナの森で魔物狩りをしていたときに白狼は、なぜか吉夫に目をつけた。白狼は、彼がある程度の槍術と魔物を迷うことなく殺す、ということと襲い掛かった。いまなら、彼は、どうして白狼がギースを選ぶことなく、自分にしたのかわかる。勇者の友人　明の友達であるということで、白狼は自分を選んだのだ。

吉夫とは、天と地の実力差があると知りながらも、白狼は彼と戦う。そして、白狼は彼の腕を噛み、そのときに吉夫に力　加護が与えられた。

「加護が与えられたことはわかった。しかし、なぜ女性化したのか……わかるのか？」

疑問を抱いたジュリアスが問いかける。

「それがな、中途半端な加護だから……だと」

「ぬ？　それは一体どういうことなのだ？　貴様は、確かに白狼から加護を授かっただろう？」

「ああ、だからな、いまからそのことについて話そうとしたのさ。ちよつとばかり、ややこしくなるけどな」

「それでもよい。いつもは、私が貴様かアキラたちに説明ばかりするからな。たまには、聞くのも悪くはないだろう」

微笑みを浮かべるジュリアスに、吉夫は直視できずに目をそらす。首を傾げる彼女に、吉夫はなんでもないと伝え、話を続ける。

中途半端というのは、白狼が吉夫にちゃんとした形のある試験を与えなかったこと。今回、白狼がしたことは、試験を与えることなく、直接加護をあげたということ。それを受け取った吉夫が、女性化してしまったり、耳と尻尾が生えたり、突然魔法が使用できるようになったという。

そして、彼がここにいるのは、もう一度白狼と向き合ってちゃんとした試験を突破するため。同時に、今回は天と地という実力差であったが、今回は互角に戦えると吉夫は踏まえている。

「そういえば、なぜ馬鹿者が白狼に加護を受けるのだ？ 普通は、勇者であるアキラが加護を受けるはずであらう？」

「白狼いわく、明は近いうちに勇者の力が覚醒する、だとさ」

「精霊には、そのようなことがわかるのか？」

「知るか。おっ……噂をしていれば、やってきたぞ」

音もなく森から姿を現したのは、白銀に染まる体毛を血によって赤く染め、目は海のように青く染まる狼。精霊である白狼であった。彼を目にした直後にジュリアスはとっさに剣の柄に手を伸ばし、いつでも戦闘できるように構える。

『ほう、我が戦っている間に女性と戯れておったのか？』

吉夫だけ来ると思っていた白狼が冗談交じりで言ってみると、彼の雰囲気さがらりと変わる。

「抜かせ、白狼。こっちはこいつに話を聞かせていただけだ」

吉夫からうつすらと冷気が漂い、彼の隣に立つジュリアスは体がぶるりと震えた。寒いとかではなく、彼から放たれる殺気を浴びた彼女は、冷や汗を流す。これが馬鹿者であったのか、とジュリアスは疑いたくなるほど彼は豹変していた。

「さつさとめえの試験を出しやがれ、白狼」

腰を低く構え、左足を前を出し、槍の先を白狼に向ける吉夫。

彼が殺意を振りまいているのは、恵美に弄ばれ、メイド服で屈辱

を味わったから。おまけに、明に胸を揉まれてしまい、さらには男たちのいやらしい視線を向けられたせいでもある。こうなった原因を叩き潰さないと、気が済まない。

彼が白狼と戦うことを察知したジュリアスは、後ろに下がった。それを合図に吉夫は力強く地面を蹴り、白狼は慌てることもなく、ただ不満を漏らすだけ。

『やれやれ、試験はこちらが出すまで待たないのか。まあ、よいだろう。試験は我を倒すことである、と伝えておくぞ』

一直線に向かってきた吉夫の突きを頭を少し動かすだけでかわし、銀の毛が宙に舞う。目を大きく見開かせる彼に白狼は、ふつと余裕の態度で笑うと、吉夫の腕を噛んだ。それも、今度はこの前とは違う場所であった。

「！」

全身を駆け巡るのは、感電死するかと思うほど強い電流が流れていく。体が麻痺するという感覚を感じながら、吉夫は腕に噛み付く白狼を蹴り飛ばそうとするが、あっさりとよけられた。

『ほう、我が与えた麻痺でも動けるのか。これは意外であるな』

感心するように白狼は、ぎこちない動きで槍を突いてくる吉夫の攻めをいとも簡単にかわす。元々、彼に勝つ自信がある白狼は、ある程度かわすと、吉夫に体当たりをくらわせる。

麻痺によって思うように体が動かない吉夫は、白狼の体当たりをよけることもできず、直撃してしまう。そして、白狼は倒れた彼に覆いかぶさって、鋭い牙で吉夫のメイド服を切り裂いた。服に隠されていた白い肌が現れ、羞恥に染まった吉夫は麻痺を感じさせない動きで、白狼を全力で殴る。

「このド変態狼がああああ！！」

自分の上に覆いかぶさる白狼の腹を殴ると、名残惜しそうに吉夫から離れていく。全力で殴ったのに、痛がる素振りも見せないのはあまり効いていないだろう。

『つまらぬ。おぬしが泣き喚く姿を見れると思ったのだが……うま

くいかないものだな』

これが精霊であるのか、と吉夫は疑いたくなかったが、いまはそんな些細なことを考えている時間はない。一刻でも早く、全身に感じる麻痺をどうにかしなければ、白狼には勝てない。吉夫は、動かない体にイライラしながらも、あることをふたつ思い出した。

「なあ、どうして朝は焦っていたのか、教えてくれるか？」

『よいだろう。早朝、いままでやることもなく、この地で過ごしていた魔物たちは、急に動きだしたのだ。まるで、目的を持ったかのように奴らは動き出し、見過ごすことができなかった我は魔物たちを殺した。あの時に、おぬしにテレパシーを送っていたのだ』

「なるほどな」

むかつくなと心の中で吉夫は文句を呟きながら、ゆっくりと、全身に魔力を張り巡らせていく。全身に循環させていく魔力を、白狼が使用する魔法　雷と変換させていく。

ふと視線を感じると、白狼がこちらの様子をうかがっていた。気が付いた吉夫は、見逃されている、というよりもこちらの實力を測るためにわざと手を出していないのだ。

「……殺さない。ただ、叩き潰すだけでいい。それが、この試験の内容であるから……あいつに負けを認めさせればいいだけだ」

白狼を殺すことだけ考えていた吉夫は、頭を切り替えることにした。相手は自分よりも長く生き、戦闘経験も豊富であるからこそ、余裕を見せるのだ。吉夫は、彼と互角に戦えると考えていたが、それを否定し、勝てないという現実を認める。

「やるしかない」

全身を縛っていたはずの麻痺はいつの間になくなっており、吉夫は、槍に雷を纏わせる。これで、準備はできた。最後にすることは、試験を突破するのは　白狼を屈服させることのみ。

さあ、始めよう。

どちらかがそのように呟く。

吉夫は地面をとんとと軽く蹴ると、一瞬にして白狼まで距離を詰

めた。予想外のことに目を大きく見開かせる白狼であつたが、すぐに迫り来る吉夫の突きをよける。だが、いまの吉夫は冷静であつたため、続けて槍を振るっていく。

連続で振るわれる槍をかわす白狼は、雷を全身と武器にまとつた彼のことを高く評価していた。雷をまとわないで攻撃していれば、スローモーションのようにしか見えないがいまは違う。正確にこちらの頭、足、あご、眉間という場所を突いてくる攻めは、正直に言えばかわすだけで精一杯。

なぜなら、雷をまとつた槍は通常よりも速く、鋭く、なによりも重い。当たれば、精霊である白狼ですら無事ではすまない威力まで上がっている。

ジリ貧であることに舌打ちした吉夫は突く動作から、槍を横からなぎ払う。正面ばかりに気をとられていた白狼は、一瞬で消えた槍に驚いたものの、すぐにどこから来るのかわかつた。白狼は、槍に当たらないために右へ跳躍するが、腹に鋭い痛みが走る。

『くつ。人間が我に傷つけるとは勇者以来ではないか』

「やられっぱなしは嫌いなんだよ」

『我も同じである。おぬしには、もう少しだけ我的本気を見せてもよいだろう』

「やるなら、全力でかかってこいよ。こっちは、全力でてめえを潰すつもりだからな」

軽口を叩きながら、吉夫は立ち止まって動こうとしない白狼を貫くことにした。

いまの吉夫は、たとえ距離があつたとしても全身にまとっている雷のおかげで、一気に詰めることができる。だからこそ、彼は白狼を貫くためにとんと地面を蹴ると、瞬時に加速していく。

白狼まで障害物すらなかったので、一直線に向かつていく。あともう少し、というところまで白狼との距離を詰めたとき、静観していたジュリアスが声を荒げて叫んだ。

「横に飛べ、ヨシオ!!!」

彼女の声を聞いた直後に吉夫は横に飛ぶと、さつきまで彼がいたところに3本の尾が地面に刺さっていた。驚きを隠せない吉夫は、はあっ！？　とつい口にしてしまい、そんな彼に意思を持ったかのように3本の尾が襲い掛かる。

雷をまとった槍で払いのけようとするが、蛇のようにクルクルと柄に巻きつく尾。槍に込めた力を放出しようと、吉夫が考えた直後に尾から白い光がふわっと現れ、そこから雷が放たれた。当然、よけることのできない吉夫は全身に雷を食らってしまう。

彼の着ていた服は黒くこげてしまい、意識も手放そうとなるが、ぐっところえる。

まだ、ここで倒れるわけにはいかない。

ここで意識を手放してしまったら、せっかく本気を出してくれた白狼には失礼だ。もっとも、白狼の尾が3本になっていることが彼の本気であるのかさだかではない。

それに、試験を黙って見守ってくれているジュリアスの前で、格好悪いところ見せたくない。もしかしたら、ここにジュリアスがいなければ自分とはつくにあきらめていただろう、と思いながら顔を上げる。

眼前にいるのは、ゆらゆらと3本の尾を揺らす精霊の白狼。相手は、意外という顔をしていたが、すぐに余裕のある笑みを浮かべる。

「ジュリアス」

槍にたつぷりと雷を注ぎながら、吉夫は自分の背中を見守る少女の名前を呼ぶ。

「どうした、馬鹿者よ？」

「途中で手を出すなよ？」

「ふっ、なにを当たり前のこと聞いている？　私は、貴様が白狼の試験を突破するまで、ここで見守っておくから　負けるではないぞ、ヨシオ」

彼女の口から自分の名前を聞いた吉夫は、口元に笑みを浮かばせる。

「ああ、絶対に勝つとはいえないが……白狼を屈服させておいてやるよ。勝利の女神に、見守れるのも悪くはないよな」

「なっ、おかしいことを口にするのではない!!」

彼女のほうに振り返ることもなく、吉夫がからかうと、予想通りに声を荒げている。今頃、顔を真っ赤にしているかもしれない、と苦笑してしまう吉夫は白狼を見つめる。

相手は、自分たちが会話している間に何度でも攻撃できたのに、あえてそうしなかった。白狼は、余裕だからこそこっちを好きなようにしてくれたのだ。しかも、吉夫が槍にたつぷりと雷を注ぐ時間を与えたぐらい、勝つ自信がある。

腹立つなあと、心の中で不満を漏らす吉夫は、地面をとんと蹴った。同時に、白狼は1本の尾をゴムのように伸ばし、吉夫を貫こうとする。

正面から白狼に挑んでいる以上、よけることもできない、と予測していた吉夫は身をよじってかわす。そこで尾が彼の右腕をえぐるように通り過ぎ、全身が焼け付くような痛みにも耐えながらも前に進む。

1本の尾をかわされた、ということに白狼は残っている2本の尾、鋭い矛を向ける。今度は、彼を射抜くつもりで鋭い2本の矛が襲い掛かるが、彼は槍で防ごうとしない。また、かわす身振りさえ見せない。

することは、ただ1つ 突っ走ることのみ。

おたけびを上げながら、吉夫は迫り来る2本の矛を駆け抜ける。

彼を貫こうとしていた尾は、ぐいと進路を変え、腕と肩へ狙いを変える。だが、これが白狼の最大の間違いであった。

吉夫の腕と肩を貫こうとしていた2本の尾は、そこに近づく直前に、バチィと弾かれた。驚きを隠せない白狼は、眼前まで迫ってきた吉夫を前にして、始めて彼を敵として認めた。余裕の笑みを消し、獣のように獰猛な微笑みを浮かべる。

『我をここまで追い詰めるとは、やはりおぬしは勇者以上の実力者

である！！」

「実力じゃねえよ。おれは、負けたくない一心で戦っただけだ」

『ならば、我もおぬしに負けてはおられぬ。　　ウオオオ　　ン』

空気をビリビリと振るわせる白狼の咆哮に吉夫は、一瞬だけ動きを止めてしまう。それを見逃さなかった白狼は、3本の尾を横に振るい、彼をなぎ払う。防御すらできなかった吉夫は尾によって弾かれたものの、手に握られる槍だけは手放していない。

ほっと一安心していると、突然、雨のように光弾が彼に降り注ぐ。ほんの少しだけ気を抜いていたおかげで、光弾を何度かくらってしまったが、これがなんなのかはつきりとした。

白狼から生える3本の尾の先から、それぞれこちらに向かって光弾が次々と放たれていく。3本の尾だけをかわすだけで精一杯だったのに、今度は、雨のように襲い掛かる光弾。これをかわせ、と言われたらおそろく無理だろう。

できることがあるとすれば、それらを迎え撃つことのみ。現に、吉夫は降りかかる光弾を雷を込めた槍で打ち消すが、新たな弾が容赦なく襲い掛かる。

「くそッ、槍に込めた雷がどんどん減っていくじゃないか……！」

光弾を打ち消すたびに、槍に込めた雷が減少していくのを感じていく吉夫は悪態をついた。しかも、彼が白狼に接近しようとするだけでも、光弾が近づけさせないように放たれる。逆に、距離を取ろうとすれば、先にこちらの移動先を狙ってくるからこそ、白狼に対する手段をなくしていく。

焦せる吉夫は考えるだけで余計に集中力を乱してしまい、全身と槍にまとわせた雷が消えかけていく。

「ヨシオ！　貴様は白狼を屈服させるではなかったのか！？」

叱咤するかのようにジュリアスは、自分の背中に声をかけた。彼女の声を聞いた彼は、自分には勝利の女神がいるじゃないか、と言い聞かせると落ち着くことができた。

「もちろんだ。おれは、あの野郎を倒さないと気が済まないからな

……！」

再び、全身と槍に雷を込めていく吉夫は一気に終わらせることにした。

雨のように降り注ぐ光弾をかわすことができない吉夫は、白狼までの距離を見据える。白狼までは、ざっと10メートルぐらいの距離があるが、そこまでたどり着く前に光弾によって道をふさがれる。「はっ、道がないのなら作ればいいだけの話だ」

腰を低く構え、左足を前を出し、槍の先を白狼に向ける吉夫。

全身には、雷を纏わせているおかげである程度の光弾を受けても、殴られたぐらいの痛みしかない。先ほど白狼の尾を弾かせたのは、全身に纏わせた雷のおかげである。これがなければ、吉夫はとっくに白狼に負けていた。

「行くぜ、白狼」

地面をとんとと蹴った吉夫は、白狼との距離を詰めるためにひたすら前に進む。たどり着くまで、吉夫に光弾があらゆる場所から襲い掛かるが、雷を纏ったおかげでそれほど痛くはない。だが、白狼まで5メートルという距離まで縮めたときに、さっきよりも光弾を受ける痛みが強くなっていく。どうやら、全身に纏わせた雷が光弾によって、ほとんど打ち消されてしまっている。

このままでは、全身に纏わせている雷がなくなってしまう、白狼を屈服させることも、加護を得ることができない。

「負けたくない……！」

心の底からそう願った吉夫は、全身に纏わせている雷が光弾によって打ち消されても、前へ進む。肉体を守る雷がなくなったおかげで、鈍器に殴られるような衝撃を受けるが彼は倒れない。歯を食いしばりながら、嵐の中を突き進む吉夫の顔は鬼のような形相で、白狼を見据える。

あと3メートル。

容赦なく襲い掛かる光弾によって弾き飛ばされそうになる体を支えるため、左足を前に出す。ずんっと力強く大地を踏みしめた吉夫

は、右手にある槍の先を白狼に向けて　一直線上に放った。

雷を込められた槍は一瞬にしてトップスピードに乗り、白狼を貫かんばかりに襲い掛かる。それを前にしても、白狼は慌てることもなく体をひねって、難なく槍をかわしてしまふ。至近距離で回避した彼に吉夫はおめでとうと静かに呟き、さらに距離を詰めるために前へ1歩踏み出す。

あと1メートル。

目を大きく見開かせる白狼は光弾を放つのをやめ、3つの尾で彼を貫くこうとする。ゴムのようになやかに伸びる尾が迫り来ることなど目もくれずに、吉夫はニツと不敵に笑う。なぜなら　吉夫は残り少ない魔力をフル活用するために、足に雷を纏わせる。

とんと地面を蹴った吉夫は一気に白狼の懷まで潜り込みと同時に、彼がいた場所に3つの尾が突き刺さる。ここまで接近した吉夫は、白狼の白銀の体毛を汚す一箇所　赤く染まつた場所を見据える。そこは、彼が槍で白狼の腹をかすめた小さな傷跡だが、この状況を覆すことが可能となる。

拳を力強く握った吉夫は、絶対に外さないと口にする、全力で白狼の小さな傷跡を殴った。くの字となり、宙に浮かぶ白狼に追撃をかけるように吉夫は、いま持てるすべての力を振るう。雷さえ纏うことなく、肉体のみで白狼の胴体、首、足を狙い、ひたすら拳を振るい続ける吉夫。

怒涛の反撃をくらっている白狼は、尾で彼を貫こうとするが、ギリギリのところでかわされてしまふ。尾はたしかに吉夫を狙っているのにも関わらず、軌道上からそれるように届かない。鮮血と白銀の毛が舞うなか、吉夫は白狼を倒すために最後の一撃を放つことにした。

全身に残っているすずめの涙ほどの少ない魔力を、すべて右腕に凝縮させる。すると、右腕からバチツと弾けるような音が響き、雷が彼の腕に纏われる。

「うおおおおお！！」

おたけびを上げながら、吉夫は雷を纏った右腕を白狼に向けて振り下ろす。

これが最後の一撃であると白狼は感じながら、尾に雷を纏わせて振り下ろす。

拳と尾。

雷と雷。

両者の最大の一撃がぶつかり合い、雷鳴が落ちる音が森全体に響き渡る。それでもなお、尾と拳を交えている吉夫と白狼は、1歩も譲ることもなく、ひたすら相手を倒すために死力を尽くす。

「おれには……あいつがいる」

勝利の女神が、ジュリアスがおれを見守っているから、絶対に負けるわけにはいかない。

心の中で呟いた吉夫は、白狼の尾に押し切られそうになるところをこらえ、逆に押し返す。ぐっとわずかに動いただけであったが、それだけでいまの吉夫には充分であった。ふっと力を抜いた吉夫は、押し潰そうとする尾の圧力を感じながら、体を横に動かす。

すると、白狼の尾は彼の頬をかすめ、地面に突き刺さる。

3本あったはずの白狼の尾は、1本しかなかったことに安心しながら、無防備となった相手の懐に潜り込む。

そして 雷を纏った右腕を白狼の赤く染まった腹に叩きつける。回避することができなかった白狼は、彼の最高の一撃をくらい、そのまま近くの本まで飛ばされる。白狼が立ち上がらないのか、と横たわる精霊を警戒していると、相手はぴくりとも動かない。

勝った。ようやく、白狼を倒すことができたけれど、いまいっさい実感が無い。

それを認める気にはなれない吉夫はありえないかもな、と思いつながらジュリアスのほうに振り返る。

「ヨシオ。貴様は、精霊の白狼を倒したのだ。すなおによるこぶが いい」

現実を肯定してくれる彼女の言葉を聞いた吉夫は、静かにガッツ

ポーズをした。

これで 吉夫は白狼の出した試験を突破し、彼の加護を得る権利を得た。

命拾い

「はあ……疲れた」

ぼろぼろになったメイド服を身にもとう吉夫は、地面に大の字となつて空を見上げていた。雲ひとつもない、青く晴れた空の下で、吉夫はいまだに白狼に勝てたのか？ と悩んでいた。彼は、戦いの最中に白狼が余裕でこちらの攻撃をかわし、攻めていたことを思い出せる。

だが、途中から白狼は余裕ではなく、本気でこちらを潰そうとしていた。いつからそうなったのか。もし、間違いでなければ、白狼が3つの尾を出した頃あたりだろう。いや、あれは本気ではなく、こちらに合わせたお遊びだったではないか、と思ってしまう。

「ヨシオよ。少なくとも、貴様は白狼を本気にさせたのだ。そのことを誇りに思えばいいのではないのか？」

彼の隣に腰掛けるジュリアスは行儀が悪いぞ、と注意するが、吉夫は聞こえない振りをする。彼が、白狼との戦いで疲労していることにジュリアスは感じていたので、これ以上なにも言わない。

「そうだな。だって、おれは精霊の白狼を倒してしまった上に、こいつの加護を得ることができる。中途半端ではなく、正式な加護を……な」

吉夫は、木の下で死んだように眠る白狼に目を向ける。白狼は、吉夫の最高の一撃をくらつてから、気絶した状態ですつと木の下で横たわっている。彼がいつ起きるのか知りたくもない吉夫は、女性化が解けるのだろうか、と呑気に思考していると、ぐうつと腹が鳴る。

「くくつ、ヨシオよ。貴様の腹の虫が鳴っているではないか」

「うるせえ。どこかの誰かさんが、おれに朝食を食べる時間もなくずに訓練してくれ、と頼んだらどう？」

「わ、私のせいではない！ 貴様が事前に食べれば、そのような

ことなど」

きゅると、かわいらしい音がジュリアスの腹から鳴るのを聞いてしまった吉夫。彼女も、自分と同じように朝食を食べることなく、先に訓練を終えてから食べる予定だったかもしれない。

頬を完熟トマトのように赤くしたジュリアスは無言で吉夫のほうを睨むが、彼はあえて聞こえなかった振りをしておく。それが、いまの彼女にとっていい解決法かもしれない。

「……」

「……」

なんともいえない空気が2人を包み、彼らはチラと相手のほうを盗み見る。交差する視線。顔が熱くなってしまう、両者共にそっぽを向く。

「なあ、ジュリアス」

「ど、どうしたヨシオよ？」

「おれさ、どうしておまえに心を開いてしまったのか、わからないな」

「……」

ジュリアスは無言で吉夫のほうに振り向くが、彼はさっきと同じように空を見上げている。

彼女は、彼がなにを言っていたのか理解している。昨日、恵美とサティエリナと一緒にガールズトークをしているときに、吉夫のことが話題となった。

発端は、もちろん恵美。彼女は吉夫がどうして人嫌いになったのか、とジュリアスとサティエリナに教えてくれたのだ。彼の過去を聞いたジュリアスは、もっと自分を頼って欲しいと思ってしまった。他人に頼ることもなく、自分の力だけでなんとかしようとする姿は、見ているこっちが苦しい。

白狼と戦っているときの吉夫を見ているときは、自分の心臓が押しつぶれそうになったぐらいだ。彼が、白狼と戦闘中にも関わらず自分に声をかけてくれたときはうれしかった。しかも、自分のこと

を勝利の女神と呼んでくれた彼に、少しだけ信じてもらえたことに安心していったのだ。

これは吉夫には秘密であるが、彼が手を出すなよ？　と言われたのに関わらず、言いつけを破ってしまった。いつなのか？　と問われたら、ジュリアスは迷うことなく答えるだろう。

吉夫が白狼に怒涛の反撃をしている最中に、尾が吉夫を貫こうとしていた時。軌道上からそれるように、尾が彼を貫かなかったのは、ジュリアスが吉夫に防御魔法を支援していたおかげ。こっそりと、吉夫に気が付かれないように光の魔法を唱え、彼の防御力を一時的に上げていた。支援魔法が苦手なはずのジュリアスが、彼の助けとなったのはいいことかもしれない。だが、これを吉夫が知ったら怒られるかもしれない、と想像してしまった彼女は覚悟を決める。

いまのうちに謝ろう、とジュリアスが決断し、口を開こうとしたときに吉夫が急に立ち上がる。ジュリアスが回収しておいた槍を構えた彼は、真剣な表情で、周囲を警戒をしていた。彼に倣うようにジュリアスも立ち上がり、腰に差してある剣をいつでも抜けるように手を柄に伸ばす。

吉夫は、白狼との戦闘で疲弊しているから、彼のためになるべく負担をかけないようにしないといけない。

「拙者の気配に気付くとは……人は侮れぬ。^{あな}さすがは、白狼を倒した者の目だ」

森から姿を現したのは、頭にクワガタのように鋭い牙を頭から生やし、腰には2本の剣をぶら下げている男性。線が細い顔つきをしている彼の頭の上にある角さえなければ、立派な人である。しかも、女性から言い寄られそうな顔だ。

「てめえが、白狼がいつていた魔族か」

「肯定。拙者こそ、このフィオナの森に住み着く魔族の1人ガルバである」

魔族　ガルバは吉夫の疑問に答えると、腰にぶら下げている剣に手を伸ばす。

「おぬし、そこに倒れている白狼を倒した者か？」

「ああ、だったらなんだよ？」

「これを受け取るがいい。それを水と一緒に飲めば一夜で疲れが吹き飛ばぞ」

剣の柄を掴むかと思っていたが、彼は腰にぶら下がっている小さな袋をつかむ。それを吉夫たちのほうになにも告げることもなく投げるガルバ。

小さな袋は、吉夫の足元に落ちるが彼はそれを足で払いのける。むつと顔をしかめるガルバに、吉夫は気にすることなく、彼を貫くために動こうとする。

だが、

「ぐッ……！」

1歩だけ前に足を踏み出しただけで、四肢が引き裂かれそうになる痛みが全身を襲う。崩れ落ちる体を支えるために、槍を杖のかわりとして倒れることを阻止する。

「ヨシオ!？」

眼前の敵のことさえ忘れて、ジュリアスは彼を支えようとするが、吉夫はきつと彼女を睨みつける。たじろぐジュリアスに、彼は敵から目をそらすな、と伝えるとガルバを見据える。

「おぬしの右腕……ひどいことになっているではないか」

ガルバの指摘通りに、吉夫の右腕は肉がえぐられており、そこからはぽたぽたと血があふれていた。白狼の尾で右腕をかすめた程度だと、ジュリアスは思っていたが、どうやらそれ以上であった。どうして、彼と会話しているときにそのようなことを気が付かなかったのだろう、とジュリアスは後悔してしまう。でも、いまは吉夫に言われたようにガルバが目をもそらしてはいけない。

「その女性よ。その者の傷を癒したいのであれば、彼女が蹴った袋を取ればよい」

「……私は、貴様の言葉を信じることなどできない。我が祖国、ユグドラシルを攻めた魔族を信用しろ、というのか？」

「ユグドラシルを攻めたのは我が兄上である。許せとは言わん。しかし、拙者は強者と戦うことを望む。故に、拙者が先ほど渡したのは少女の傷を癒すことができる。それを水に溶かして飲めば、あつという間に傷がふさがるぞ」

「なぜ、敵である私たちにそのようなことをするのだ!？」

怒りをあらわにしたジュリアスに、ガルバは動じることもなく平然と答える。

「言っただろう？ 拙者は、強者と戦うことを望む、と」

「ふざけるな！ そのためだけに、私たちの国を攻めるといふのか!？」

「何度も言わせるではない。拙者ではなく、我が兄上はユグドラシルの王との戦いを望んでいるだけである。我が兄上も、拙者と同じように強者と戦うことを望んでいるのだ」

「ぐだぐだうるせえよ、てめえら」

2人の会話に割り込むように、槍でガルバを貫こうとする吉夫。ジュリアスは、ガルバが投げた物を確認してみると、小さな袋は噛み千切られており、中身から白い粉がこぼれていた。よく見ると、吉夫の口の周りは白い粉がついているが、彼はそのようなことも気にすることもなく槍を振るう。

さっきまで、動くことさえできなかった吉夫が槍を振るうことにジュリアスは疑問を抱く。しかし、いまはそんなことよりも、彼の手伝いをしないといけない。

腰に差してある剣を抜いたジュリアスは、吉夫の攻めを軽々とかわすガルバに斬りかかろうとする。だが、吉夫はそんな彼女に対して、

「おまえはおれの邪魔をするな」

と吐き捨てた。

「邪魔だと？ そんな体でなにができると言うのだ!？」

ガルバは腰に差している2本の剣を抜くこともなく、ジュリアスが振り下ろした剣をかわす。また、吉夫が槍でなぎ払おうとしても、ガルバはよけてしまい、連続で突いてもかわしてしまう。

「言ってやるよ。おまえと一緒に戦うよりも、一人でこいつの相手をしたほうがまだ動きやすい。いちいち、おまえに気を使っているかよ」

剣を振るはずだったジュリアスは、彼の言葉でぴたりと動きを止めてしまう。吉夫は、本当のことを言えば、彼女がガルバに傷付けられることが嫌だから、あえて、突き放すようなことを言ったのだ。ジュリアスには、心の傷を傷付けてしまうことを承知で、彼は口にしてしまった。

そんな彼女を吉夫は見向きもすることもなく、槍をひたすら振るい続け、ガルバに当てようとする。

魔力さえあれば 雷を纏うことができるのに、と心のどこかで魔法に頼る自分に吉夫は思考を切り替える。魔法は、アースに来てからほんの少ししか触れていないから、あまり頼ることはできない。信頼するのは、これまで自分の身を守ってきた拳と槍のみ。

しかし、どれだけ槍で攻めてもガルバは腰に差してある2本の剣を抜くことはなかった。彼は、自分の動きを目で追い、どこに攻めるのかと予測しながら槍をかわしている。ジュリアスは、吉夫の言葉によって剣を振るう気にもなれず、虚ろな瞳で彼らの戦闘を見つめていた。

「ぬう……時間切れか」

「なに？ ぐつ、ああ……！」

ガルバの呟きに反応した吉夫は、どういふことなのか問いかけようとしたら 全身が焼けるように熱く燃え上がる。四肢を引き裂かれるような痛みが全神経に伝わり、立つことさえできなくなる。槍で体を支えようとするが、手に力がまったく入らない。

地面に吸い込まれるように吉夫は倒れてしまい、それを目撃したジュリアスは彼に駆け寄る。ジュリアスは、彼の体に触れてみると

マグマのように熱く煮えたぎる体温で、火傷しかねない温度であった。

「貴様、ヨシオになにをした!？」

剣を正眼に構えたジュリアスは、眼前に立つガルバに腹を立てていた。彼は、吉夫の傷を癒すことができると言って、あの白い粉を渡したのだ。吉夫は、自分たちが会話している間に白い粉を飲み込んだ。もしくは、なめたとやったほうが正しいのか。

「拙者はなにもしてはいない。その少女が、薬を正しく使用しないおかげで副作用が起きたのだ。本来ならば、水に溶かして飲むのが常識であるが、粉のまま飲んでしまえば 体温が急上昇する。そう、いまの彼のように」

「では、なぜヨシオは普通に動くことがきたのだ!？」

「彼女の根性がそのようなことを可能とさせたのだ。すごいではないか」

「そんなことよりも、どうやったら馬鹿者を救うことができるのだ!？」

「簡単なことを伝授しよう。あなたが、薬を口移しで与えるだけでいいのだ」

かああと顔が赤く染まるのを感じるジュリアスは、ガルバを睨むが、いたって彼の表情はまじめである。ガルバは、それを肯定と受けとったのか、どこからか取り出した筒を彼女に渡す。

口移しを見ないためか、ガルバは背を向けていた。

どうやら、自分たちの行為を目にするだけでも恥ずかしいのだろう。

ジュリアスは、これは馬鹿者を救うためである、と何度も繰り返しながら、粉を口にふくむ。ガルバからもらった筒を開けて、水を口にためると、荒く息をつく吉夫の顔をゆっくりと近づく。幸い、いまの吉夫は荒く息をするだけで、目を開けよることもない。覚悟したジュリアスは彼の唇に己のそれを重ね、口にある水と粉を彼に流していく。嚥下するまで吐き出さないように口を塞いでいると、

吉夫はジュリアスから送られた水と薬を飲み込む。

彼の傷口は逆再生するように跡一つ残さずに全ての傷が塞がっていき、苦痛に満ちていた表情は穏やかとなる。自分の腕の中で、吉夫の体温を感じることができるジュリアスはほっと一安心し、自分たちに背を向けるガルバに感謝を述べる。

「ありがとう。貴殿のおかげで、ヨシオの命が救われた」

「否定。拙者は、白狼を倒した少女と剣を交えたためだけに、彼女を助けることにしたのだ」

「それでも……礼を言わせてくれ。貴殿を信用しなかった私を許してくれ」

「否定。拙者の兄上がしたことは事実であるため、信用する必要などなかった。しかし……拙者を信用するのならば、その少女に伝えて欲しいことがある。よいか？」

「もちろんだ。貴殿は、ヨシオの命の恩人である」

「ならば、伝えるがいい。今度は、拙者は容赦することもなく牙を向ける、と。それと、白狼の加護を使えこなせるように、と」

背を向けたままガルバは、彼らのほうに振り返ることもなく静かに歩きだす。

彼の後ろ姿を見送ることになったジュリアスは、監視されていたか、と苦虫を噛み潰したような顔をする。吉夫が白狼と戦っていたときに感じていた視線が、まさか彼のものと想像すらしていなかった。

穏やかな呼吸を繰り返す吉夫を腕に抱えるジュリアスは、さつき、自分がしたことを鮮明に思い出す。彼の命を救うために、仕方なく彼に薬を口移しをやって唇が重ね、水に溶かした粉末を流した。冷静に考えれば、これがジュリアスにとってファーストキスであった。

しかも、異性ではなく同性ということ。

ここで、同性だからファーストキスは無効化されると、案が浮かぶ。しかし、吉夫は本当は男であり、いまは白狼の中途半端な加護

のおかげで女性化している。外見は女性、中身は男性。これは、無効化されるどころか、有効になってしまう。

しかも、吉夫は自分がキスしたことなど知らないから　これは、無効化にしておいても問題ないはず。知らなければ、いいのだ。白狼戦のときに彼女がこっそりと彼をサポートしたことも含めて、なにもいわない方が得策である。

「う……あつ、じゅ、ジュリアスか……？」

うめきながらもまぶたを開いた吉夫に、ジュリアスは内心では驚きながらも彼に異常はないのか、と確認しておく。

「なんか……痛みとか、勝手に治っているから……逆に調子がいいのか……？」

えぐらていた右腕は、いつの間に完治していた。それだけではなく、白狼と戦っているときに怪我した場所まで、すっかり治っていたのだ。これが、ガルバのくれた薬の効果か、と改めて吉夫の命を救ってくれた魔族に感謝してしまう。

「それに……」

「ん？　どうしたのだ、ヨシオよ？」

「唇が湿っているし、ジュリアスみたいないいにおいがするのは、どうしてだろうか？　あと、どうしておれはおまえの腕に抱えられているのだ？　謎だらけなんだよな」

かああと顔が赤くなるのを感じるジュリアスは、あえて真実を口にしないでおく。それが、彼女にとって一番安全なことであり、吉夫にとつても同じことである。だから、ここは真実をはぐらかせておくことに。

「白狼がな、貴様の口をぺろぺろと舐めたのだ」

「いや、白狼は相変わらず木の下で気絶しているぞ？」

「実は、ゴブリンが己の分身を貴様にこすり　」

「下ネタ禁止。いや、それが起きているのならば、おれはここにはいないはずだが？」

「むう……」

「まあ、いいか。おまえが言いたくないのなら、無理しなくてもいいぞ。」

……それと、悪かったな、ジュリアス。おまえを傷つけるような言葉を吐いて」

腕に抱えられている吉夫　俗にいう膝枕を彼女にされている彼は、そっぽを向きながら謝罪する。そんな彼がふと愛しくなつてしまい、吉夫の流れるような銀髪をなでながら、

「貴様が、過去にどのようなことがあったのか、メグミに聞いた。だから、人を信じることができないことぐらい承知しているぞ、ヨシオよ」

彼はそうか、と小さく呟き、彼女の膝枕を堪能するために目を閉じようとしたら

ぎゅるるるる。

ぐるるるるる。

とジュリアスと吉夫の腹から空腹というサインが鳴り響き、彼らは苦笑してしまう。

「とりあえず……白狼の加護を受けてからテントに戻るか」

「そうだな。ヨシオも、一刻も早く元の姿に戻りたいと思うだろう？」

「いや、女性の生活もなかなかいいなと思いついてしまったぐらい、とてもよかったぞ？」

「ちなみに……貴様は、メグミによって風呂まで強制連行され、虹のアーチならぬ血のアーチを作ったというではないか。それは、真実であるか？」

「……ああ」

「仕方あるまい。あのメグミは、どうやら百合らしいため、気を付けないとあつという間に押し倒されるぞ？」

「どうやら、ではなく真正銘の百合なんだよ」

という会話をしながら、吉夫とジュリアスは気絶している白狼を無理矢理起こし、彼から加護を授かった。中途半端な加護から、正

式な加護になったことで吉夫の女性化は解け、本来あるべき姿
漆黒の髪と瞳、女らしい顔つきに戻る。

胸が重苦しいと感じていた巨乳も消えたので、体が前よりも軽く
感じるができる。あれが、あるだけで体重が増加してしまうこ
とに納得してしまう吉夫は、ジュリアスに、

「胸が大きいと苦勞するよな？」

「なっ、なにをおかしなことを言っているのだ!？」

「こっちはまじめに訊いているから、答えてくれよ」

「う、うむ、やはり肩がこっってしまうから……肩こりがひどいぞ」

「だったら、朝食を食べたあとにマッサージしてやるよ」

「そうか。では、私の肩をたっぷりとほぐすがいい、ヨシオよ」

肩をもむ約束を交わしあい、2人はガルバと白狼のことについて
語りながら駐屯場まで戻る。

テントまで戻ったとき、恵美が吉夫が元の姿に戻っていることに
対して、

「ええええ!?! どうして、吉夫くんは女性化しなくてもメイド服
が似合うの!?!」

と、ほざいていたので彼女の頬をつねておく吉夫であった。

苦勞する弟

白狼を倒した少女と彼女を見守っていた女性と別れたガルバは、二ヶ月前から住処としていたフィオナの森の奥に戻っていた。ここには、生活するだけの必要最低限の物が部屋にある。それだけしかないが、住み心地はよい。この森の主である精霊白狼に手出しされない日々を送り続けるガルバは、今日で、ようやくこの生活が終わることを感じていた。

「まったく……兄上、焦り過ぎですぞ」

テーブルの上には、殴り書きでユグドラシルの王と決着をつける、という紙が置かれていた。それを読んだ彼は、魔物を同行させない兄の姿を想像してしまい、ため息をつく。

二ヶ月前、兄であるグルトスは大量の魔物を引き連れてユグドラシルを攻めた。当時のユグドラシルはパニックに陥りながらも、国を守ろうとする騎士たちの執念と、王のギースが前線いたおかげでなんとか持ちこたえることができた。

その日、グルトスとギースは戦場で出会い、なにも語ることもなく己の拳をぶつけ合った、と兄はうれしそうに教えた。己の拳をギースとぶつけ合ったグルトスは、ユグドラシルを滅ぼすのは惜しいと考え、撤退したという。本当の理由は、グルトスが後でもう一度だけギースと拳で語り合いたい、という自分の欲望を叶えるため。

昨夜、リーンと呼ばれる少女からユグドラシルを終わらせなさい、という命令を受けたせい、グルトスはすなおに実行に移した。己の欲望と仕えるべき主　魔王のためにグルトスはギースと戦う。

「仕方ない……。拙者は影で兄上をフォローでもするか」

二ヶ月も住み慣れた家を捨てるのは惜しいが、いまは兄であるグルトスを優先しなければならぬ。腰に差してある二振りの剣の内、一本を鞘から抜いたガルバは手にしているそれを見つめる。真紅に

輝く美しい剣は、見ているだけで引き込まれそんな魅力があるが、生憎、それはただの剣ではない。

「燃やし尽くせ」

ガルバが命じると剣に炎が現れ、それを振るうとあっという間に部屋全体に広がっていく。形ある物は炎に触れると灰と化し、部屋というおもかげがなくなってきたところで剣を鞘に収める。代わりに、腰に差してあるもう一本の剣を抜いた彼は、先程とは異なる蒼く輝く美しいそれを振るう。

「凍り尽くせ」

吹雪の如く強風が部屋を蹂躪し、すべてを燃やし尽くす炎を鎮火させてしまう。

ふうと息をついたガルバは、剣を鞘に収めると、改めて魔王がくれた魔導具の強さに驚かされた。この二振りの剣は、主である魔王からもらった大切な武器であり、それを今日まで振るうことなどなかった。否、振るうことなどいくらでもあったが、能力を使用するのは今回で始めてであった。

だが、こうして使用してみるとあまりの強さに、自分でも嫌悪感を感じてしまう。強者と戦うことができればじゅうぶんであるが、その者をこの剣の能力で切り伏せることはできない。

白狼を倒した少女と彼女を見守っていた少女に、剣を抜かなかったのは、これが理由であった。けれども、いつかは彼女が 白狼の加護を得た少女と戦えることを想像するだけで、ぞくぞくと体が震える。武者振るいではない。あの少女が強くなった暁には、自分が彼女と戦うことができることがうれしくて、たまらないのだ。

「さて……兄上がユグドラシルの王と戦っている間に、拙者は魔物を集め、ユグドラシルに攻め入るか」

フィオナの森に巣食う魔物を集めるために、ガルバはかつて自分たちが住んでいた部屋をあとにした。

ジュリアスの魔法講座

白狼との試練、さらにその場に現れた魔族のガルバとの戦闘を終えた吉夫は、自分たちのテントに戻るとすぐにベットインしてしまう。ベットのの上になると、すぐに寝息を立ててしまい、あつという間に夢の世界に突入してしまう吉夫。彼は、起きたらマツサージすると約束してくれたので、ジュリアスはちょっとした楽しみとなっている。

そんな彼を休めせるために、ジュリアスは居間で明たちになにが起きたのか教えてあげた。白狼の試験を突破し、加護を得た吉夫。魔族のガルバは、再び彼との再戦を望むということ。もう1人の魔族は、ユグドラシルの王であるギースと戦うことしか興味がないということ。

「へえ……吉夫って、すごいじゃないか」

ジュリアスが話し終えると、明は感想をぼつりとこぼした。

「すごい、という問題ではないと思うぞ、アキラ」

「わかってるよ。でもさ、ぼろぼろの体で戦うなんて……ジュリアスさんは、あいつに気に入られたかもしれないな」

「馬鹿者がこの私を気に入った……？ さすがにそれはないだろう、アキラよ」

「いや、吉夫は気に入った人を守るためなら、自分の命さえ投げ出すバカなんだからさ。まあ、僕も人のこととか言っではいられないけど」

チラとサティエリナのほうを盗み見る明に、ジュリアスはほうと感心するように彼が、どのように動くのか見守る。

はあとため息をついた明は、席から立ち上がると、サティエリナは気になったのか彼に声をかける。

「アキラさん？ どこに行いくんですか？」

「ちよっと剣を素振りしてくるよ」

「それなら、わたしもあなたと一緒に剣を振ります」

「ありがとう。どこに行けばいいかな、サティエリナさん？」

「とりあえず……テントの外に行きましょうか。あと、魔法についても教えますからね」

「わかった」

サティエリナと明がテントから出て行くのを、なにも言わないで見送る恵美とジュリアス。二人は、意外と空気の読める人たちだったので、いまは彼らの甘い時間を満喫させてもいいかもしれない。

だが、実際はそのようなことなどないとジュリアスは承知している。サティエリナの指導は厳しく、どこが悪かったのか指摘しながら実戦をするので、明に同情してしまう。これから、起きると思われる地獄のような訓練を。

何度も、彼女と訓練をしているジュリアスはアキラが無事であるように、と心の中で祈る。明たちが席を外してから、10分後。明の情けない悲鳴を聞いてしまったのは、言うまでもない。

テントの外でなにが起きているのか、知りたくもない恵美とジュリアスは、魔法について語り合っていた。

「ところで、ジュリアスさんはどうやって魔法を使用しているの？ 吉夫さんと明くんの訓練を昨日見たけど……あれってどうやっているの？」

「うむ……。あの2人はいい例えとまらないから、あえて言わないでおこう」

「ダメだよ。しっかりと、なにがどのようにになっているのか教えてよ」

「わかった」

馬鹿者の場合、白狼の中途半端な加護を受けてしまったせいで魔法を扱えるようになってしまった。これは、彼だけではなく、アキラも同じである。アキラは、勇者という体質のせい、実戦する度に魔法を唱えるようになっていくのだ。

本来ならば、魔法は時間をかけて習得する技術。そのため、魔法

を扱う者は常に鍛錬を怠ることもなく、日々技術向上のために努力しているのだ。

いまからでも、メグミが魔法を使用したいと思うのであれば……私が教えてやってもいいが？」

ジュリアスの提案に、恵美は迷うことなく肯定した。

恵美は、自分よりも強くなっていく2人の少年の足手まといにならないために、一刻も早く魔法を習得しなければならない、とジュリアスに答えた。

ジュリアスが恵美に魔法とはどういうことなのか、と説明するために彼女たちはテントの外に出た。先程、ジュリアスは彼女に対して明と吉夫が感覚的に使用している、と教えたので、違うことを学ばせる。吉夫は中途半端な加護、明は勇者という体質のおかげで魔法を扱うことができる。

本来ならば魔法とは、時間をかけて習得する技術。

そのため、魔法を扱うことができる者は常に鍛錬を怠ることもなく、日々技術向上のために努力しているのだ。

ユグドラシルの魔法姫、と呼ばれているサティエリナが二つ名を得たのは、毎日努力してきた結果である。

「まずはメグミがどのような属性があるのか、チェックさせてもらう」

テントから出る前に持ち出した白いボールを恵美に渡すジュリアス。頭の上で、疑問符を浮かべる彼女に苦笑しながら、ジュリアスは語りだす。

この白いボールは、握った人の適正魔法を示すために作られた魔

導具。

赤く輝けば火、

青く輝けば水、

緑色に輝けば風、

黄色く輝けば土。

色が変化することがなかったら、適正魔法がない。つまり、魔法を使うにはふさわしくないということである。

基本的にアースに生活する人々は、この四つの属性　四大元素のいずれか内、一つを扱うことができる。だが、それはあくまで才能や素質がある人たちのみで、魔法を扱うことができない人も多い。そのような人たちには魔導具と呼ばれる武器を使用していることが多い。

魔導具とは、武器に魔法の力を込めている特殊な物であり、魔力がない者でも扱うことができる。また、魔法が使える者でも魔導具を使用することができるので、魔力があるないと関係なく扱うことが可能である。

この四大元素の他にも、光、闇、雷という属性もあるが、これはごく一部の人たちしか扱えない。

白く輝くのであれば、神父やシスター、治癒士、^{ヒーラー}聖騎士。

黒く輝くのであれば、死霊使い（ネクロマンサー）、半魔人、黒魔術師、黒騎士。

淡く輝くのであれば、雷を操る者。

聖騎士というのはジュリアスであるということに、サティエリナ以外知っている人物はいない。

「……とあるぞ」

ある程度語ったジュリアスは、すっきりとした表情で恵美のほうを向くと、彼女は頭を抱えていた。いぶかしげに彼女を観察していると、ジュリアスさんには連いていけないよお……吉夫くんがいれば、まだよかった、と呟いていた。

彼女を無視しておき、ジュリアスは吉夫の魔法について思考した

す。

彼は、白狼からの加護をもらったおかげで雷の魔法を扱えるようになった。本来、雷という魔法は、人が制御することができないやつかいな物である。だが、今回の吉夫のように、加護を与えられる試験を突破したのであれば、雷を自由自在に扱うことができる。

加えて、たとえ扱うことができたとしても自滅という末路を辿ることになっている。

そのようなことが言えるのは、雷という属性が他よりも珍しいからだ。それだけではない。雷は他の属性よりも扱いづらいという難点があるかわりに、それを克服さえできれば吉夫のように自由自在に扱うことができる。

だが、いくら自由自在に操ることができたとしても、いつかはその巨大な力に酔いしれる日が訪れる。雷だけに限ったことではなく、他の属性を扱う人たちも力に酔いしれることだってあるが、それはごく僅かな人々だけである。

雷というのは、他の魔法と比べて強力なので一度力に酔いしれた場合、使用者の魔力、または生命力が尽きるまで暴走する。

また、力に酔いしれるだけで暴走状態に陥ることはない。

もしも、雷使いの眼前に愛しい人が目の前で殺された場合、その者の感情が怒りによって爆発。怒りに支配された状態で雷を使用したら、彼の目に映るすべてを破壊しつくすことになる。これも一種の暴走状態であると言われているため、力に酔いしれるか、もしくは感情に支配されたときのみに起こるといわれているのだ。

そのようなことが言えるのはこれまで雷の魔法を使用した人々の末路を本で読み、実際に目にしたことがあるからだ。暴走状態に陥った者は、巨大な力を振るい、敵味方構うこともなく魔法を発動させる。そうなってしまうたら、暴走状態になった者を殺すか、もしくは力尽きるまで放っておくかの二択しかない。

もしも、ヨシオが暴走することになったら 最悪のケースを思考しようとしたジュリアスは、頭を横に振るう。彼は、まだ白狼か

ら加護をもらったばかりだから、そのようなことになるのは、まだ早い。

しかし、考えれば、考えるほど、ジュリアスは彼と戦う自分の姿を頭の中に思い浮かべてしまう。そのことを忘れるために、彼女は頭を抱える恵美に声をかける。

「では、メグミ。あなたの適正魔法とは、どのような属性であるのかチェックするぞ」

ジュリアスの魔法講座（後書き）

ここでもうやく世界観について書くことができました。

え？ 遅くないか？

はい、遅いですね。最近になって、どのように小説を書くのか理解しててきましたので、これからが楽しみとなっております。

これまで、一体なにをしていたのか？

と問われたら……試行錯誤を何度も繰り返してきました。明日も更新しますので、時間がある方は読んでください。

襲来

「はあああ！」

「もつと早く剣を振って。 ダメ。それでは、次の攻撃に繋ぐことなんてできない」

テントの外では、明とサティエリナが木刀を交えて訓練を行っていた。

最初は、サティエリナが明がどれだけの技量があるのか知るために、彼らは手合わせをすることに。女性を傷つけることはできない、とサティエリナにとって聞きたくない言葉を吐いた明に、彼女は彼を叩き潰した。

女性である、たったそれだけの理由で剣を振るえない明をたたきのめしたサティエリナは、それから鬼のように指導する。彼女に惨敗してしまった明はこの時のみ、彼女を女性ではなく一人のライバルとして、またはコーチとして見ていた。

おかげで、女性を傷つけることを気にしていた明はそれ以来、迷うことなく木刀を振っている。彼女を守る力が欲しい明はひたすらサティエリナと剣を交え、剣術を覚えようとがんばっている。

鬼のようにサティエリナは明がダメなところを指摘し、そこを修正させるために木刀を振るう。さっきまで攻防一戦だったのに、木刀を振るう度に明はどんどんキレがよくなっていく。自分が指摘したところをしっかりと修正する明に、サティエリナはちよつとだけいじわるがしたくなった。

「氷よ、我が剣を包め アイスブレード」

サティエリナの木刀が冷気を纏い、上段で振り下ろす明の得物を斬るためにわざと受け止めることに。勢いよく振り下ろさせる明の木刀は、サティエリナの冷気を纏う木刀と交えようと ガキンツという音が響いた。

「まったく、魔法を使用するのなら事前に言ってもいいよね。サテ

「イエリナさん」

風を木刀に纏わせた明は、彼女の行動に呆れていた。

剣術のみではなく魔法も教えると告げられていたので、明はもしかして、と予想しながら木刀を振るっていた。サティエリナが木刀に氷を纏う瞬間を目撃したとき、彼の予想は的中し、自分も同じことをしただけの話。

風と氷をそれぞれ纏った木刀を振るう二人は一度距離を取り、サティエリナははあとため息をついた。普段から無表情を貫く彼女にとっては珍しい表情。明はあんな顔もできるのか、と脳内フォルダにあるサティエリナ表情集にしっかりと刻む。

「アキラさんって、戦いの中で成長するタイプの人ですか？」

「……それ、ジュリアスさんにも言われたよ。彼女は、アキラには才能があつていいではないか、と不満を漏らしていたよ」

すつかり、他人行儀から親しい友人のように砕けた口調で話す明。どうやら、剣を交える度に彼女のことを‘姫’ではなく、一人の‘女性’として見ていた。これは、サティエリナが例外ではなく、ジュリアスにも同じようなことになっていることぐらい彼は自覚している。

「あなたは、勇者としての才能があつてうらやましいですね」

「勇者うんぬんよりも、吉夫が、明になにをやらしても三日以内でマスターしやがる、器用な男だ。とかいつも言っていたよ」

「いえ、それは正しいと思いますよ？ アイスエッジ」

氷を纏う木刀を振り下ろすサティエリナから、明に向けて青い一閃が放たれる。

「そうかな？ ウインドブレイク」

同じように、風を纏う木刀を振り下ろす明から、サティエリナに向けて緑色の一閃が放たれる。

バンッ、と二つの魔法がぶつかり合うと弾けるような音が響き、ここでサティエリナは木刀を下段に構える。木刀にさっきよりも多めの氷 魔力を流すと、パキンパキンという音がしだす。木刀全

体を包むように、氷が纏わりつき、同時に形が変化していく。

魔力を流し続けていると、明が自分に向かって接近しようとしていた。これはいい経験になりますよ、と呟いたサティエリナは、氷によって変化した木刀　槍のように長い長剣を振るう。木刀よりもリーチがあるため、明の接近を許さないが、懐に入られてしまつたら終わりである。

「それは、なかなかすごいね。でも、僕には意味がないからね、サティエリナさん」

一気に距離を詰めてくる明に驚かされたサティエリナは、意味がありますよ、と返す。長剣を振るうとすると、あっさりと思にかわされてしまい、彼に懐を狙われそうとなる。しかし、ここで明は彼女はユグドラシルの魔法姫、という2つ名があることをすっかり忘れていた。

長剣に砕けよ、とサティエリナが命じると音を立てて氷が割れる。地面に落ちていく氷に彼女は従えと再度命じると、ぴたりと地面に落ちる寸前に止まり、サティエリナの周囲だけ時が止まったようになる。

「穿て」

たった一言だけ、サティエリナは命じるだけで周囲の氷の棘は指示に従う。

これを予測していなかった明は風を纏った剣を振るい、なんとか打ち落とそうするが無理であった。明の攻撃によって砕けても氷は彼の死角に向かい、襲い掛かってくる。それを回避し、反撃しようとしてもいつかは氷の棘に囲まれる形となってしまう。

「ははっ……」

「詰みですね、アキラさん」

いつの間に接近したサティエリナは彼の首に木刀を突きつけていた。しかも、彼の周りには、氷の棘が囲っているので逃げることにすら叶わない。

「はあ、降参だよ」

「はい、アキラさんがすなおに負けを認めたので、氷刺しの刑はなしにしましょう」

「氷刺しってなに？ しかも、それって何気に人が死にそうなことだよな！？ いや、これよりもどうして刑なのさ！？」

「そのままの意味ですよ。生きたまま、人を氷で貫くということです」

無表情でさらっと怖いことを口にしてくれた彼女に、明は恐怖を覚えた。

彼の周りを囲う氷の棘を消したサティエリナは、どこがよかったのか悪かったのか感想を明に伝える。彼女の辛口コメントを聞いた明は、容赦なく問題点を指摘させられることに落ち込むが、次に生かそうと決めた。

「汗をかいてしまったようなので、わたしは先に失礼しますね」

「わかったよ。ありがとう、サティエリナさん。僕の訓練に付き合ってくれて」

「これぐらい、当たり前のことですから。……あつ、わたしが入浴している姿をのぞかないでくださいよ？」

「誰もそんなことしないから！」

「ふふつ、そういう人こそが一番しそなんですよ」

口元に笑みを浮かべるサティエリナは、明に背を向けて、さっさと自分たちがいるテントのほうに戻っていく。彼女の後ろ姿を見送ってから、明は地面に置いてある剣をつかむ。柄に手を伸ばし、そつと剣を腰に差した明は、ある音がどこからか響いていることに気が付いた。

ぱんつという肉体を打ち付ける音。よく不良たちと喧嘩したことのある明は、それが誰かに殴られている音だと見抜き、すぐさまに音の発生源に向かう。

「これは……なんだ？」

駐屯場よりも離れた場所にたどり着いた明は、それを見て、思ったままのことを口にしてしまう。

そこにいたのは、頭にヘラクレスオオカブトのように立派な一本角を生やす男性と、朝から姿を見ていないギースが殴り合いをしていた。男性の顔つきは野生的でワイルドであったので、一度見たら忘れることができない特徴。がっしりとした体を見せつけるように上半身裸であった。

男同士の熱い拳の語り合い、という光景を見せつけられた明は、男性のほうを注目した。彼の頭から一本の角が生えている　ここで、ジュリアスの言葉を思い出す。

『確か、1人は頭に1本の長い角は生やし、国王と互角に渡り合える人物。もう1人は、頭に2本の長い角を生やした人物である』

フィオナの森に住み着く者　魔族である事実を思い出した明は、剣を鞘から抜き放つ。至近距離で殴り合いをするギースと魔族の間に隙ができたなら、一気に斬りかかる、と決めた。足に風を纏わせた明は、ひたすら好機を得るためにじつと戦いを見つめる。

「これだけなのか、ユグドラシルの王よ！」

魔族は重い一撃をギースに食らわせると、彼は宙を舞い、どんと地面に倒れた。

「この私を満足させることができないのか、ユグドラシルの王よ？」
立ち上がるギースを見下すように、魔族は静かに問いかける。

「これぐらいで……私が倒れると思っているのか？　私の筋肉は、まだまだ衰えてはおらんツ！」

ギースの筋肉が隆起していき、二の腕はさつきよりも二回りも大きく膨らんでいる。魔族は、彼がまだ戦う意思を見せたことに頬をほころばせ、ギースを迎え撃とうとする。

二人が再び殴り合いをするまで時間がある、と踏まえた明は力強く大地を蹴る。足に風を纏っているおかげで、二人の間に割り込むことが可能となり、一気に魔族に向かっていく。ギースは突然の乱入者に驚いていたが、明であるとわかると彼をそのまま魔族に向かわせる。

一方、魔族は明が登場したことなど気にすることなく、彼が斬り

かかるうとする一撃を正面から受け入れた。

「硬い……！」

まるで金属のように魔族の体は硬く、正面から斬りかかった明の剣は彼の肉体を傷つけることさえ叶わなかった。しかも、魔族はかわす身振りも防御する構えさえ見せていなかったたので、余裕であるとうかがえた。

彼の余裕を打ち砕くために、明は一度距離を取って剣を構える。

「……これは、風か……？」

剣に風を纏わせていく明の姿に、魔族はこれはまずいかもしれない、と呟いた。明の周囲には風がごうごうとうごめき、彼を中心とするように渦を巻いている。

「よそ見している場合なのか、グルトスよ！」

「ぐあッ……！」

二回りほど大きくなった腕を魔族　グルトスに叩きつけるギースの重い一撃によって、彼は膝をついた。膝をつけてもグルトスは、振り下ろされるギースの拳を受け止めるために腕を前に出す。だが、いまのグルトスにはそれを受け止めることなどできなかった。

「　グラビティインパクト！」

「ぐッ……」

ギースが放った拳には魔法が込められているため、あっという間にグルトスの周囲の地面は陥没する。それでも、グルトスはしっかりと彼の拳を掴んでいた。受け止めることができなくても、彼にはしっかりとギースの拳だけを掴むことができたのだ。

「なかなかやるではないか……ユグドラシルの王よ！」

ギースの拳を掴んだまま、グルトスはゆっくりと立ち上がりながら彼の手を逆に潰そうとする。骨がきしむ音にギースは顔をしかめながらも、空いている片手にもう一度魔法を込める。周囲を押し潰す一撃　グラビティインパクトを。

「ほっ……まだ、あきらめないとは感心したぞ。ユグドラシルの王よ」

ギースの片手に集まっていくなかに黒い光を見ながらも、グルトスは慌てることなどない。

「私は、一国の王である。いま、ここで私が倒れてしまったら、誰がユグドラシルを支えると言うのだ!？」

「国を支えることなど、私にとってもいいことなのだ。私は、強者と戦うことのみが生きがいである!！」

一気に黒い光がギースの手に凝縮され、グルトスはかわす素振りも見せることもなく、彼の一撃を正面から喰らう。ぱんつと風船が破裂するような音が彼らの間から響く。斬り込むチャンスを探している明は、なにが起きているのか? と疑問を抱くながら、彼らの様子をうかがっていると、

「ふう……これだけでは、この私を倒すことすらできないぞ。ユグドラシルの王よ」

「なッ……至近距離で喰らったのに、なぜ立っていられるのだ!？」

「それは、私の肉体が一度攻撃されたことのある技を、すべて無効化にしてしまうのだ。つまり、先ほどの技　グラビティインパクトとやらは、すでに私の肉体に刻まれている。これを意味するのは、もう二度と同じ技などこの私に通じることはないのだ。

さらに、それ以下の攻撃も私に通じることなどない。

なぜならば、魔族というのは一人につき一つの能力を保持している!」

私の場合、一度攻撃された技を肉体に刻み、それを無効化にしてしまうということ」

グルトスの説明を聞いた明は、だから剣で斬っても意味はないのか、と納得してしまう。同時に、ギースのグラビティインパクト以上の技ではないと、グルトスを倒すことができないと発覚した。

けれども、それがどうしたのだろうか? と明は心の中でグルトスに尋ねる。たとえば、ギースのグラビティインパクト以上の技でなければ、彼を倒すことができないのであれば　それを超える攻撃をすればいいだけの話。

いま、明が握っている剣から感じる風の力は、グルトスの無効化する肉体を打ち砕くことだっただってできるかもしれない。打ち砕くでは生温い。切り裂くのだ。風の力によって彼が身に纏っている鎧を切り裂き、肉体を切り刻む。

「ギース陛下！ そいつから離れてください！」

「わかった！ ふんぬう！！」

グラビティインパクトが効かないと知ってしまったギースは、グルトスの顎を殴る。それをくらった彼はひるみ、掴んでいたギースの手を放す。グルトスは顎を殴られる前にギースの手を粉々にすることができたが、あえてそうしなかった。彼は、このような事態になると予想したかのように、あっさりとギースを逃した。

ギース以上の技　グラビティインパクトを超える一撃を受け止める自信があるのか、グルトスは仁王立ちをする。

明の周囲にうずまく風は、きつとグルトスの肉体を傷つけることができると感じていた。

「さあ、来るがいい！！」

腕を大きく広げ、明の攻撃を受け止めるというサインを出していた。明は、ギースが離れた時点で彼にこの一撃をくらわせる、と決意していたので剣を勢いよく振り下ろす。

剣に纏われていた風は竜巻の如き猛烈な勢いとなって迸り、地面を抉りながらまっすぐにグルトスへ襲い掛かる。正面から台風のような一撃をくらったグルトスは、苦痛で顔をゆがめながらも足を地面に踏ん張って受け止めていく。だが、荒れ狂うかまいたちによって肉体を刻まれていき、体から血が次々とあふれていく。

それでもなお、グルトスは受け止めていたが　明が、再びかまいたちを放った。さっきよりも威力は劣るものの、グルトスを吹き飛ばすことは可能で、彼は近くの木まで飛ばされた。同時に、彼が受け止めていた暴風が襲い掛かり、木もろとも切り刻んでゆく。

「やったのか……？」

ミキサーにかけられたにんじんのように、木であったものはバラ

バラに刻まれている。視線を木であつたものに向けている明は、警戒を解くこともなくじつと見つめていると　そこから笑い声が響いた。

「くはははッ！　この私を、傷つけることができたのは、魔王以来ではないかッ！！」

心の底から楽しそうに笑うグルトスは、埋もれていた木の下から姿を現し、明に目を向けた。

「おい……それはないだろう」

彼を見た明は思わず不満を漏らしてしまった。

グルトスの体には、明が放ったかまいたちによって刻まれているはずなのに、そこにはなにもなかった。正確には、なにもないように思えるぐらいきれいさっぱりと、傷口が消えていたのだ。ただし、彼の血だけはべつとりと体に張り付いていた。

「なにを驚いているのだ？　私の肉体は驚異的な回復力を誇るものである、と言わなかったのか？

まあ、仕方のないことだ。私は、魔族のなかでは異種と呼ばれるような存在である。

魔族というのは、一人につき一つの能力があるというのだが、私の場合はこの身に二つを宿している。それが、驚異的な回復力であるのだ！！」

「一言も言っていないな。……ギース陛下、これはとてもまずいですね」

グルトスの驚異的な回復力があると聞かされたギースは、ふんつと鼻を鳴らす。

「それならば、回復を上回る攻撃をすればいいだけのこと！」

「確かにそうですね……僕たちだけでは、威力が足りないので吉夫たちを呼んだほうがいいかと」

「心配するではない。私たちが同時にやれば、あつという間に終わらせることだってできる。……一気に畳み掛けるぞ、アキラよ」

「……それしかないのなら、やるしかありませんね」

剣と拳を構える明とギースがやる気を見せてくれたことに、グルトスは楽しそうに、口元に笑みを浮かばせる。

「さあ、来るがいい。私を倒すことができるのであれば、かかってこい」

獣のようにおたけびを上げながら、グルトスは襲い掛かってきた。

王と勇者

明とギースは驚異的な回復力を誇り、一度受けた技を完全に無効化してしまう肉体を持つグルトスに、苦戦を強いられていた。彼らは、グルトスの肉体に弱点はないか、と探りながら連続で攻める。しかし、一度受けた技を完全に無効化してしまう彼の前では無意味であった。

おまけに、彼を傷付けることができて、あつという間に再生してしまう回復力のせいで倒すことができない。

「私を倒すことができないのかッ!？」

斬りかかる明の剣を拳で迎え撃つグルトスは、腕を落とされることを恐れてはいない。ギイインという金属音がぶつかり合う音が両者の間から響き、すぐさまに明は後退する。入れ替わるように、両手に黒い光を宿したギースは、さっき明が斬りつけたところに拳を叩きつける。よろめくグルトスに追い打ちをかけるように、ギースはもう一撃だけ放つが、彼はこれを傷ついた拳で受ける。

三つの攻めを連続で一つの拳で受けてしまったグルトスは、苦痛で顔を歪ませるよりも、気持ちよさそうに味わっていた。苦痛と快楽をもっと味わいたいグルトスは、傷つけられた拳を握り締める。

ばきばきと骨が鳴る音を聞いた明は、先程のギースがくらわせた技　グラビティインパクトによって砕けたはずの骨が再生していることに憤怒を覚える。同時に、まだ彼を倒すことができない自分に恥じる。

忌々しい再生能力と無効化する肉体には、明とギースにとってやっかいである。少しでも傷をつけることができて、あつという間に再生。または、強い攻撃であれば無効化されることなどないが、それ以下であれば彼には効かない。その二つの内一つを破壊するため、明は剣でグルトスに斬りかかる。

「いくらなんでも硬すぎるじゃないか……!」

悪態をつきながらも明は、グルトスの拳に切れ目ができたことを感じると、すぐに彼から離れる。そこへ両手に黒い光を宿したギースがグルトスの懐に飛び込み、彼に重い一撃を喰らわせようとする。これは、何度も連帯攻撃をすることによってグルトスの無効化する肉体を突破しようとする作戦であった。

「何度も同じ手を通じると思っのかッ」

拳から大きく手を広げた状態で、ギースのグラビティインパクトを受け入れるグルトス。ぐぬっ、と苦痛を漏らしながらもグルトスは、ギースが振り下ろそうとする拳を受けるため、空いている手で対応する。

黒い光を宿した拳とただの拳がぶつかり合い、両者ともに楽しそうに微笑む。

彼らは、二ヶ月前に一度だけ拳を交えたことがあるため、こうして戦えることができるだけで、二人にとって最高の勝負であった。王や魔族ということ位や種族など、彼らはこの瞬間のみ忘れ、自分の好敵手を倒すために拳を振るう。

そのことを察知した明は、これは彼らの戦いではない、と呟き、仲間であるギースの名を呼ぶ。

「ギース陛下！ 離れてください！」

明の声を聞いたギースはグルトスから距離を取ろうとするが、彼はしっかりと自分の手を掴んでいた。ごきっ、という骨が鳴る音を聞いたギースは、グルトスが自分の両手を使い物にならないようにしていることを悟る。

それでも、ギースはこの状況を覆すためにグルトスの頭に頭突きをくらわせる。仰け反るグルトスは彼の手を放してしまい、自由となったギースは右手を犠牲にするつもりで殴りつける。

ばきっという嫌な音を聞いたギースは、殴り飛ばしたグルトスを警戒しながら、無事である左手を握り締める。グルトスは彼が正面からぶつかり合うことを感じ、自ら距離を詰めようとする前に明が邪魔した。

「これでもくらえッ」

剣と足に風を纏わせた明は、グルトスの目では追えない速さで斬りかかる。けれども、その一撃はすぐに再生する肉体の前では無意味であった。

が、明はそれを意味のあることにさせる。

グルトスには追いつかれない。先程そう確信した明は連続で攻めることにしたのだ。

明はひたすらに剣を振るう。正面、背後、腕、脚とさまざまな場所を狙いながら動き回る。まさに嵐の如く。

グルトスはうつとうしそうに防御するが、明はすぐに違う場所を斬りつける。明の一撃は彼にとってたいしたことではないのだろう。一撃は、だが。

明の嵐の連斬は再生する肉体をも上回るのだ。治る前に再び斬つてしまえば、いつしか回復が間に合わなくなる。

「……本気を出すとするか。破アッ！」

裂帛の気合を出したグルトスによって、空気はビリビリと震える。斬りかかるうとしていた明はそれによって弾き飛ばされ、目を白黒させる彼はなにが起きたのか理解できない顔をしていた。

「少年！ おまえには、私を久し振りに本気にさせてくれた礼をさせてもらうぞ！」

明に一度も攻める身振りを見せなかったグルトスは、彼に向けて拳を振り下ろす。空気をうならせる剛腕を捌けない、と明が判断し、横へ大きく跳ぶ。彼がやったことを正解であったことを示すように、地面であった場所は陥没し、その中心にグルトスが立っていた。

「よけるなああああー！」

巨体とは思えないほど俊敏な動きで、明のところまで距離を詰めていくグルトス。驚きながらも、明は剣に纏わせた風を放出させるように、眼前に迫るグルトスに叩きつける。バンツという弾けるような音が響き、よろめくグルトスは両足を踏ん張り、倒れるのを阻止する。

彼から離れた明は、放出した風を補充するように剣に纏わせていくと、体勢を立て直したグルトスが豪快に笑う。

「ふっはははッ。血が騒ぐ、腕が鳴る、心臓が高鳴る！ これこそ、魔王と拳を交えた時に感じていた闘志、本能、感情ッー！」

感情を昂らせるグルトスが油断していると思いながら、明は剣を勢いよく振り下ろす。剣に纏われていた風は、対象を切り裂くかまいたちと化し、グルトスに襲い掛かる。

「温い。技は私の肉体の前では意味を成さない！」

剛腕を前に出したグルトスは、襲い掛かるかまいたちを無効化させるためにわざと受け入れる。無論、いつものようにただの技であれば、グルトスには通じることはない。

それを承知している明は剣に風を纏わせると、もう一度だけかまいたちを放つ。さらにもう一度。同じことを繰り返す明は、グルトスに効く、とこれまでの戦いを通して理解していた。どのような攻撃でも無効化してしまう肉体を持っていたとしても、いつしか限界が来る。たとえ、一度受けた技を肉体に刻み込み、それをくらったとしてもすべて無効化できる、という体質があったとしても、連続で攻められたらどうだろうか？

いくら再生することができるとしても、それを上回るほどの攻めを繰り返し返せば、いずれは間に合わなくなる。

これが、明の出した結論であった。

「男だったら、正々堂々と拳で語り合うのが常識であろう！？」

「それは、おまえだけ、だ！」

接近するグルトスは明に向けて剛腕を振り下ろすが、身を低くしてかわす。頭上では空気がうなり、もしもあれが直撃でもすれば、と想像しただけでぞっとした。

だが、いまはそんなことよりも、眼前の敵　グルトスに集中する。何度も、かまいたちを彼にくらわせたおかげか、グルトスの腕には切り裂かれた跡が刻まれていた。無効化される肉体、驚異的な回復力を上回ることをしたせいかもしれない。

もつとも、明がかまいたちを執拗に放ち続け、それを防ぐことなく受け続けるグルトスがいたことが原因であるが。

「串刺しとなれ！ 大地の棘>アースパイク<」

グルトスが魔法を唱える、と感じた明はかまいたちを放つのをやめ、彼から離れていく。すると、大地から1メートルの大きさもある無数の棘が生えていき、すさまじい勢いで明に迫っていく。串刺しとなるのを避けたい明は、足に纏わせている風を利用して宙に飛ぶ。宙に飛んだ彼は、スケートをするようになめらかな動きで大地から生えていく棘をよけていく。

これは、足に風を纏わせているおかげで、空中であつても歩くことができるようになったのだ。このことに気が付いた明は、自分なりに考え、空中であつても大地と同じように走れるようにしたい、と悩む。試行錯誤を何度か繰り返し、その結果が宙であつても自由自在に動くことができる、となった。これをジュリアスに見せたら、アキラは天才か？ とすなおに思ったことを口にしていた。

本来ならば、魔法によつて人間が空を飛ぶことなどできないが、地面から5、6メートルぐらいは浮くことができる。それを気が付かないうちに明は見抜き、自分で宙を浮くことと自由自在に動くことまで習得したのだ。風で人が浮かぶことができるまで、サティエリナすら二週間がかかるのを、たった二日でマスターした明は自分が天才であることを知らない。

「生意気な少年め！！」

「……僕は、生意気な少年じゃなくて勇者だ」

大地から生えていく棘を宙で滑空するようにかわす明は、ギースに目を向ける。彼が、グルトスに気が付かれないように首を縦に振るつと、明は剣に風を纏わせていく。

大地から生える棘をよけ、宙を滑空し、剣に風を纏わせる。

同時に三つのことをしている明の額から、汗がつつと流れていく。一瞬でも気を抜いてしまえば、大地から生えてくる棘に串刺しにされてしまう。そうならないために、明は宙を滑空しながらかわし

ていくが、唐突に生えてくる棘だけはよけきれない。腕や脚にかすってしまふことがあつても、彼は自分の剣に風を纏わせ、力をためていく。

チラと明はギースのほうを盗み見すると、彼は遠くからでもはっきりとわかるほど、黒い光を左腕に包ませていた。ギースがしていることに、グルトスはまだ気が付いてはいない。

明とギースは、グルトスの回復を上回る攻撃をする、と彼が自慢していたときに決めていた。そのときに、二人はいま自分ができる最高の一撃を彼にくらわせる、と作戦を立てていた。いまがそれをやる時機である、と彼らは目で語り合い、明はグルトスの注意を引きながら宙を滑空していく。

「男らしく、私と真正面からぶつからないとは、意気地なしで臆病ではないか」

「うるさい。僕は、おまえに言われる筋合いはない」

「言つてやるとも！ 剣は相手を斬る武器であるのに、なぜ振るうこともなく、握っているのだ！？」

「……知りたいか？」

「ああ、ぜひ教えてくれ！」

「それを、いまからおまえに思い知らせてやるよ！ ギース陛下、やってください！」

大地の棘をかわしてきたギースは、全身のいたるところにかすり傷を負っていたが、彼の目は闘志に燃えていた。左腕には、さつき明が見たときと同じように黒い光によつて包まれており、それをぶつけるために、ギースはグルトスまで距離を詰める。

彼がまだ戦うことがうれしいのか、グルトスは獰猛な笑みを浮かばせながら、ギースへ拳を振るう。再び彼らの拳が激突し、そこから衝撃波が放たれて地面をえぐっていく。同じ強さの拳がぶつかり合い、明はギースの最高の一撃があれだけなのか、と疑問を抱いているとグルトスの体が宙に浮かぶ。

え？ と頭の上に疑問符を浮かべていると、ギースは獣のように

咆哮しながら、わずかに浮いたグルトスに拳を叩きつける。黒い光を包ませた左腕を、グルトスの体にぶつけるギース。胴体にギースの攻撃が決まると、グルトスは体をくの字にされるが、恍惚に満ちた表情で痛みを味わっていた。それでも、グルトスの目には、まだ闘志の炎が宿っていることを見抜いた明は、ギースがどのように動くのか見守る。

「吹き飛ぶがいい。バーストブレイカあああ！！」

左腕に包まれてる黒い光は、ギースの思いに答えるように一層強く輝く。わずかに宙に浮かんでたグルトスは、腹にぐっと圧力がかかっていることを感じると、彼から離れるように、両手で外そうとする。けれども、グルトスの腹にはきっちりギースの左手が固定されており、外すことなどできない。

「いけえええッ！」

「ぐはあ」

固定していた左手を上に向けて動かすと、巨漢であるグルトスが宙に高く浮かび上がる。空中に浮かんだグルトスを追いかけるように、宙を滑空する明は彼に接近していく。まっすぐ向かう明は、宙で動きが制限されてしまう彼をここで終わらせるために、グルトスの懷まで潜り込む。

それを許さないかのように、グルトスは彼に拳を振り下ろすが明は、宙を駆け抜けてあっさりとかわす。いまのグルトスには地の利がないため、明はこのチャンスで一気に決めるために、彼の胴体に剣を振るう。同時に、剣に纏わせていた風を放出させた。

「ぐあああッ」

苦痛に満ちた表情で、痛みを訴えるグルトス。本来ならば彼の肉体は弱い攻撃など一切通じないが、それを越す一撃を先に与えることで、無理矢理通させる。ギースがグルトスにくらわせたバーストブレイカーは、これまでにない最強の一撃であった。

さらに、そこへ明の風を纏わせた剣を追加させることによって、グルトスの無効化する肉体を破壊させた。それも無理矢理に。

「まだ終わっていない！」

宙に浮かぶグルトスの胴体を斬った明は、その勢いを利用して体を回転させる。剣に纏わせている風を放出させている彼は、勢いを乗せた一撃をもう一度だけグルトスにくらわせる。グルトスは、防御することもできずに明に斬られてしまい、反撃することもなく、大地に落下していく。

だが、これでまだ終わってはいない。

グルトスの驚異的な回復力のことを忘れていない明は、落下していく彼を見ながら、剣を掲げる。明の頭上には、大量の風が渦巻いていき、中心となっている剣に集まっていく。いまからやることは、一番最初にグルトスを傷付けることができた必殺技　旋風。

これは、すでにグルトスの肉体に刻まれているが、いまの彼にはそれを無効化することなど、できない。明たちによって、無理矢理破壊させているからだ。それを承知で明は剣に集まっている風を、剣を勢いよくグルトスに向かって振り下ろす。

剣に纏われていた風は竜巻の如き猛烈な勢いとなって、落下していくグルトスは腕を交差させて防ごうとする。だが、旋風は彼の行為を嘲笑うかのように、肉体のいたるところを切り裂いていく。驚異的な再生力を誇るグルトスであったが、旋風はそれを上回るかのように回復しようとした場所を刻み、新たな傷を生み出す。

破壊と再生を何度も味わうグルトスは、旋風によって傷口をえぐられる痛みにも耐えながらも、意識を保ち続けていた。それは、明が彼の目に宿る闘志をしっかりと見つめ、またグルトスも彼を見つめていたからお互いに理解していた。

旋風によって、グルトスの巨体は勢いよく地面に叩きつけられ、彼の周囲に二メートル程のクレーターが出来上がる。

宙に浮かぶ明は、地面に叩きつけられたグルトスの様子をうかがっている、彼はゆっくりと目を伏せた。彼の体から、人間と同じような赤い血が地面にどくと流れていることに気が付いた明は、グルトスの回復が間に合わないことにほっとした。

彼の旋風はグルトスの驚異的な回復力を上回っていると物語り、再生する様子はない。目を伏せたグルトスを宙で確認した明は、ふと駐屯場のほうに目を向けてみると

「魔物に襲われている……？」

騎士たちが慌しく動き、冒険者ギルドのトライアルブレイドの人たちも何かと交戦中であつた。目をこらさないとよくわからないが、その何かは遠くからでもよくわかるほど、全身が緑色に染まっている集団が動き回っていた。

ゴブリン、とフィオナの森でよく倒した魔物であると見抜いた明は、ギースになにも告げることなく、宙を滑空していく。

向かう先は駐屯場である。

王と勇者（後書き）

明日も投稿します、ということを伝えておきますね。基本的に1週間に一度の更新なのですが、短い場合であれば木曜日と金曜日に連続で続けます。基本的に金曜日に更新するので、そのときに読む方がいれば楽しみとしてください。

青い空の下で

「なにがあつたというのか……？」

少年が去つていくのを、目を閉じたまま感じる事ができたグルトスは、ギースの呟きを聞いてしまう。そんな彼の問いに答えるように、地面に叩きつけらえるグルトスが口と目を開く。

「恐らく、私の弟が駐屯場を攻めているのだろう……な」

「弟だと……？　そうか、フィオナの森にいるのは貴殿のみではないのか」

「そうだ。弟のガルバは私と違って生真面目だからな、この機に乗じたのだろう」

「なるほど……。では、私も行かせてもらつとするか」

ユグドラシルの騎士たちと、冒険者ギルドのトライアルブレイドたちがいる駐屯場に向かつて、ギースは歩きだす。自分にとどめを刺すことができるのに、あえてそのようなことをしなかった彼にグルトスはギースの騎士道に呆れてしまう。

誰もいなくなったところでグルトスは思考しだす。

ギースが騎士を同行させることなく、のこのこと一人でこの場所に来たのは自殺に等しい行為であつた。もっとも、グルトスは騎士が何人いようと、構わず戦いに臨んだだろう。

実際に二ヶ月前にギースと戦っているときには複数の騎士と相手をしていたが、彼が男同士の邪魔をするではない！　と怒鳴つた。おかげで彼と一対一で拳を交えることになったが、いまではいい思い出である。

ふうと息をついた彼は勇者と名乗る少年の姿を思い浮かべる。あの少年は、ギースが誰にも邪魔されないように人払いの魔導具を發動していたのにも関わらず、彼はここに姿を現した。ギースは驚いていたがグルトスにとっては、戦える相手が増えたので文句を言うことなく楽しんだ。

ただし、羽目を外し過ぎて遊んでいたことで彼らに負けてしまったことは自業自得である。無効化する肉体だってその気になれば、彼らの攻撃など通じることなどなかった。あくまで、彼らのレベルに合わせてだけであって、グルトスは実力の半分以上は出していない。何度か本気になりかけたこともあったものの、うまく自制することによって彼らの戦いを楽しむことができた。

強者と戦いたかった願いは叶ったものの、自分を殺すことができなかった勇者に失望していた。けれども、このまま、ゆっくりと地面に寝そべっていれば肉体は回復していく。驚異的な回復力を上回る攻撃を受けたけれども、こうして時間をかけて再生していけば、立ち上がることができる。

「あら？ お父さんと互角に戦えるはずのグルトスが負けたなんて信じられないわ」

唐突に響いた声は、昨日聞いた少女のものであるとわかっているグルトスは立ち上がる。痛みを感じながらも声のしたほうに視線を向けてみると、ストレートに伸ばされた髪は三つ編みに纏めた少女がいた。人懐っこい笑みをしているはずの少女の笑みは、いまだけは獰猛な微笑みを浮かべていた。

「リーン様、何故あなたがこのような場所にいるのですか？ あなたは、魔王のところに戻ったはずではありませんか？」

「誰がお父さんのいる場所に帰るなんて、言ったのかしら？」

「……言っておりません」

「そうでしょう。」

ねえ、グルトス。あなた、勇者とユグドラシルの王と戦っているときに遊んでいたでしょう？ あなたの無効化する肉体と驚異的な回復力……あれで破壊される程もろくないでしょう？」

内心、冷や汗をかきながらもグルトスは答える。

「……なにを言っているのか、私にはわかりません」

「わからなくていいよ。役立たずのあなたは、この私が殺してあげる。」

出でよ、黒き槍よ」

リーンが腕を前に出すと、彼女の手には漆黒に染まる槍が現れた。彼女が自分を殺すことであると悟ったグルトスは、ふうとため息をついた。彼は、勇者であるあの少年とユグドラシルの王とは、本気で戦っていなかった。ただ、やったとすればわざと彼らのレベルに合わせたことである、と言っても過言ではない。

そのような余裕があるグルトスは、先程の戦いで傷ついた肉体を癒すために、全身に力を込める。膨張する筋肉、流れていた血はそれによってふさがり、疲労しているはずの彼は獣のように吼えた。

獣の咆哮を聞いても、リーンは黒い槍を携えたまま、グルトスの様子をうかがっていた。そのことに感心する彼は、魔王と戦っていた頃の自分となるために、両手を前に出す。

「出でよ、魔剣」

呼び声に応えるかのように、彼の両手にグルトスの身長を越す大剣が現れた。しかも、二本。どちらも、刀身はトパーズのように輝き、武器とは思えないほど美しい光を放っていた。片手で大剣を扱うことができるグルトスは、右手を前に出し、左手を後ろに構える。大剣の双剣。

これが、過去に魔王と互角に戦うことができた一番の要因である。だが、これでも魔王は自分の実力を半分だけ出していたことを思い返すと、苦笑してしまう。

「なにが、面白いのかしら？」

「あなたには、関係ありませんよ。リーン様、いくらあなたが魔王の娘であったとしても、私はここで命を尽きるわけにはいきません」

「それは、あの勇者ともう一度だけ戦いたいってこと？」

「はい。私は彼に対して、実力の半分しか出していなかったの、次は本気で潰させてもらいます」

「……なら、あなたを殺すことをあきらめましょうか」

黒い槍を消したリーンは、踵を返すように、自分に背を向けて歩き出す。

彼女の意図を知ることができないグルトスは、彼女に呼びかけようとする、

「お父さんがあなたのことを必要としているから、いまここで、殺しはしない。

それに、あなたはあの勇者と呼ばれる少年ともう一度だけ戦いたいみたいから、やめておくわ。

でもね、もしも、あなたが私に牙を向けていたら　　殺してあげたわ」

殺意のこもった言葉を聞いたグルトスは、リーンの姿がどこかに消えるのを見守ると大剣を消した。

立っているだけで体力が削られていた彼は、回復するまでしばらく大地に寝そべる。いまは体力などほとんどないため、しばらく休憩しないとフィオナの森に戻るなどできない。

戦ったあとの雲ひとつない、青い空は清々しく、敗北したのに気分はスッキリとしていた。

「ふう……魔王は、とんでもない怪物を飼っているよな」
そのようなことを呟きながらグルトスは目を閉じた。

訪れる危機

「くっ、このようなことになったのは、すべてあいつのせいだ！」
文句を漏らしながらも鎧を身に纏うジュリアスは剣で、人間と豚を足して二で割った魔物　オークを斬り捨てる。仲間を殺されたことに怒るかのように、鼻息を荒くするオークがジュリアスに近づく。

魔物の気配を察知したジュリアスは、そちらに目だけ向けてみると斧を上段から振り下ろすオークがいた。

オークは力任せに斧を振るう脳しかない、と理解しているジュリアスは剣を下から振り上げる。勢いよく振るわれた斧は、ジュリアスの剣と火花を散らし、オークは体勢を崩してしまふ。その一瞬を見逃すことのなかった彼女は、剣でオークの首を切り落とす。

首を失った体は糸の切れた人形のように倒れ、思い出したかのように血がどくどくとあふれていく。ジュリアスは剣を鞘に収めることもなく、さっきまで一緒に戦っていた恵美の姿を探し求める。しかし、そこには彼女の姿はどこにもない。

なぜなら、いまフィオナの森の駐屯場は混戦であつた。

大量の魔物によって攻め込まれていることは、騎士と傭兵たちが戦っている。騎士たちは陣形を組みながら剣を振るい、冒険者たちは傲慢の武器を巧みに操る。

ジュリアスは、騎士と冒険者たちが魔物の相手をしている間にはぐれてしまった恵美の姿を探し出す。ほんの少しだけ、彼女と一緒にいた時間を振り返りながらジュリアスは戦場を駆け抜ける。

時は少し前にさかのぼる。

ジュリアスは、恵美の適正魔法をチェックしたところ、彼女の白いボールは青と黄色が混ざった色であった。このことにジュリアスは驚きを隠せることができなかった。

何故なら魔法とは、一人に対して一つの属性である、と昔から決まっているのだから。まれに、才能や素質がある者であれば二つか三つもの属性を扱うことも可能である。ただし、血のにじむような努力をしたらそのようなことができる、と二つの属性を学んだジュリアスは知っている。

「どうしたの、ジュリアスさん？」

心配するように声をかける恵美に、ジュリアスは、彼女の属性について語る。

「あなたの適正属性は、水と土である。

しかも、これは……苦勞するぞ、メグミ」

「みたいだね。一人に対して一つの属性が当たり前なのに、私は二つもあるから……覚えるまで、大変だね」

さっきの話をしっかりと聞いていた恵美に感心しながら、ジュリアスはサティエリナを呼ぶことにした。恵美の適正属性である水は、サティエリナが使用しているので、彼女からそのことについて手取り足取り教えてもらうほうがいい。

ジュリアスは光と土の適正属性であるが、恵美に土の魔法を教えるつもりはない。彼女には、先に水の魔法を覚えてもらう。なにせ、ジュリアスが土の魔法を習得するまでかなり時間がかかったので、水のほうを優先させておく。

一度に二つのことを学ぶよりも、ゆっくりと一つの属性を教えてあげたほうが効率がいい。サティエリナは自分に厳しく他人にも厳しいので、すぐに恵美は水を覚えるだろう。そのあとで、ジュリアスは彼女に土を教えよう、と頭の中でプランを練っていると、

「ぎゃあああ!!」

突然、断末魔の悲鳴が響いた。

とつさに腰に差している剣の柄に手を伸ばし、いつでも抜けるように構える。悲鳴がした方向に目を向けてみると、鎧を身にまとっている人間の体が二つに裂けていた。うっと声を漏らす恵美は目をそらし、テントの外にいた騎士と傭兵たちはなにが起きたのか、わかっていない様子であった。

ただ、わかっているのはこの場にいるジュリアスだけであった。死体の近くに立っている人物のことを、彼女は忘れることなんてできない。あそこにいる彼は頭に二本の角を生やし、腰に二振りの剣を差している。その内の一本は鞘から抜かれ、真紅に輝く美しい剣は血によって、さらに赤という色を強調していた。

彼の名前は 魔族であるガルバ。

「いきなりこのような場に現れたことに謝る」

謝罪をしたガルバは真紅の剣を鞘に収めると、足元に転がる男性のある物を奪う。剣だ。彼は奪った剣を鞘から抜くと、剣先を空に向けて堂々と宣言する。

「拙者は魔族であるガルバ。

たつたいまから、拙者はユグドラシルを滅ぼすために、この駐屯場を崩壊させる」

静まり返った駐屯場では彼の声がよく響き、呆然とガルバを見守っていた人々はざわつく。彼らは、嫌でもガルバがなにしようとするのか理解してしまった。

自分たちの祖国であるユグドラシルを滅ばす、ということ。

ジュリアスは冷静に、彼一人だけでなにができるのだろうか？

と疑問を抱いていると、ガルバは近くにいた騎士に斬りかかる。呆然としていた騎士はすぐさま、腰に差している剣を抜こうとするが、それはささやかな抵抗でしかなかった。

騎士が剣を抜く頃には、ガルバは彼の鎧を紙のように切り裂いて

しまった。斜めに切り裂かれた鎧の破片と血が宙に舞い、斬られた反動によって男性は後ろに倒れていく。

「もろい……鎧を斬っただけで刃がかけるとは……」

鎧を斬った代償として彼が振るった剣は刀身が半分しかなく、武器としての機能が失われていた。それを目撃したジュリアスは、彼が熟練の剣士であることに気が付かされる。剣が鎧を斬るということなど、ありえない現象であるがガルバのような熟練の剣士であれば可能である。

岩や鉄を紙のように切り裂くことができる彼の技量に、逆に剣が耐えられなかった、と結論が出た。彼とまともに戦えば命はないかもしれないが、ここで対抗できるのは、おそらく自分のみ。

剣を鞘から抜いたジュリアスは、ガルバまで距離を詰めていき、勢いよく振り下ろす。ガルバは慌てることもなく、鞘に収めたままの剣で彼女の一撃を防ぐ。

「貴様、よくも同胞を殺してくれたな！」

「否定。弱者は死ぬ、それだけのことである。拙者は、強者しか興味がない」

「貴様あああ　　！！」

剣に光が収束していくのを間近で見てしまったガルバは、彼女から離れていく。彼を逃がすつもりもないジュリアスは、剣に収束した光を解き放つために振るう。

「ほう……なかなかの腕前ではないか」

ジュリアスの剣から放たれたのは光の衝撃波。彼女はこれを光波（ひかりは）斬と呼ぶ。

眼前に襲い掛かる光の衝撃波にガルバを臆することなく、鞘に収めた剣で受け止めてしまう。それを片手で軽々と防いでいる彼は、焦ることもなく、もう一本の鞘に収めたままの剣の柄を握る。

「だが、拙者には届かない」

光の衝撃波を抑えている剣を振るうと、白い粒子となって霧散していく。彼は握っているもう一本を振るうと、衝撃波が放たれた。

剣に光を纏わせていたジュリアスは、一瞬よけようと悩むが、それを受け止めることにした。よけてしまえば、後ろにいる恵美や周りにいる者を巻き込ませてしまう。覚悟を決めたジュリアスは、光を纏わせた剣で正面から衝撃波を迎い撃つ。

襲い掛かるそれを斬るために、ジュリアスが剣を振るう。するとなにもなかったかのように、衝撃波は消えていた。

「耐えたか。しかし、これはまだ序の口だ」

もう一本の剣を使用することにしたガルバは、ジュリアスを嘲笑うかのように連続で衝撃波を放つ。光波斬を彼に放ちたいジュリアスは、襲い掛かる衝撃波を次々で剣で切り裂きながら機会をうかがっていく。

聖騎士であるジュリアスは光を剣に纏わせることによって、形ないものを斬ることができる。それは、いまのガルバの衝撃波を斬っていることが証拠を示し、さらに魔法までも同じことができる。

しかし、いくら形ないものを斬れたとしても剣に纏わせた光がなくなると、意味はない。衝撃波を何度も斬ったおかげで、剣に纏わせている光が消えかけている。すぐに光をかけよう、とジュリアスが動こうとしたときに、遠距離から攻めていたガルバが接近してきた。

「終われ」

蒼く輝く剣を鞘から抜いたガルバは、死神の鎌のように無慈悲に振り下ろす。ジュリアスは剣で捌こうとする前に、ガルバによって弾かれてしまい、抵抗することができない彼女は目を閉じた。

思い出すのは、出会ったばかりの少年である牟田吉夫。

彼と一緒にのはわずかな時間であったが、自分のことをしっかりと見つめ、他人が嫌がるような説明を最後まで聞いてくれる人である。戦闘狂である、と自覚している自分と楽しげに手合わせしてくれたこととか、昔のように思える。

ただ、心残りなのは彼に肩をマッサージしてもらっていないこと。それと、自分の始めてのキスをしてしまったことについて、いまだ

に責任を取ってもらっていない。

最後くらい彼の顔を見たかった、と心の中で不満を漏らしたジュリアスは、ぼそりと名前を呟いた。

「ヨシオ……さようならだ」

「てめえ、ジュリアスになにをしているんだッ!？」

怒声が聞こえ、瞼の裏からでも感じる事ができる強い光がどこから発生する。ガキンツという金属同士がぶつかり合う音が目の前から聞こえた。

恐る恐る閉じていた目を開いてみたジュリアスは、それを見て、何度かまばたきをしてしまう。自分の目を疑ってしまいたくなるが、いま、彼女の眼前には全身に雷を纏った吉夫が立っていたのだ。

彼の手にしている槍は白く輝き、それでガルバを牽制しながら自分のペースで攻めていく。

「おお、あの時の少女ではないか!」

「おれは女じゃねえ!　ジュリアス、ぼっさとしていないでさっさと剣を拾え!」

女呼ばわりされたことに腹を立てている吉夫は声を荒げる。彼に怒鳴られたジュリアスは剣を拾い、光を纏わせていく。することはただ一つ。光波斬を放つことである。

それをガルバにいつでも放てるようにジュリアスが構えていると、吉夫は、

「おれは、おまえを信用しているぞ」

顔を向けることもなく、彼は自分に信頼している、という言葉をかけてくれた。彼の期待を裏切りたくないジュリアスは、ガルバと接戦を繰り広げる吉夫に向けて剣を振り下ろす。第三者から見れば、ジュリアスのしていることは仲間を犠牲にしてまでも、相手を倒そうとしていることである。

けれども、吉夫は彼女のことを信頼しているから、自分に襲い掛

かる光の衝撃波のことなど気にする素振りすら見せない。

「さあ、ちよつとばかり痛い目に合ってもらうぞ、ガルバ」

全身から雷を放出させた吉夫は、それを眼前のガルバにくらわせる。放電と呼べるにふさわしいことをした吉夫は、膝を地につけるガルバから離れる。ガルバは放電をくらったせいかな、その場から動こうとはせずに、ジュリアスが放った光波斬をよけることができずに直撃する。

光の衝撃波はガルバを巻き込んだまままっすぐに突き進み、戦いを見守っていた人たちは勝利を確信する。中には、よしつと声を漏らす者がいたが、吉夫とジュリアスだけはそうではなかった。

彼らは光の衝撃波だけでガルバがやられるわけがない、とわかっていた。あれだけで終わるはずであれば、吉夫が放電をくらわせたときに気絶していてもおかしくはない。なのに、ガルバは気絶することもなく、こちらに目を向けてわざ（・・・）と光波斬を受けたのだ。

「ヨシオ」

「ああ、あいつはまだ死んではない」

「どうする？」

「決まっているだろう？」

おれと一緒に戦ってくれよ、ジュリアス。さっきは、おまえを傷付けなくなかったが、いまはおれの背中を預けてやるよ」

「ば、馬鹿者！　このような場で私を口説くとは」

口説くとはおかしいではないか！　と続きを口にしようとしたら、吉夫が自分の腰に腕を回して、そのまま抱え、横へ飛んだ。なっ！と驚きを隠せないジュリアス。彼に抗議しようかとしたら、さっきまで自分たちがいた場所に、ガルバが剣を振り下ろしていた。

轟ッ！！

と彼が握っている真紅に輝く剣から炎があふれ、地面を焼き尽くす。地面を焼き尽くす炎は、意思を持っているかのように蛇のような動きをしながら迫ってくる。

「すまない」

吉夫はジュリアスにそう呟くと、彼女を放り投げた。とつさに落ちる前に受け身を取った彼女は、彼がなにをするのか見ていると炎に突っ込んだ。彼に襲い掛かるのは、炎によって形作られた蛇。吉夫は全身に纏わせている雷を放電させていくと、彼を食いちぎろうとしていた炎の蛇は霧散していく。放電したまま彼は炎に突撃すると、そこから極冠の寒さを感じさせる烈風がジュリアスまで吹いた。

烈風に押されてしまった吉夫は、宙で体勢を立て直し、炎があった場所を見つめていた。そこにいたのは、真紅に染まる剣と蒼く輝く剣を交差させるガルバの姿がいた。

「燃え尽きろ。凍り付け」

一度に二つの言葉を口にしたガルバを見てしまったジュリアスは、とつさに光波斬を放つために構える。

彼がしていることは、あの二振りの剣の性能を最大限に発揮させること。魔法の言葉>マジックワード<。あれが魔導具であれば、ガルバしていることは吉夫を倒すための必殺技に等しい。しかも、魔法の言葉>マジックワード<を連続で詠唱するということは、ガルバはその剣の持ち主にふさわしい実力者であると示している。

一度に複数物の魔導具を最大限に発揮させることができるのは、魔力と精神力が高い者ができること。

そして、魔力、精神力、加えて彼の剣術を足してしまえば 吉夫などあつという間に倒されてしまう。

「屍と成り果てろ」

二振りの剣を、いまだに宙にいる吉夫に向けて振るうガルバ。剣からすべてを燃やし尽くす獄炎、生きる者の生命力を奪う吹雪が吉夫に迫っていく。

いつでも光波斬を放てるように準備していたジュリアスは、ためていた光を爆発させ、獄炎と吹雪に剣を振り下ろす。吉夫に迫りかけていた二つの炎と氷は、ジュリアスが放った光の衝撃波によって

無理矢理進路を変化させる。

それらは吉夫に届くこともなく、彼は無事に地面に着地した。ふうと安堵の息をつくジュリアスはここが戦場である、と思い出すと剣を正眼に構える。

「ありがとう、ジュリアス」

彼の声を聞いたかと思うと、白銀にきらめくなにかがガルバに接近していく。それが吉夫であると気が付いたジュリアスは、彼の手助けをするために駆け寄ろうとするが、

「来たれ、魔物よ！　いまこそ、ユグドラシルを滅ぼすときだ！　　転移！」

ガルバが力強く叫び、彼を中心とするように魔法陣が浮かび上がる。大きな魔法陣が展開させると、そこから緑色の生物たちが次から次へと地面からあふれてくる。その緑色の生物たちの正体は、魔物であるゴブリンやオークであった。

あの魔物たちは、すべてフィオナの森で見かけた類である、と気が付いたジュリアス。だが、いまはそんなことよりも、吉夫のフォーであった。

「さあ、少女よ！　拙者とどちらが強いのか競おうではないか！」

「おれは、女じゃねえ！」

魔物たちがうごめく場所で吉夫とガルバが接触し、赤と青、そして閃光が激しくぶつかり合う。二人が激突したおかげで、彼らの周囲にいた魔物たちは弾き飛ばされていき、命を奪われていく。

吉夫のフォーができないと悟ったジュリアスは、すぐに恵美のところまで駆け出す。彼女は这个世界に來たばかりで、やることがあるとするば刀を振るうことのみ。魔法など使用することができない恵美が、大量の魔物に襲われたら無事ではすまない。

「邪魔だあああ　　！！」

道をふさぐ魔物を剣で切り裂いていくジュリアスは、ひたすら足を動かしていく。彼女の鬼のような表情を目にした魔物は、本能的に恐れを抱き、自分を守るために牙を向ける。

しかし、いまのジュリアスはそんなことで止まることなどなかった。牙を向ける魔物には容赦なく斬り捨て、恵美のところまで光波斬を使用しながら走っていると、ついに彼女を見つけた。

恵美は、荒く息をつきながら襲い掛かる魔物に刀を振るい、返り討ちにしていく。また一匹、彼女に斬り捨てられる哀れな魔物が命を絶たれるが、そのことを相手は気にしない。

なぜなら、彼女の周囲には、輪を描くように魔物が囲んでいるからだ。たとえ、仲間が死んだとしても、すぐに他の魔物が襲い掛かるから恵美に休憩させることを許さない。

「メグミから離れるおおおお　！」

光波斬を彼女の周囲にいた魔物にくらわせると、光の衝撃波によって彼らは吹き飛ばされていく。おかげで、こちらの存在に気がついた魔物たちが牙を向けてくるが、ジュリアスは構うことなく返り討ちにしていく。

ある程度の魔物を蹴散らしたジュリアスは、恵美に近寄ると彼女を背中合わせとなつて、それぞれの敵と対峙する。

「大丈夫か、メグミ？」

「ジュリアスさんのおかげでなんとか生きているよ」

「そうか……では、私も一緒に戦わせてもらっぞ」

「お願いするね、ジュリアスさん」

背中合わせとなつた恵美と共に魔物を倒していくジュリアスは、剣に光を纏わせて光波斬を放っていく。

「く、一体どこに行つたのだ……！？」

過去を振り返っていたジュリアスは襲い掛かる魔物を切り捨てていくと、あることを思い出した。オークという魔物は、自分の子孫

を残すためにさまざまな種族の女性を襲い、孕ませていくということ。それは、彼らが子供を孕めると認めた女性だけではなく、たとえ子供であったとしても美しければ犯すのだ。

自分たちの性欲を満たすために、オークは女性を襲い、犯し、孕ませる。アースという世界で生きる女性たちにとってはオークという魔物は天敵であり、一度でも彼らに犯されたら精神が狂ってしまう。彼らの子を出産したあとも、オークはたとえ女性が狂っていても自分の性欲を満たすためだけに、彼女たちを犯す。

この場　フィオナの森の駐屯場にいるのは騎士だけではなく、もちろん冒険者の女性もいる。彼女たちは自分たちの身を守るために戦っているが、オークに目をつけられたら最後だ。あの魔物は、この戦場からこっそりと抜けて、複数の仲間たちとともに楽しんでいるという光景を何度か目撃してしまった。ジュリアスは、彼女たちを助けたかったがいまは仲間である恵美が優先であった。

「すまない……！」

見捨てることしかできない彼女は、光波斬を放ちながら戦場を駆け抜けていくと、聞き覚えのある声が聞こえた。

「きゃああああ……！」

「メグミ……！」

仲間である恵美の声を聞いた瞬間に、ジュリアスは光波斬をいつでも放てるように構えていたが、すぐになにもできないと悟る。

複数のオークに囲まれている恵美の服は乱暴に破り捨てられ、真っ白な白い肌をした肩口が露わとなっていた。目元に涙を浮かべ、抵抗しようとしている恵美だが、彼女を拘束しているオークはしっかりと掴んでいたで逃げることはできない。

光波斬をオークにくらわせようとしても、恵美を巻き込んでしまっからなにもできない。下品な笑みを浮かべるオークは、己の欲望の塊を取り出す。

それを見てしまった恵美は声にならない悲鳴を上げてしまう。オ
ークにとっては彼女の反応が愉快なのか、恵美の頬を汚い舌でべろ
つとなめた。恵美は彼らから逃れようと体をじたばたさせるが、オ
ークの前では無意味であった。

彼女を助けたいジュリアスはメグミを怪我させてまでも救いたい、
と決心し、剣を構えるジュリアス。

しかし、光波斬は放たれることはなかった。

お知らせ

この小説「勇者の剣と黒き槍」をリメイクしたいと自分の作品を読み直しましたら、

そのような感想を抱きました。

納得できないシーンや視点のブレ、世界観、魔法の設定、国……などなど

ありましたので、

これらをひつくるめてやり直したいと思います。

一週間後の12月28日の夜7時に現段階まで投稿している話を削除させていただきます。

誠に自分勝手ですが、どうかご理解をいただきたいと思います。

よりよい小説を作るためにやりますので、

再び投稿することになりましたら、そのときはもう一度読んでいただきたいと思います。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970u/>

勇者の剣と黒き槍

2011年12月21日18時45分発行